

関 越 自 動 車 道

埋蔵文化財発掘調査報告書

下倉山城跡

権現平遺跡

両新田遺跡

1985

新潟県教育委員会

関 越 自 動 車 道

埋蔵文化財発掘調査報告書

下倉山城跡

権現平遺跡

両新田遺跡

1985

新潟県教育委員会

## 序

新潟県下では、昭和53年秋に北陸自動車道新潟一長岡間が、昭和55年秋には長岡一西山間が開業し、また上越新幹線新潟一長岡間で試運転が始まった。関越自動車道も着々と工事が進められており、両計画の完成は首都圏との時間的距離を短縮させ、より多くの交流を促すことによる文化・経済に及ぼす効果は絶大なものを期待できよう。

本書は、関越自動車道建設に伴い消滅を余儀なくされた三遺跡の発掘調査報告書である。温故知新、先人たちの嘗々たる嘗みの中に、豊かな明日を約するものが秘められているといわれるが、本書がいささかなりとも役立つものとなればと願っている。

最後に、調査実施にあたり御協力いただいた日本道路公団新潟建設局、小千谷市・川口町・堀之内町・小出町・広神村・湯之谷村の各教育委員会、地元住民の方々に深く謝意を表します。

昭和 60 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 久間 健二

## 例　　言

1. 本報告書は関越自動車道建設に係る埋蔵文化財包蔵地のうち、昭和55年度に日本道路公団から新潟県が委託を受け、県教育委員会が発掘調査を実施した三遺跡の発掘調査記録である。
2. 本報告書で掲載したものは、下倉山城跡（北魚沼郡堀之内町大字下倉字流沢）、椎現平遺跡（同根小屋字瓜ヶ沢）、両新田遺跡（小千谷市大字桜町字天田）で、この順序で掲載した。
3. 発掘・整理等一連の作業は、県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員が主にあたり、一部を委託した。
4. 発掘調査によって得られた遺物は、それぞれ次の略号を記し、一括して県教育委員会が保管している。

下倉山城跡……S K      椎現平遺跡……B U      両新田遺跡……両
5. 本報告書の執筆は、下倉山城跡は発掘担当者を中心にして調査員と協議の上で分担し、各文末に執筆者の氏名を記した。また、椎現平遺跡は佐藤雅一が、両新田遺跡は藤巻正信が担当し、藤巻正信がこれを編集した。なお、本報告書は昭和55年度中に脱稿したものである。
6. 発掘調査にあたり、参加者各位及び住民各位のご支援とご協力を賜わった。また、日本道路公団新潟建設局・県高速道路課から種々のご配慮をいただいた。記して感謝の意を表したい。
7. 本報告書の作成にあたり、次の諸氏から適切なご指導とご助言を賜わった。記して感謝の意を表したい。(敬称略・五十音順)

石坂圭介・古田島善徳・桜井伝衛門・佐藤則之・角屋久次・竹石健二  
寺崎裕助・富樫雅彦・水野正好・村田修三・村田文夫・八木次男

## 目 次

### 下倉山城跡発掘調査報告

I 序 説	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の経過	2
II 環 境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	6
3. 下倉山城の概観	7
III 調 査	8
1. 第1地点	9
2. 第2地点	9
3. 第3地点	10
4. 第4地点	10
5. 下倉山城跡出土人骨所見	31
IV 総 括	33
1. 発掘遺構の形成と性格	33
2. 5号墓壙・7号墓壙出土人骨の歴史的性格	34
〔付〕 緊急追加調査報告	36

### 権現平遺跡発掘調査報告

I 調査に至る経緯	39
II 遺 跡	40
1. 地理的位置と周辺の遺跡	40

2. 発掘経過	43
3. 層位	44
<b>III 遺構と遺物</b>	<b>45</b>
1. 先土器時代	45
(1) Aユニット	45
(2) Bユニット	45
(3) 母岩別資料	49
2. 縄文時代・中世	54
<b>IV まとめ</b>	<b>55</b>

### 両新田遺跡発掘調査報告

<b>I 序 説</b>	<b>63</b>
1. 発掘調査に至る経過	63
2. 遺跡の環境	65
3. 周辺の遺跡	65
4. 発掘調査の経過	66
<b>II 調 査</b>	<b>70</b>
1. グリッドの設定	70
2. 層序	70
3. 遺構	70
4. 遺物	78
<b>III まとめ</b>	<b>86</b>
1. 縄文時代	86
2. 近世	87
3. その他	87

## 挿図目次

### 下倉山城跡

第1図	福王寺氏小旗之絵図	3
第2図	周辺の地形と遺跡	5
第3図	新潟県指定史跡下倉山城跡平面図	折込み
第4図	発掘地点位置図	8
第5図	第1地点平面図	9
第6図	第2地点平面図	10
第7図	第4地点平面図	11
第8図	1号土壙状遺構出土遺物	12
第9図	1号土壙状遺構	折込み
第10図	2号土壙状遺構	折込み
第11図	1号塚状遺構	13
第12図	2号塚状遺構	14
第13図	3号塚状遺構	15
第14図	4号塚状遺構出土遺物	16
第15図	4号塚状遺構	16
第16図	5号塚状遺構出土遺物	17
第17図	5号塚状遺構	17
第18図	6号塚状遺構	18
第19図	7号塚状遺構	18
第20図	8号塚状遺構	19
第21図	9号塚状遺構	20
第22図	9号塚状遺構出土遺物	20
第23図	(上) 10号塚状遺構 (下) 11号塚状遺構	21
第24図	(左) 1号墓壙 (右) 1号墓壙出土遺物	22
第25図	(上左) 2号墓壙 (上右・下) 2号墓壙出土遺物	24
第26図	(左) 3号墓壙 (中) 3号墓壙出土遺物 (右) 4号墓壙	25
第27図	(上左) 5号墓壙 (上右) 5号墓壙出土遺物 (下左) 6・7号墓壙 (下右) 6・7号墓壙出土遺物	26
第28図	(左) 8号墓壙 (右) 8号墓壙出土遺物	27

第29図	(左) 9号墓壙 (右) 9号墓壙出土遺物	28
第30図	第4地点完掘平面図	29
第31図	(左) 17号土壙 (右) 23号土壙	30
第32図	第4地点表土中出土遺物	30
第33図	緊急追加調査実施状況	37

#### 権現平遺跡

第1図	周辺の遺跡と地形	41
第2図	発掘調査区	42
第3図	グリッド及び発掘区	44
第4図	遺物分布状況	折込み
第5図	第1号縄群	45
第6図	第2号縄群	46
第7図	第3号縄群	46
第8図	先土器時代資料I (1~3: Aユニット, 4~14: Bユニット)	47
第9図	先土器時代II (Bユニット)	48
第10図	碎片数量グラフ	49
第11図	母岩別資料A及び欠失剝片・剥片剥離工程模式図	折込み
第12図	母岩別資料A接合状態	51
第13図	母岩別資料A	52
第14図	縄文時代・中世の遺物	54
第15図	母岩別資料分布状況	56
第16図	権現平遺跡周辺河床縄の組成	56

#### 両新田遺跡

第1図	周辺の遺跡	64
第2図	グリッド配置図	69
第3図	塚平・断面図	71
第4図	造構分布図	72
第5図	1号方形周溝状造構	74
第6図	2号方形周溝状造構	75
第7図	縄文時代造構平・断面図	76
第8図	縄文時代造構平・断面図	78

第9図	縄文時代遺構配置図・縄文時代遺物分布図	79
第10図	確認調査出土遺物	82
第11図	出土遺物	83
第12図	出土遺物	84
第13図	出土遺物	85
第14図	方形周溝状遺構類例	88

## 図 版 目 次

### 下倉山城跡

図版第1図	下倉山城跡航空写真		
図版第2図	(上) 下倉山城跡遠景	(下) 第1地点	
図版第3図	(上) 第2地点	(下) 第4地点遠景	
図版第4図	(上) 第4地点発掘風景	(下) 1号土壙状遺構	
図版第5図	(上) 2号土壙状遺構	(下) 1号塚状遺構	
図版第6図	(上) 2号塚状遺構	(下) 3号塚状遺構	
図版第7図	(上) 4号塚状遺構	(下) 5号塚状遺構	
図版第8図	(上) 6号塚状遺構	(中) 同 石組上 (下) 同 石組下	
図版第9図	(上) 7号塚状遺構	(下) 8号塚状遺構	
図版第10図	(上) 9号塚状遺構	(下) 10号塚状遺構	
図版第11図	(上) 2号墓壙	(下左) 同 釘出土状況 (下右) 同 鏊出土状況	
図版第12図	(上) 3号墓壙	(下) 4号墓壙	
図版第13図	(上) 5号墓壙	(下) 6・7号墓壙 (下右) 7号墓壙頭骨出土状況	
図版第14図	(上) 8号墓壙	(上右) 同 錢貨出土状況 (下) 9号墓壙	(下右) 同 錢貨出土状況
図版第15図	第4地点出土遺物(1)		
図版第16図	第4地点出土遺物(2)		
図版第17図	1 下倉山城跡古絵図	2 下倉村古絵図	
図版第18図	1 下倉山城跡18号標本	2 下倉山城跡21号標本	

図版第19図 3 下倉山城跡19号標本

権現平遺跡

- 図版第20図 権現平遺跡遠景・発掘作業風景  
図版第21図 第1号礫群 Aユニット出土状況  
図版第22図 Bユニット出土状況 第2号礫群  
片面調整尖頭器出土状況  
図版第23図 先土器資料I  
図版第24図 先土器資料II  
図版第25図 母岩別資料A  
図版第26図 母岩別資料A接合状態  
図版第27図 純文時代・中世の遺物・欠失剥片

両新田遺跡

- 図版第28図 確認調査風景  
図版第29図 塚・塚断面  
図版第30図 1号方形周溝状遺構  
図版第31図 1号方形周溝状遺構  
図版第32図 1号方形周溝状遺構  
図版第33図 2号方形周溝状遺構  
図版第34図 2号方形周溝状遺構  
図版第35図 2号方形周溝状遺構  
図版第36図 J-2号遺構 J-2号土層断面  
図版第37図 J-4・5号遺構 J-6・7号遺構  
図版第38図 J-1号遺構 J-9号遺構  
図版第39図 確認調査出土遺物  
図版第40図 出土遺物  
図版第41図 出土遺物  
図版第42図 出土遺物

## 表 目 次

### 下倉山城跡

第1表	下倉山城跡年譜	折込み
-----	---------	-----

### 権現平遺跡

第1表	礫觀察表	58
第2表	母岩別資料A観察表	58
第3表	欠失剥片觀察表	58
第4表	剝片・碎片（ドット処理）観察表	59
第5表	剝片・碎片（グリッド処理）観察表	61

### 両新田遺跡

第1表	出土遺物一覧表	80
-----	---------	----

# 下倉山城跡発掘調査報告

# I 序 説

## 1. 発掘調査に至る経緯

北魚沼郡堀之内町下倉字裏山769他に所在する下倉山城跡は、本県下における典型的な中世城跡であるとともに諸戦闘に係る文献史料もよく遺存しており、同館跡・万福寺跡と併せて昭和52年3月31日付け史第56号で新潟県史跡に指定され、その保存がはかられている。

一方、昭和32年に公布された「国土開発幹線自動車道建設法」にもとづいて開始された関越自動車道の建設に際し、本城跡の一部を含むかたちで法線の発表があり、県教育委員会と日本道路公团との間で、その取扱いについて協議を進めた結果、昭和52年9月19日の段階で法線変更は不可能であるとの結論に達した。これを受けて、城郭遺構・史跡範囲と道路法線との位置関係及び工事手段・環境との調和等を含めて調査・協議が続けられ、昭和54年11月6日の現地協議を経て、同月9日付け新建総裁第867号で日本道路公团新潟建設局長から最終協議書の提出があった。県教育委員会では、史跡範囲内及び関連区域についての発掘調査・記録保存の方針を決定した。史跡については、法線部分について昭和55年4月7日付け新建総裁第267号で日本道路公团新潟建設局長から現状変更の申請がなされ、県教育長は発掘調査の実施等の条件を付して、同年4月15日付け教文第222号で許可を通知した。

以上の経緯を踏まえて調査計画を立案し、昭和55年8月27日に最終現地協議で調査対象範囲・協力関係について確認をし、昭和55年9月1日付け教文第649号で文化庁長官宛に通知し、昭和55年9月24日から同年10月25日の間、発掘調査を実施することとなった。

なお、調査体制は次のとおりである。

(波田野至朗)

調査主体	新潟県教育委員会	(教育長 久間健二)
管 理 総 括	南 義昌	(県教育庁文化行政課長)
管 理	石山 欣弥	(県教育庁文化行政課長補佐)
庶 務	近藤 信夫	(県教育庁文化行政課副参事)
	獅子山 隆	(県教育庁文化行政課主事)
	伊藤 和子	(県教育庁文化行政課主事)
指 導	金子 拓男	(県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)
調 査 調 査 担 当	波田野至朗	(県教育庁文化行政課学芸員)
調 査 員	北村 亮	(県教育庁文化行政課学芸員)
	田辺 早苗	(県教育庁文化行政課嘱託)
	佐藤 雅一	(県教育庁文化行政課嘱託)

調査員	浦沢健三郎 (県文化財保護指導委員)
	池田 穎 (県立六日町高等学校教諭)
作業員	北魚沼郡堀之内町・小出町・湯之谷村・広神村 入広瀬村・川口町・十日町市の有志
人骨鑑定	鑑定担当 吉岡 敏雄 (日本歯科大学新潟歯学部教授)
	鑑定員 笠川 一郎 (日本歯科大学新潟歯学部助手)
	高橋 正志 (日本歯科大学新潟歯学部助手)
	高橋 啓一 (日本歯科大学新潟歯学部助手)
調査協力	堀之内町教育委員会 小出町教育委員会 湯之谷村教育委員会 広神村教育委員会 新潟県指定史跡下倉山城跡保存会

## 2. 発掘調査の経過

発掘調査は、要害と館跡である龍泉寺の中間地域にあたる日本道路公団用地内3,726m<sup>2</sup>を対象とし、沢地部・墓地等の立会調査区域を除く2,115m<sup>2</sup>について実施した。また、実施区域を4地点に分け、旧史跡内の小郭を第1地点・通称馬立場を第2地点・沢地部を第3地点・館跡隣接部を第4地点と仮称した(第3図)。調査期間は、天候・新遺構の検出等により延長を余儀なくされ、10月31日までを要した。

### 調査日誌抄

9月24～9月27日 (晴4日)

現場詰所開設・関係町村教育委員会と事務連絡。トラバース設定。第1・第2地点地形測量。史跡内堀之内町有地の雜木一部整理の許可要請・得許諾。航空写真測量について委託業者へ現地細部指示。26日 桜井広神村教育長・本多同社会教育係長來訪。27日 会議のため調査休止・帰庁。

9月29～10月4日 (晴6日)

作業員稼動。小出郷消防署へ伐木焼却処理届出。県立小出病院へ緊急時の受け入れ要請。航空写真測量に関連して史跡内郭群の雜木伐採(～10月8日)。第1地点発掘・人工の郭遺構と確認すれども、遺物・柵列痕等全く検出されず。第2地点、雜木整理の後発掘開始(～10月9日)。第4地点雜木伐採。墓地移転始まる。龍泉寺蔵旧五社権現神体調査。29日 平山公団庶務課長・桜井保存会員來訪。2日 井口小出町公民館長・八海同文化財保護委員等來訪。3日 大平小出町文化財保護委員長來訪。

10月6日～10月11日 (晴1日・曇2日・雨3日)

史跡内郭群の雑木整理により、未周知の郭続々確認。第2地点発掘終了、人工造成地と思われ、馬立場という俗称もあるが、関連遺物・諸施設痕は皆無。第4地点発掘開始（～10月31日）。2号土壙状遺構に重複する10号墓壙から火葬骨出土。墓地改葬により遺体続々発掘。大正初年の墓地造成時に表土は除去され、疊層中まで全面完全掘削を受けるため、改葬後の再調査は不可能と判断。7日豪雨・作業休止。8日角屋新潟県議会議員視察。9日中本公團副所長・平山同庶務課長・浦本同工事長來訪。10・11日会議のため調査休止・帰府。

10月13日～10月18日（晴3日・曇2日・雨1日）

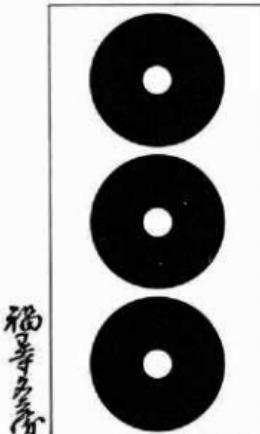
第4地点発掘継続。土壙状遺構・塚状遺構の各詳細平面図の作図後、表土排土・半截。各土層図作図。それぞれ意図的な方法による盛土遺構と考えられる。龍泉寺蔵古文書調査。万福寺との関係を広神村万行寺へ照会。明治初期の土地登記状況調査。14日台風接近・作業休止。16日松本J・V所長來訪。18日山田掘之内町教育長・小田島同社会教育係長・宮同文化財専門委員來訪。平沢堀之内中学校教諭引率郷土クラブ生徒9名見学。

10月20日～10月25日（雨6日）

第3地点掘削立ち会い。表土下は砂礫混入粘性土が堆積、約2mで粘土層に達す。無遺物。第4地点発掘継続。土壙状遺構・溝状遺構間の溝内から土壤検出。土壤内から北宋銭・明銭・鉄製品・漆片等が出土し、土壤墓の可能性高まる。20日豪雨・作業休止。以後、天候回復は望みえず雨中決行。22日野口労働基準監督官・小田島町社会教育係長來訪。史跡内への墓地移転について協議。調査期間延長を決定。

10月27日～10月31日（雨5日）

第4地点発掘継続。早朝調査実施。土壤平面図及び断面図・完掘状態地形図作図。6号墓壙から人骨下顎部検出、墓壙と決定。銭貨の出土続き、これらも墓壙と推定。全調査区域の再確認。31日宮町文化財専門委員來訪。関係町村・関係機関へ調査終了の旨連絡し、詰所閉鎖、撤収帰府。（波田野至朗）



第1図 福王寺氏小旗之絵図  
(入廣瀬村原圖)

## II 環 境

### 1. 地理的環境

上越国境に源を発する魚野川は、新発田一小出構造線に沿った六日町盆地を北流する。川は堀之内町で流れを大きく西に変えて、魚沼丘陵の地峡を通過して川口町で信濃川に合流する。東には越後山脈、西には苗場山（2,145m）を頂点として北に向って次第に高度を下げる魚沼山地が併走する。信濃川最大の支流である魚野川は、信濃川・阿賀野川に次いで新潟県下第3位の流域面積を誇っている。この魚沼山地の北端の一支流、通称権現山に下倉山城は所在する。

権現山の南方には六日町盆地の北縁が広がり、魚野川には中小の河川が合流している。越後国境に源を発する破間川、越後三山を源流の地とする羽根川・佐梨川、他に大池川・日付川・小黒川等の小河川も数多く流入している。これらの中小河川の流域には広大な沖積地が広がり、その周辺部には15m前後の比高差をもつ河岸段丘が形成されている。この沖積地は南の小出町虫野や、西の小出町四日町、北の広神村並柳付近の山陵のせり出しによって閉塞されており、六日町盆地の北縁といわれながら、あたかも単独の小盆地であるかのような景観を呈している。下倉山要害は、権現山々頂を頂上郭とし南東山腹及び尾根上に郭を配し、さらに要害の東に接する段丘上に居館を構えている。この権現山は凝灰岩を基盤とし、その上層はシルト層<sup>(註1)</sup>で構成されている。また、山自体が西北西へ約12°～18°傾斜する单斜構造であり、これにそって覆流水が存在するため、山頂近くでも湧水が3地点で見られ、要害における水を確保している。

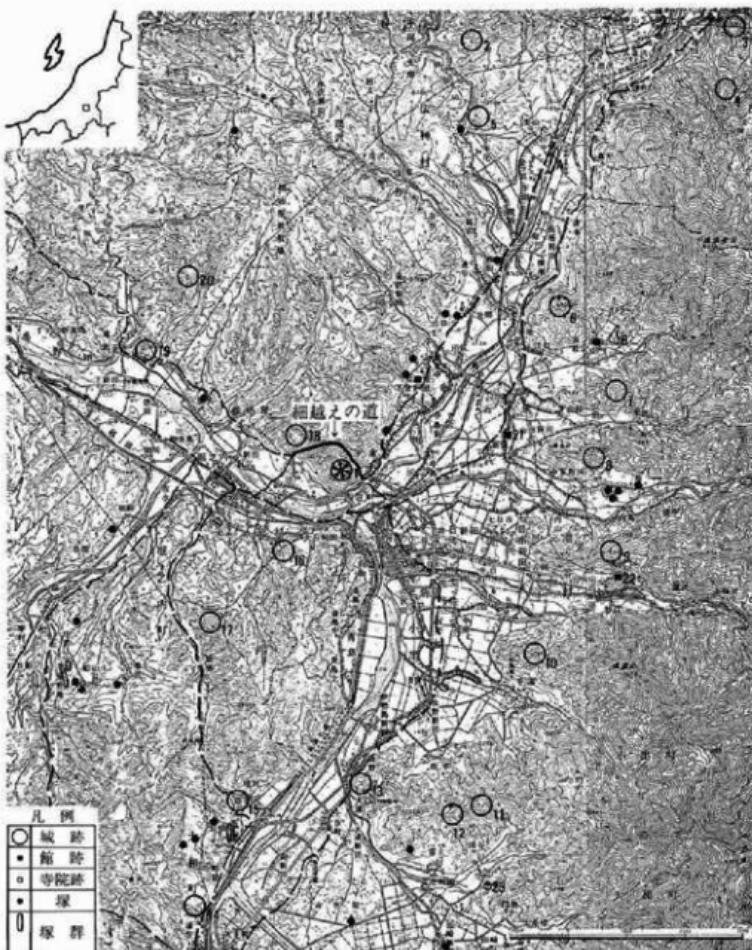
文献などから当時の様子を窺うと、天和2年の『下倉城絵図』では、破間川は館跡の所在する段丘崖付近を流れて小出町四日町で魚野川に合流している。この付近は自然地形の閉塞部にあるため、沖積段丘下は雨期の増水時に浸水するような氾濫原であったと推測される。このため、旧三国街道は四日町で破間川を渡り、館跡の北側から寺之沢を登って細越え沢から田戸村に至っていた。また、天和3年の検地帳によると、下倉村の水田面積は4反3歩で石高は記載されておらず、沖積地の利用はほとんどみられない。

付近の中世城郭の立地を見ると、各中小河川閑谷部の山陵上には例外なく構築されており、標高も300m前後とほとんど同一である。これは、当地域が関東口・会津口・古志口等への交通・軍事の要衝として、重要な意味をもっていたことを物語るものであろう。

（佐藤雅一）

（註1） 村上市東方から谷川岳北西まで延びる。河川との併走が顕著なのは本地域のみである。

（註2） 所謂魚沼層群の1つであるが、隣接する山地は同群ながら砂質等で異っている。



1. 下倉山城跡 2. 松ヶ城跡 3. 須川城跡 4. 峰崎城跡 5. 小太郎城跡 6. 平地城跡 11. 犬平城跡 8. 中宮城跡  
 9. 鈴巣城跡 10. 千溝城跡 11. 湯ノ谷城跡 12. 枝木城跡 13. 桑原城跡 14. 通佐城跡 15. 坡川城跡 16. 大石城跡  
 17. 堀之内城跡 18. 根小屋城跡 19. 天狗山城跡 20. 竜光城跡 21. 箕の内館跡 22. 大沢館跡 23. 福昌庵跡

第2図 周辺の地形と遺跡

(国土地理院発行 昭和48年「小千谷」昭和47年「須原」1:50,000原図)

## 2. 歴史的環境

奈良・平安時代の魚沼地方は魚沼郡と称され、加祢・那珂・刺上・千屋の四郷に分れていた。現在、これらの郷界は必ずしも明らかではなく、下倉が四郷のいずれに属していたのかは確認できない。しかし中世以来、北魚沼郡を中心とする地域は蔽神と称され、刺上郷のうちであった可能性が強い。<sup>(註1)</sup> 第2図に示した範囲におけるこの時代の遺跡は、現在5ヶ所確認されているのみであり、当地の考古学上の詳細は不明である。

平安時代末期に越後一国を支配していた城氏が源平の争乱期を経て滅亡し、文治元年(1185)、越後国は関東御分国となったが、13世紀後半から魚沼地方には新田氏の一族が進出した。南北朝時代になると、足利尊氏は新田氏鎮圧のために上杉憲顕を越後守護職に任じ、上杉氏の被官として長尾氏も入り込んできた。当地域における関東武士の進出と南北両勢力の盛衰の模様は、残存する110基の板碑の紀年銘からも知ることができる。このうち、下倉に隣接する広神村では、大字長松・連日に7基が確認されており、正平・応安の紀年銘をもつものがみられることから、南朝から北朝への勢力交代が知られる。

室町時代に入ると、長尾氏が上・中越地方を中心にして勢力を伸ばしていった。室町時代中期以降になると、上杉氏と守護代長尾為景(府中長尾)の対立が表面化し、永正の乱(1507~1513)がおこった。この乱以後、上杉氏に代って長尾氏が実権を握るが、長尾景虎(謙信)が守護代になるまで長尾一族間の権力抗争がくり広げられた。この間の下倉山城については、永正7年(1510)、江口親秀が「下倉ノ城」で為景方に立って戦っており、<sup>(註2)</sup> 上条の乱では天文4年(1535)、城主福王寺孝重が為景方に立って、上条方の長尾房長らと戦った。

天正6年(1578)、御館の乱がおこると、景勝方に立った下倉山城主佐藤平左衛門は景虎方の本庄秀綱らに攻められたが、防戦よくこれを撃退した。慶長3年(1598)、景勝の会津移封後は堀秀吉の家臣小倉正黒が下倉山城に配された。

第2図のようにこの地域には20余ヶ所の城郭がみられる。その中でも下倉山城は、古志方面から会津或いは関東にむける交通の要衝に位置し、軍事上の役割は大きかった。しかしその下倉山城も、慶長5年(1600)の上杉造民一揆で小倉氏が滅びたあと廃城となり、下倉村には堀家の代官所が設けられた。天和検地帳には「多屋」と「御倉屋敷」が記されており、代官の駐在所のほかに年貢米の収納施設をもっていたことがわかる。<sup>(註3)</sup> (佐藤雅一)

(註1) 『小千谷市史』上巻、『広神村史』上巻

(註2) 「藤原姓江口氏家譜正統版書」(米沢市立図書館文書)

下倉山城の初見。この年、福王寺孝重は長尾景景を援けて上野国宮野で戦っている。

(註3) 慶長10年代といわれる堀之内町宮家文書には、「仍唯今雪之内百姓とも隙時分候条、有人半分日數十日屋とい可申候。罷越へいはしら切候様ニ可申付候。則扶持方健ニ可遣候条、可成其意候。其許近辺下倉代官所へも□之通可被申付候」と記されている。



### 3. 下倉山城の概観（第3図）

下倉山城は魚沼盆地の北端出入口に所在する。この地は、地形的には広瀬谷から会津へ、湯之谷・上田から上野国へ、田河川から妻有郷へと交通の開ける位置にあり、魚野川・破間川の河川交通をも掌握する位置にある。さらに、軍事的には関東・魚沼勢の越後中郡への進出を抑え、監視するに最適な位置である。魚野川と破間川とに挟まれた北側の三角地帯は魚沼山地であり、その中央に根小屋放牧場がある。ここからほぼ真南に下る稜線は南端で二つに分かれ、東向の先端は権現山で下倉山城が存在し、西向の先端は八幡平と呼ばれる根小屋城が存在する。下倉山城は南一東に対応し、根小屋城は南一西にかけて視野を持ち堀之内の市街地から田川入りに対応する繩張りである。

本城跡は要害と居館及び鬼門守護の寺院とで構成されており、永正の乱に關係して長尾為景方の福王寺氏が在城していることから16世紀の初頭にはすでに存在していたと知られる。

要害である権現山の山頂は土壘状をなす①天上之台で、尾根続きの北側は大小の空堀で背後の山地との連絡を断ち、要害の独立性を高めている。繩張りは権現山の南斜面の高低差を利用し、基本的には主郭群と副郭群とから構成されている。主郭群は土壘状の天上之台から③箕之輪——⑦実城之平——⑨みの木段——無名の郭を降り、一段高くて番所風の⑪権現様之平と⑯権現ノ井戸の郭とをもって構成され、これらの西側には⑯石落シ土居と呼ばれる土壘が、東側にも天上之台から土壘が垂下し、東・北・西の三方を土壘で囲まれた雑段状の配置となっている。副郭群は主郭群の東に占地する。主郭群の天上之台の東に接する②井戸之上平から東降する尾根に沿って、小郭と⑯遠見之平とが造られ、先端は急崖となって沢に達する。遠見之平の下には⑯横矢之段——⑯待受之段が、やはり主郭群と同様に雑段状に並び、郭群の東端の崖上には遠見之平から土壘が築かれている。これら主郭群・副郭群の他には、主郭群の権現様之平の下に⑮御庭屋敷、副郭群の遠見之平の北側斜面には⑯阿彌米之平と呼ばれる比較的大きな郭がみられる他は、南東側斜面・北側斜面のフルネ（尾根）の所々に捨て郭と考えられる小郭が団のごとく多数みられる。

居館跡は要害の東方約300mに存在する。現在、方約60m程の平坦地が二段に削平されており、そのうちの下段には元和年中に建立された⑯竜泉寺があり、その東北側縁には土壘の残痕らしき高まりが認められる。かつてこの地は「土居之内」と呼ばれていた。居館の虎口は南東の段丘崖を利用して設けられており、外樹形の遺構を残している。

要害と居館とを守護する寺院は⑯万福寺といい、要害の北東方約400m・居館跡の北方約150mに存在する。参道・石段・野面積みの石垣及び一部の礎石が残っている。

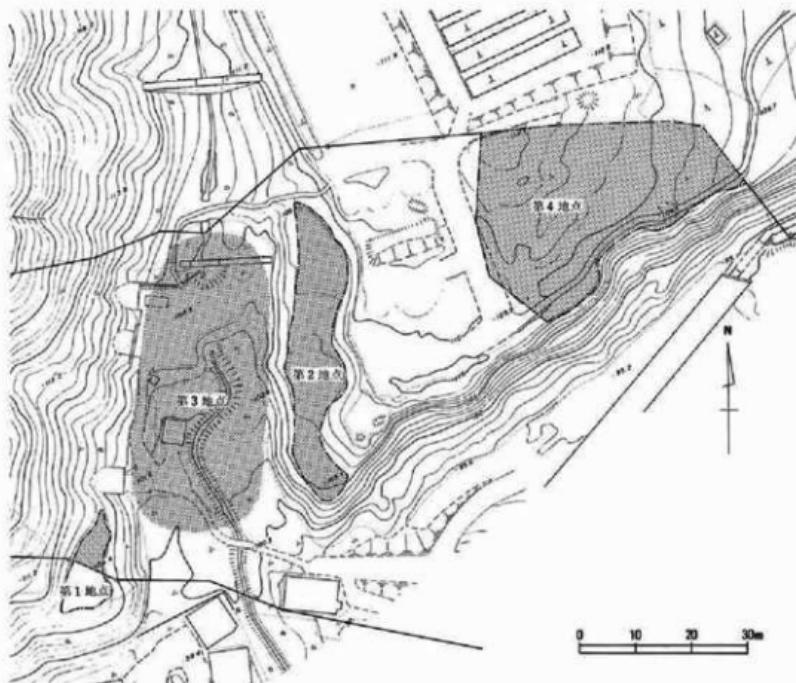
（金子拓男）

（註1） 郭の呼称は、調査員浅沢の地元呼称及び史料調査によって得られたものである。

（註2） P33掲載の『竜泉寺文書』による。

### III 調査

今回発掘調査対象となったのは県史跡下倉山城跡の南東最下段小郭とその東側の小沢（寺の沢）、寺の沢の東側上下2段の平坦部である。史跡内小郭を第1地点、下段平坦部（通称馬立場）を第2地点、寺の沢下流敷部を第3地点、上段の籠跡と隣接する平坦部を第4地点として調査を行った（第4図）。以下各地点ごとに発掘調査の状況を記し、第4地点については遺構と出土遺物をあわせて説明する。



第4図 発掘地点位置図

## 1. 第1地点

本地点は、要害東面の南東方向に延びる尾根上に造られた郭群中の最下段にある。標高は106.5mで、面積は88m<sup>2</sup>であるが、発掘調査は道路法線内（現状変更許可分）の44m<sup>2</sup>を対象として実施した。

旧状は雑木が繁茂し、表土は約10cmであった。郭は東に向ってわずかに傾斜しているもののほとんど平坦であり、尾根からの削り出しによって造られたものと考えられていた。

調査の結果、この郭のみは上方の2段と異なり、第2・第4地点と同様の堆積段丘が、寺の沢によって浸食された残存部を利用したものと考えられるに至った。柵列・排水施設などの遺構並びに遺物は全く検出されなかつた。

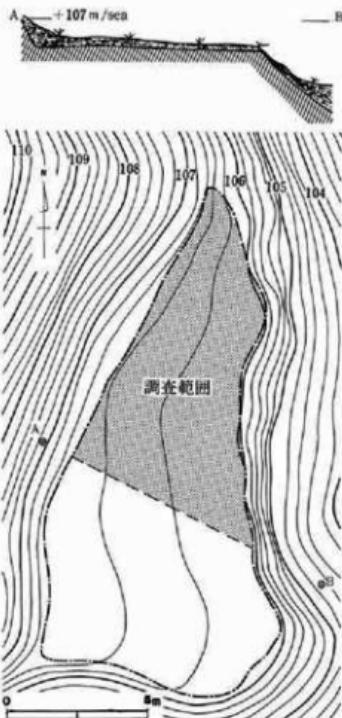
本郭の上方に位置する2段と共に、3段が一群となって機能していたものと考えられる。

## 2. 第2地点

本地点は、館跡の所在する段丘面西側の1段下にあり、寺の沢を挟んで要害と対峙している。面積は約500m<sup>2</sup>である。北から南に向って傾斜しており、その比高は約4mに及ぶ。南北約50m・東西4~11mと全体に不整形であり、先の傾斜の方向と合わせ考えると、本地点は、堆積段丘が寺の沢による浸食の結果形成された小河岸段丘面を利用したものであろう。

調査の結果、約15cmの表土下には、堆積段丘特有の礫を混入する地山が露出しており、また遺構は確認されなかった。本地点南端で陶磁器・ガラス類が多量に出土したが、いずれも近・現代のもので、墓地及び竜泉寺の危険物廃棄地とされていたことによるものである。本地点は、「ウマタテバ」（馬立場か）と俗称されており、近接した南側段丘下の沖積地が「馬場」と称されていることや、当地点から建物などの遺構が全く検出されていないことなどから、軍馬の繁殖地としての性格をもっていた可能性も考えられる。

（北村亮）



第5図 第1地点平面図

### 3. 第3地点

本地点は、第1・第2地点間の寺の沢という小沢下流敷部である。要害と館との間にあって天然の大堀の様を呈している。沢奥の西支谷は「堀切りの沢」と俗称され、要害と山稜尾根とを断絶する大空堀を経て、寺の沢と同様に流れる流の沢へと通じている。

調査対象部分の幅は平均25mを測り、第1・第2地点との現況比高は-6mであった。立会い調査の結果、砂礫層・粘土層のみで、遺物包含層及び明確な腐植土層は確認されなかった。

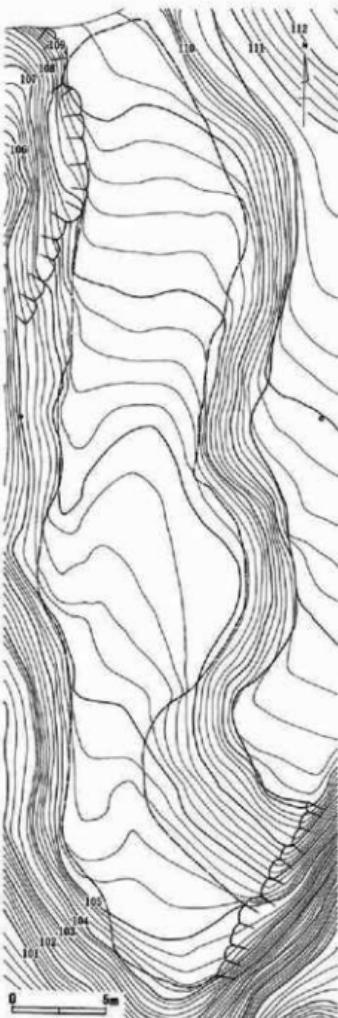
寺の沢の沢口は江戸時代前期には破間川の蛇行流突擊面にあたり、当時の遺物は板に投棄されたとしても直接破間川へ、また江戸時代後期以降の自然遺物などは調査対象外の小崩地へ搬出されたものと考えられる。  
(註) 堀之内町下倉、桜井伝衛門氏藏文化三年作成古絵図、他から推定。

(波田野至朗)

### 4. 第4地点

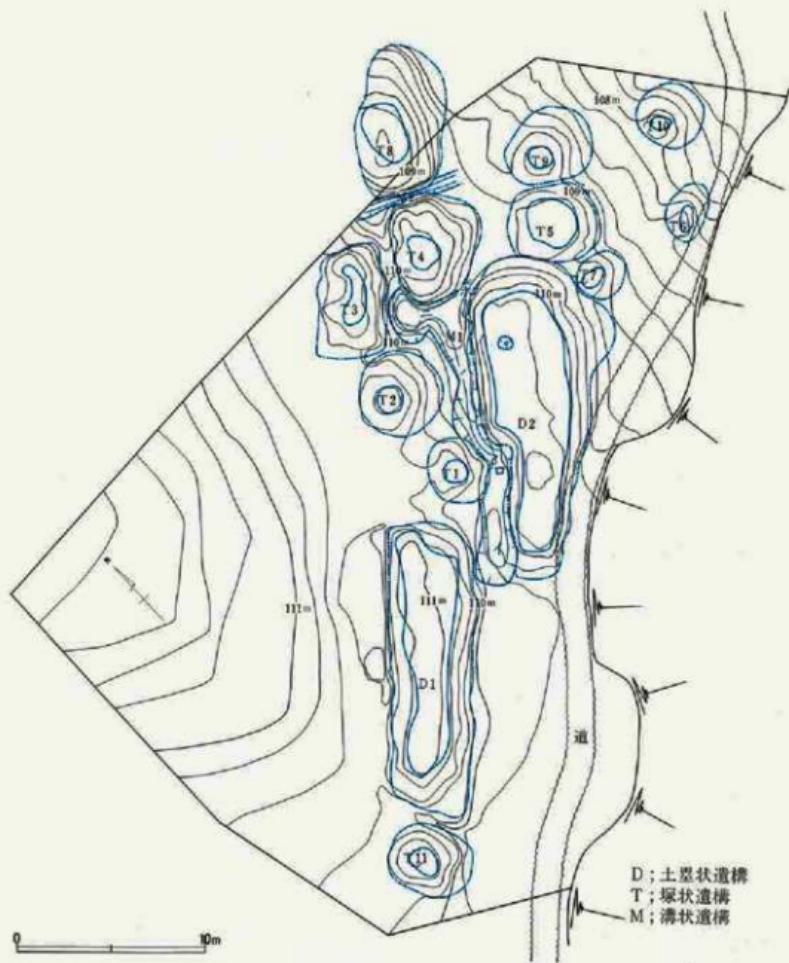
本地点は館跡の存在する堆積段丘上で、館跡の西に接する部分である。発掘調査対象面積は当初3,296m<sup>2</sup>であったが、西半部は大正初年からの墓地造成及び今回の墓地移転による掘削によって調査の不能なまでに搅乱されるため、対象から除外して立合いにとどめた。これにより実質発掘調査面積は1,571m<sup>2</sup>となった。

西側の緩斜面部分は開墾のため土壠・塚状造構等の存否は不明であり、また墓壙・土壙などは確認されず、造構は崖際12~15mに集中している。土壠状造構2基・塚状造構11基・溝



第6図 第2地点平面図

状遺構2本・墓壙10基・土塹45基を数える。以下各遺構を説明するにあたって、遺構名称は平面形から付し、調査段階では、各遺構が本来土塁・塚・溝であるのか否か断定しかねたため、各々を土塁状遺構・塚状遺構・溝状遺構と呼称した。土塁・塚状遺構の構築當時、表土



第7図 第4地点平面図

であった黒褐色土を旧表土と呼称し、毛根を多量に含む表土とは区別した。土壌・塚状造構下、周辺で多くの墓壙・土壤が検出されたが（第30図）、土壌・塚状造構の項には直接関係すると考えられる土壤についてのみ説明することとし、他は土壤の項で記す。

なお第7図は表土を除去した段階の平面図である。基盤層に多量に含まれる10~20cmの礫、他所から搬入された40cm前後の偏平大礫による礫群が土壌・塚状造構とその周辺に多数みられる。

#### a 土壌状造構

土壌状造構は、長軸が北東~南西方向の崖線にはほぼ平行して、2基が存在する。

1号土壌状造構（第8・9図、図版第4図下・第15図1） 平面形は隅丸長方形、断面形は蒲鉾形を呈し、長さ14.85m・幅4.50m・高さ0.90mを測る。南西部を中心とする側面には、10~20cmの礫が表面を覆うように堆積し、下方へいくにしたがって密になっている。また頂部平坦面には40cm前後の偏平礫を5個前後配した礫群が点在している。これらは、地元住民の話からボイニオの一部と確認されているが、以前からあった礫を利用しているものか、ボイニオのために搬入したものかは不明である。盛土は判然とはしていないが、基本的には旧表土上に黒褐色礫混入土（旧表土利用）・暗褐色礫混入土・黄褐色礫混入土・暗褐色土の四層を順次盛っている。盛土中の黒褐色礫混入土から掘り込まれた、大量に礫を含む土壤を検出したが、性格は不明である。本造構裾部で検出された3・4・8号土壤は、本造構裾部縁辺に沿っており、また造構の崩壊土によって埋まっていることから、本造構と同時期に存在したと考えられる。また造構周辺には旧表土がなく、土壤の掘削・周辺の削平は盛土を得るために行われた可能性が強い。遺物は1号塚状造構に面する裾部の表土中から、寛永通宝1枚が出土しているが、本造構の構築年代とは直接関係しないものと考えられる。

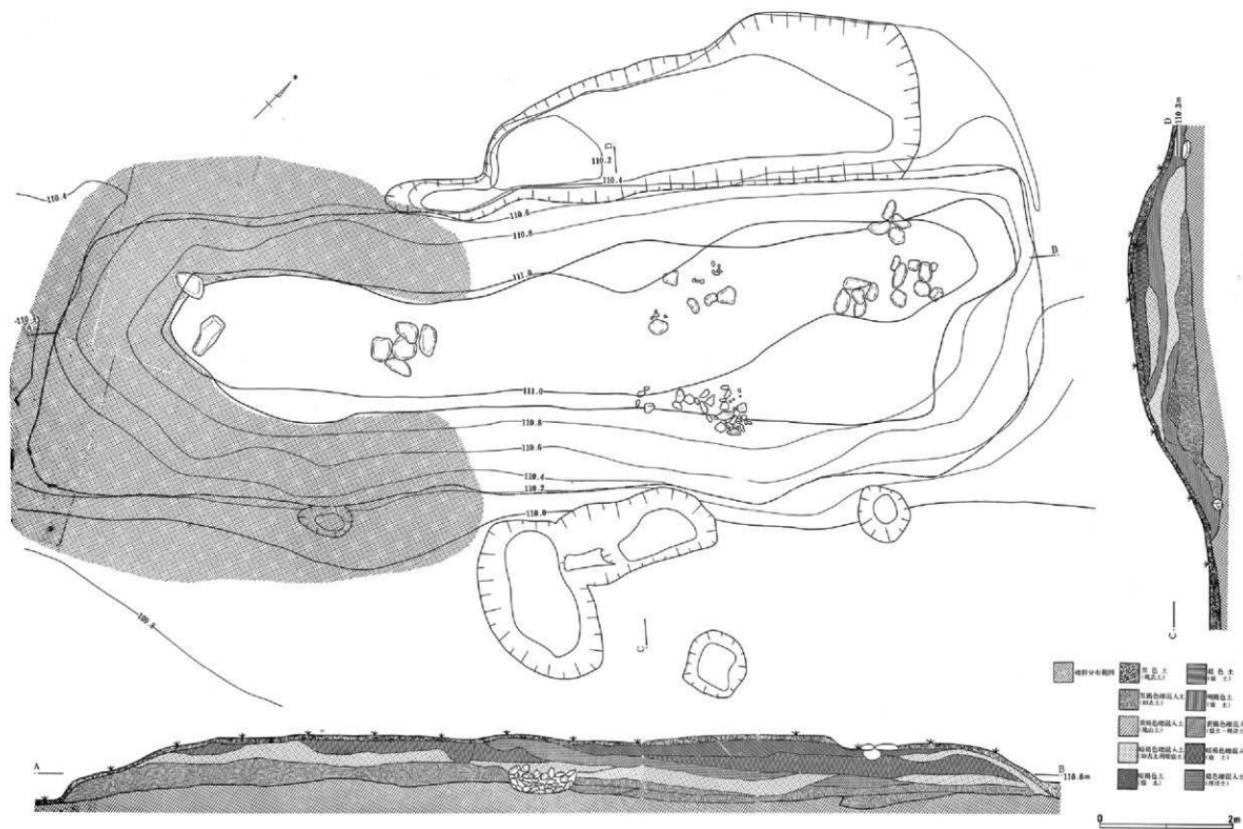
なお西に接する11 1号土壌状造構銭貨表

号塚状造構は、本造	寛永通宝	径2.25cm・厚さ 0.8mm	1626年~鋳 模最下層の土と同質であり、一連のものとして考えられる（後述）。
-----------	------	------------------	--

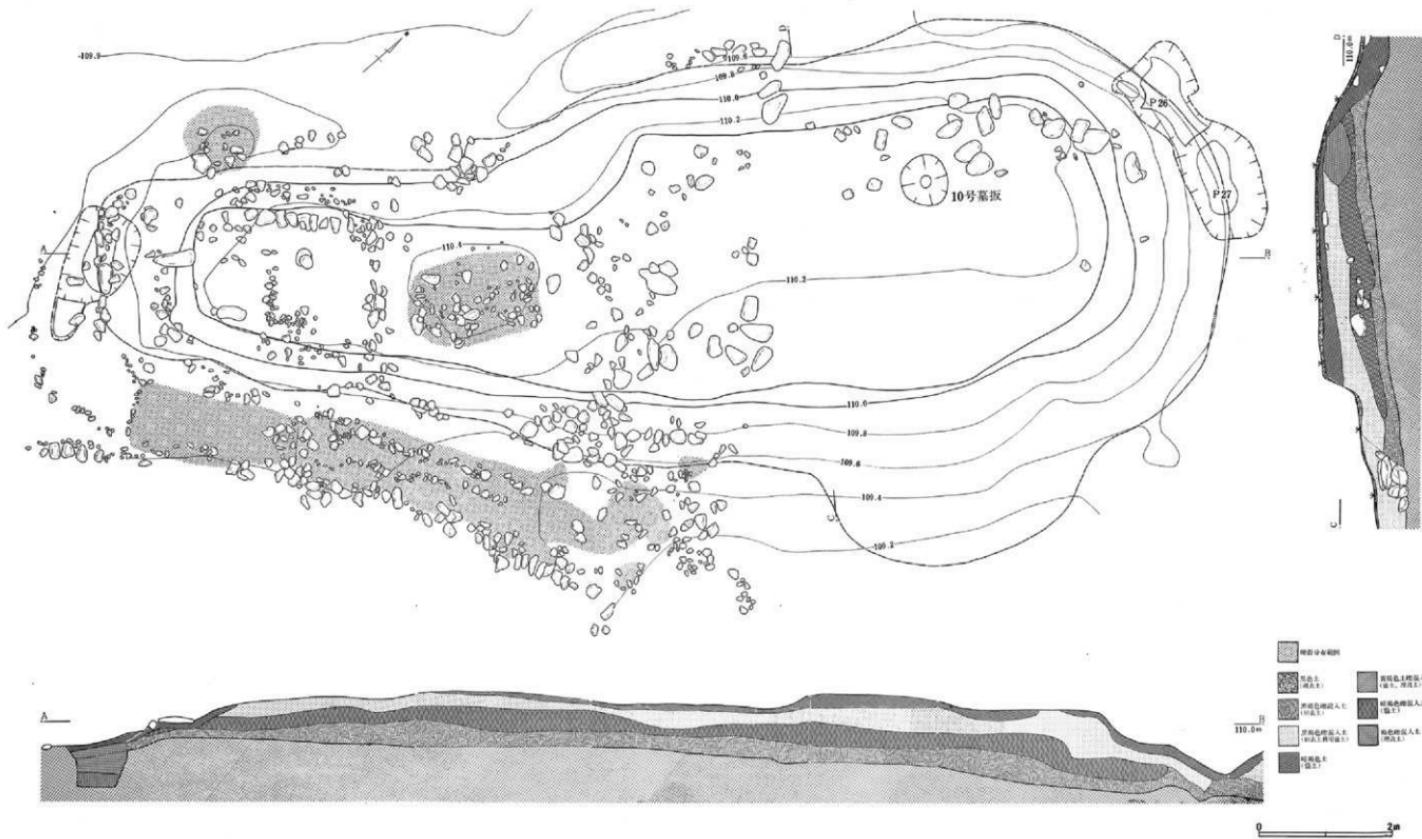


第8図  
1号土壌状造構  
出土遺物 (2/3)

2号土壌状造構（第10図、図版第5図上） 本造構の平面形は大小の長方形を連結したような形状で、南東側はほぼ直線、北西側はかぎの手状に屈曲し、断面形は台形を呈する。全長17.1m、南西部は幅3.6mで高さは0.7m、北東部は幅6.1mで高さ1.0mを測る。表面には礫が密集し、頂部平坦面南西側から三方の側面部（北西・南西・南東側）及びその周辺・1号溝状造構埋土中に至るまで、5~25cmの大小様々な礫で覆われている。頂部平坦面と側面の間に沿って並んでいる礫は、偏平な面を上に向け、側面に対して長軸を直交させて並んでおり、人為的な配列によるものと観察される。また北東頂部平坦面を中心に点在する40cm前後の偏平礫も1号土壌状造構上のものと同様にボイニオに利用したものである。盛土は3層を基本



第9図 1号土壙状遺構



第10図 2号土壌状造構

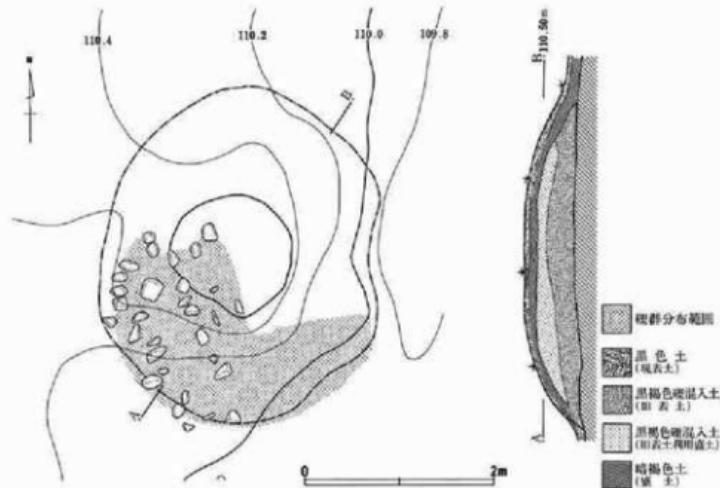
とし、旧表土上に暗褐色疊混入土・黒褐色疊混入土・暗褐色土を順次盛っている。北西部の1号溝状遺構に面する肩部には、基盤層である黄褐色疊混入土が一部に盛られており、これは1号溝状遺構を掘削した土を直接盛った可能性が考えられる。本遺構裾部縁辺から検出された26・27・30・31号土塊は本遺構の短辺に沿っており、意図的な配設の可能性がある。またそのうち30・31号土塊は上述の本土型状遺構周辺に広がる疊群下で検出されていることから、周辺の疊群は本遺構側面の崩壊によるものと思われる。

本遺構の南東側の崖沿いは、竜泉寺から西側の墓地へ向う道路になっており、その整備のために疊が敷設されており、第10図には崖線と道中央のくぼみに沿う疊の3列の並びを図化した。崖線に沿って、長方形疊の長軸を崖線に直交するように並べ、全体は10cm前後の疊を平らに敷き、その間にさらに小さな疊を詰めている。中央のくぼみは流水や道の使用によるもので、くぼみの下も同様に疊が敷設され、上面の疊下にのびており、道の整備が2回以上行われたことがわかる。本遺構脇は特に道幅が細くなっているので、安全のために整備したのであろう。

#### b 塚状遺構

確認時点において、平面形が円形に近い高まりのものを塚状遺構とした。確認数は11基である。これらの中には調査の進展とともに、土塚状遺構の一部となることが明らかになったものも、ここでは調査当初の名称を用いた。

1号塚状遺構（第11図、図版第5図下） 本遺構は平面形が梢円形、断面形が台形を呈し、長

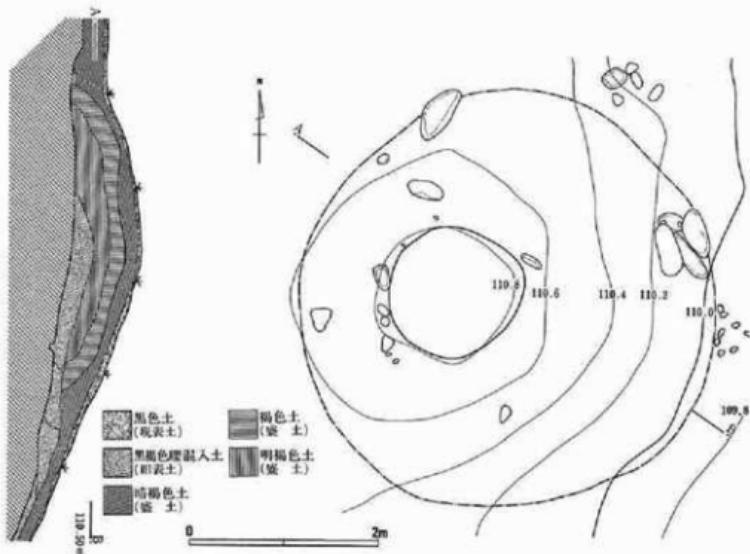


第11図 1号塚状遺構

径3.55m・短径3.0m・高さ0.53mを測る。南側を中心に、5~20cmの礫が表面を覆っている。盛土は、旧表土上に黒褐色疊混入土（旧表土利用）と暗褐色土の二層を盛り、周囲の旧表土は削平されている。近接する1号塚状遺構・2号塚状遺構とは盛土の土質・盛り方ともに相違している。

**2号塚状遺構**（第12図、図版第6図上） 本遺構は平面形が円形、断面形が円弧形を呈し、直径4.40m・高さ0.75mを測る。東側斜面には、60cm×20cm位の偏平礫が4個、盛土に食い込んで重なっている。盛土は三層に分けられ、旧表土上に褐色土・明褐色土・暗褐色土を順次盛っている。次の3号塚状遺構とは、同質の土が同一順序で盛られており、一連のものとして土壙状になる可能性が強い。

**3号塚状遺構**（第13図、図版第6図下） 本遺構は平面形が長軸北東ー南西方向の隅丸長方形・断面形が台形を呈し、長軸5.80m・短軸3.50m・高さ0.60mを測る。盛土の状況は、基本的には2号塚状遺構と同様で、旧表土上に褐色土・明褐色土・暗褐色土を順次盛っているが、南西寄りに盛土中の褐色土からの掘り込みがあり、暗褐色土が堆積している。本遺構北西部は水田への道に沿っており、削土により直線になった可能性も考えられたが、縁辺に沿ってL字型に12~15号土壙が列をなしており、本来直線的であったことが判明した。また上述のように2号塚状遺構とは一連のものになる可能性が強く、1号溝状遺構に沿ってかぎの手状

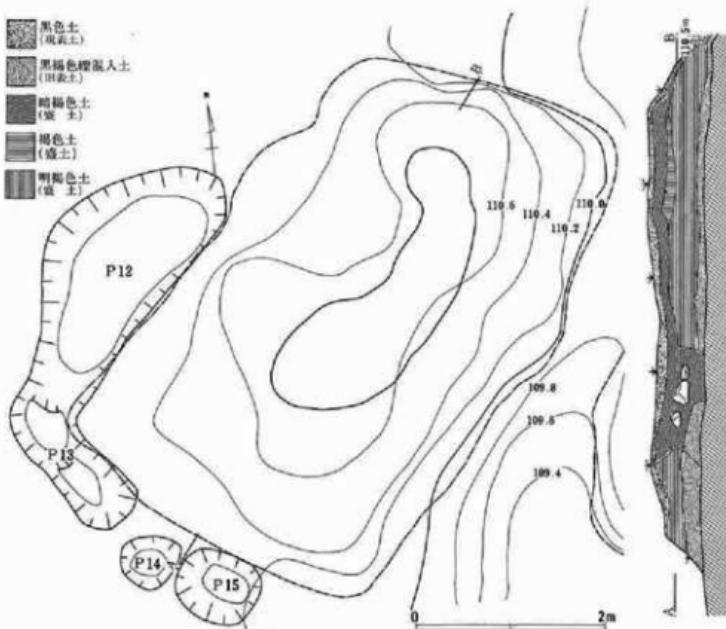


第12図 2号塚状遺構

に屈曲する土壌状遺構であったと推定される。

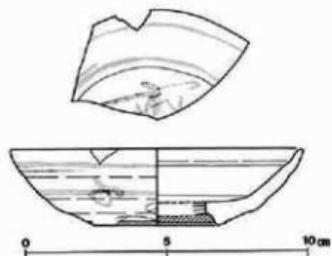
4号塚状遺構（第14・15図、図版第7図上・16図1） 本遺構は平面形が卵形、断面形が台形を呈し、長径6.10m・短径4.70m・高さ0.90mを測る。表面は頂部から東斜面周辺にかけて、5~30cmの礫群に覆われており、30cm前後の礫が並んでいる部分では高さが均一で、礫の長軸が縁辺と直交することから、人為的構築の可能性も考えられる。盛土は五層を基本とし、旧表土上に黒褐色礫混入土（旧表土利用）・暗褐色礫混入土・黒褐色礫混入土（旧表土利用）・暗褐色礫混入土・暗褐色土を順次盛っている。南西部の1号溝状遺構に面する側面には、黄褐色礫混入土（地山利用）が盛られており、これは2号土壌状遺構と同様に1号溝状遺構を掘削した土を直接盛った可能性がある。遺物は東斜面の表土中から碗形の染め付け片（第14図）が出土しているが、時期は近代のものであり本遺構の構築年代より後世のものである。本遺構は近接する3・8号塚状遺構とは、盛土の土質は異質である。

5号塚状遺構（第16・17図、図版第7図下・第16図2） 本遺構は平面形が梢円形、断面形が円弧形を呈し、長径4.85m・短径4.00m・高さ1.00mを測る。頂部には40cm前後の偏平礫が



第13図 3号塚状遺構

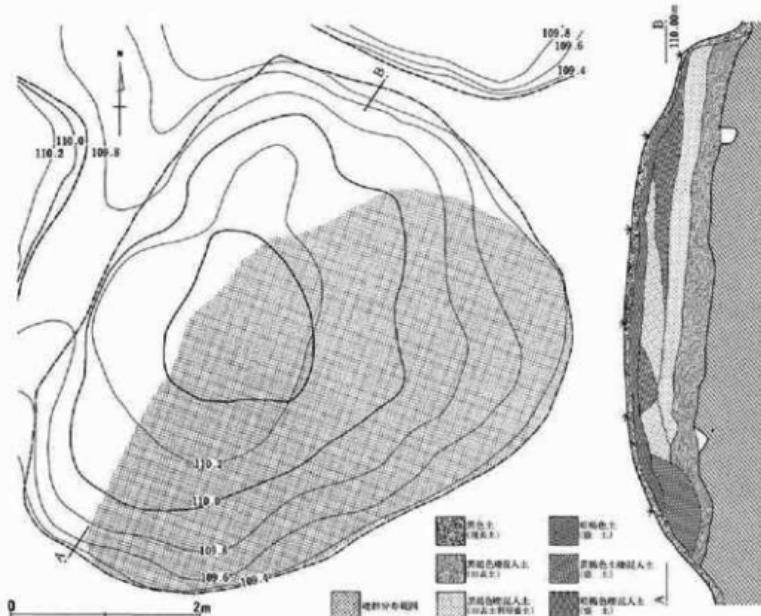
点在し、南東斜面は15~30cmの礫に覆われている。地形が南東方向へ傾斜しているため、南東部は崩壊土の被りが厚く、礫群は表土を除去した段階ではあらわれていない。これらは、下段の礫が均一な高さで、縁辺には直交して並んでいること、その上に斜面の傾斜にしたがって礫が堆積していることから、意図的に積んだ可能性が強い。盛土は、旧表土上に黒褐色混入土(旧表土利用)・暗褐色土の二層を順次盛っている。遺物は、頂部表土中の偏平隕間より陶器片が出土しているが、小破片のため器種・時期は不明である。近接する2号土壙状遺構・9号塚状遺構とは、盛土の土質・盛り方が非常に近似しており、遠なって土壙状遺構を形成していた可能性が強い。



第14図 4号塚状遺構出土遺物

色礫混入土(旧表土利用)・暗褐色土の二層を順次盛っている。遺物は、頂部表土中の偏平隕間より陶器片が出土しているが、小破片のため器種・時期は不明である。近接する2号土壙状遺構・9号塚状遺構とは、盛土の土質・盛り方が非常に近似しており、遠なって土壙状遺構を形成していた可能性が強い。

5号塚状遺構(第18図、図版第8図) 本遺構は平面形が稍円形、断面形が円弧形を呈し、長径3.05m・短径2.10m・高さ0.40mを測る。表

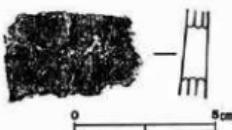


第15図 4号塚状遺構

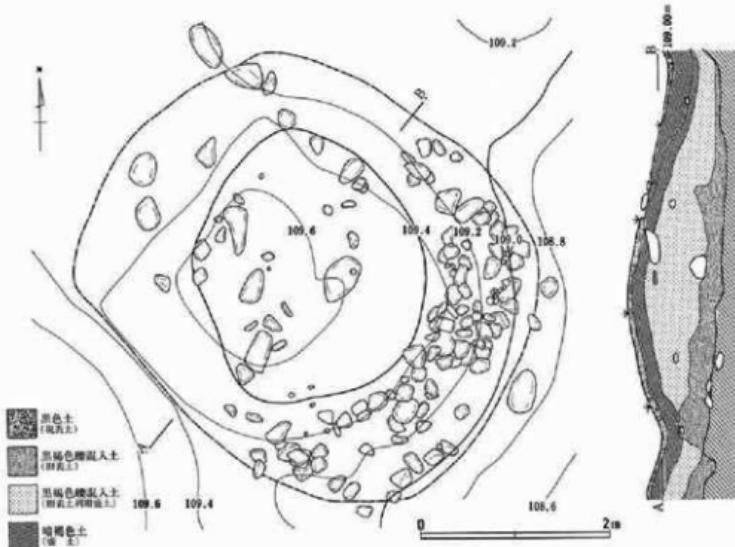
面には南側を中心に偏平礫が点在し(A)、その下の盛土中より礫群(B・C)さらにその下からは土壌(D)が検出されており、第19図A～Dで上面から順次図示した。盛土中の礫群(B・C)の礫の多くは偏平で、長辺を下に直立したものが多く(↑),傾いている偏平礫も60°以上のものは(↓),本来直立していた可能性が考えられる。また、Cの礫群の下部はその下の土壌内に埋まっており、さらに盛土はこれらの礫群を覆う暗褐色土のみで、その土は土壌の埋土でもあることから、本塚状遺構・礫群・土壌は一体となる遺構と考えられ、他の塚状遺構とは性格を異なる。出土物もなく時期は不明であるが、旧表土削除後に築造されており、他の塚状遺構よりは新しいと考えられる。

7号塚状遺構(第19図、図版第9図上) 本遺構は2号土壌状遺構と接し、平面形は楕円形、断面形は円弧形を呈し、長径2.80m・短径0.40m・高さ0.70mを測る。盛土は二層を基本とし、旧表土上に明褐色土・暗褐色土を盛っている。盛土の土質・盛り方は2号土壌状遺構と異なるが、両遺構の盛土は畳みあっており、一連のものとなる可能性もある。

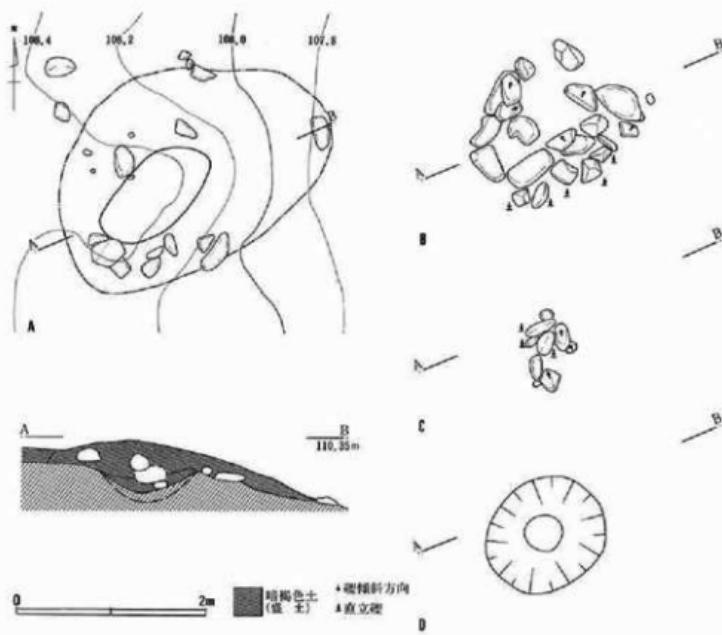
8号塚状遺構(第20図、図版第9図下) 本遺構の主体部が発掘調査区域外のため、発掘は実施していない。平面形は楕円形を呈し、長径8.0m・短径4.5m・高さ1.0mを



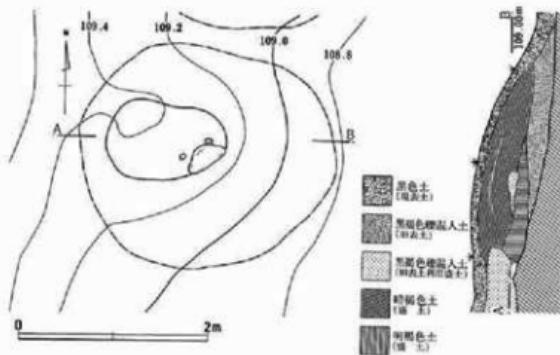
第16図 5号塚状遺構出土遺物



第17図 5号塚状遺構



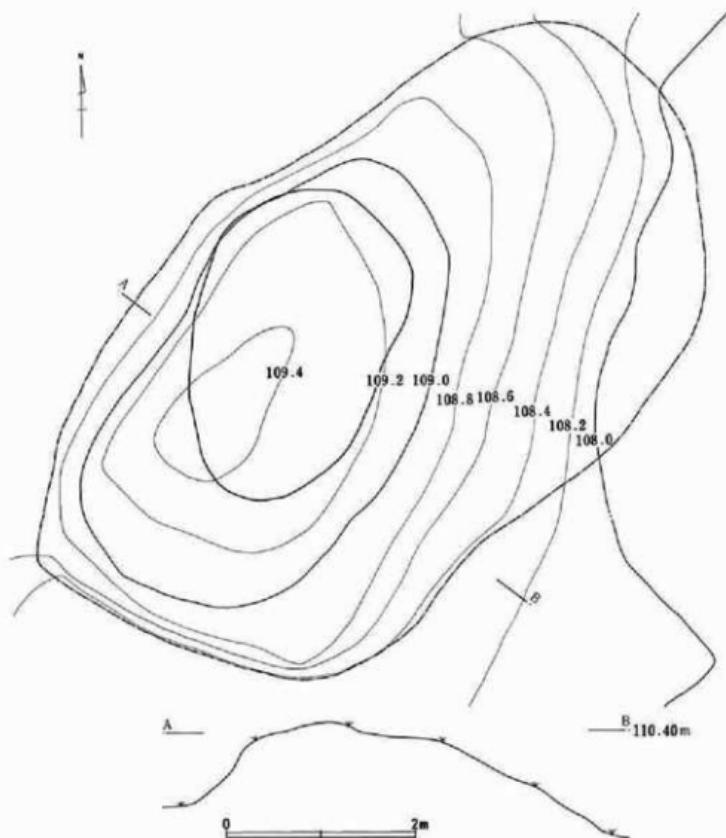
第18図 6号塚状遺構



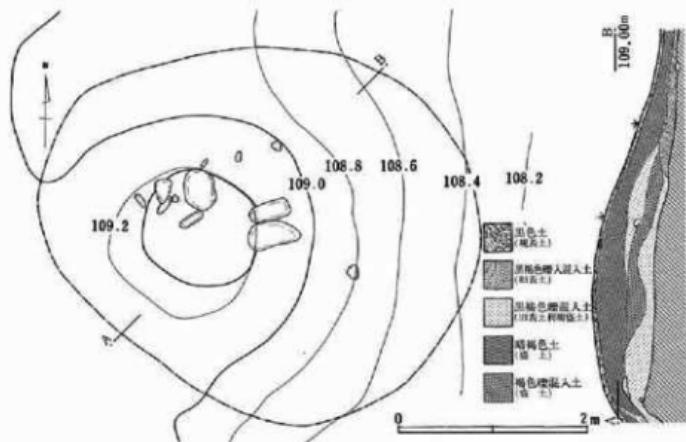
第19図 7号塚状遺構

測る。今回は南側の発掘調査区域内の表土剥ぎのみを実施したが、表面は15cm前後の礫に覆われていた。

9号壇状造構（第21・22図、図版第10図上・15図2） 本造構は、平面形が卵形・断面形が円弧形を呈し、長径4.70m・短径3.90m・高さ0.65mを測る。頂部表面には40cm前後の偏平礫が点在する。盛土は四層に分けられ、旧表土が一部削除された上に、黒褐色疊混入土（旧表土利用）・褐色疊混入土・黒褐色疊混入土（旧表土利用）・暗褐色土を順次盛っている。造物



第20図 8号坛状造構



第21図 9号塚状遺構

は、西斜面の表土中か 9号塚状遺構銭貨表

ら寛永通宝（第22図） 寛永通宝 径2.25cm・厚さ 0.6mm 1626年～鋤

が出土している。近接する5号塚状遺構とは同一の土が二層続いてきており、その間に別の二層が盛られているが、連なって土壌状遺構を形成する可能性が強い。

10号塚状遺構（第23図上、図版第10図下） 本遺構は、平面形がほぼ円形、断面形が円弧形を呈し、長径3.60m・短径3.35m・高さ0.60mを測る。

盛土は二層を基本とし、旧表土が一部除去された上に黒褐色疊混入土（旧表土利用）・褐色疊混入土を盛っている。近接する塚状遺構ではなく、元来塚状遺構であったと考えられる。

11号塚状遺構（第23図下、図版第11図下） 本遺構は、平面形が梢円形、断面形が円弧形を呈し、長径4.40m・短径3.55m・高さ0.70mを測る。盛土は、旧表土上に黒褐色疊混入土（旧表土利用）のみを盛っており、周囲の旧表土は削除されている。先述のように、1号土壌状遺構西半の盛土最下層と同質土を盛っており、一連のものと考えられる。

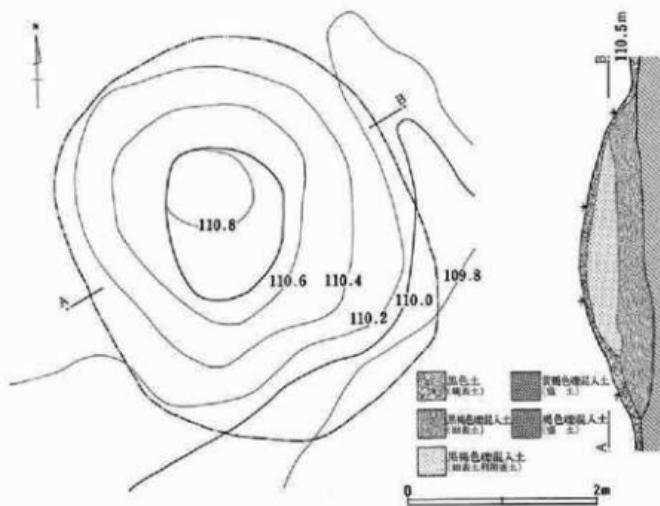
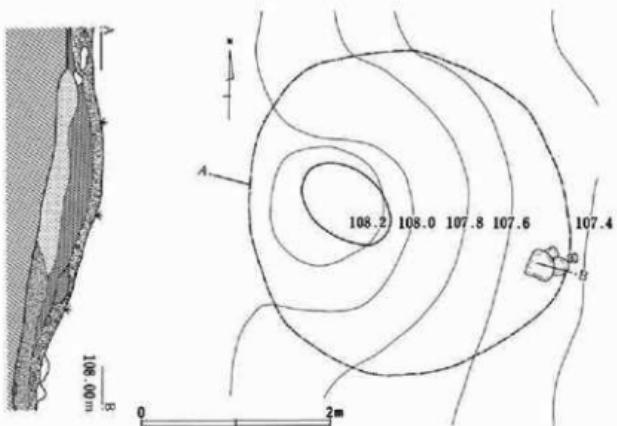
#### c 溝状遺構（第7・30図）

溝状遺構は表土の除去により2本確認された。これらは盛土遺構の単なる狭間ではなく、意図的に掘り込まれていると考えられる。

1号溝状遺構 本遺構は上面幅1.1~2.1m、底面幅0.3~1.0m、深さ0.2~0.5mの断面が逆台形の溝である。周囲の土壌状・塚状遺構に沿って曲折する3筋の溝が丁字形に交わるこ



第22図  
9号塚状遺構  
出土遺物（2/3）



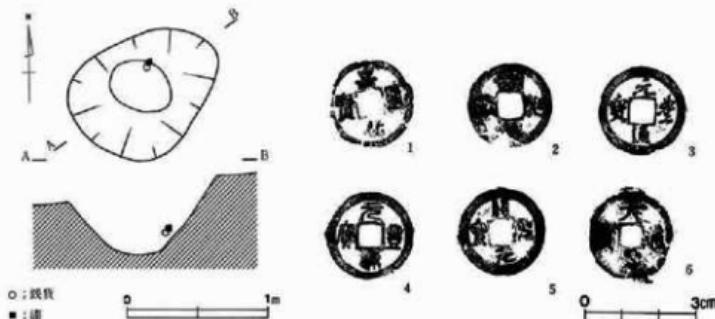
第23図 (上) 10号塚状造構 (下) 11号塚状造構

とにより形成されている。3筋の一端は1・2号土壙状造構の狭間、一端は3・4号塚状造構の狭間からはじまり、地形に沿って東へ傾斜しながら先の1筋を合わせ、2号土壙状造構と4号塚状造構の狭間で消滅する。1号土壙状造構・1号塚状造構の狭間と2号土壙状造構にはさまれた部分では南西側が1段低く、約0.2mの高低差がある。1号塚状造構と2号土壙状造構にはさまれた箇所はかぎの手状に曲がり、北東側が約0.25mの段差をもって低くなっている。溝内の堆積土は、上層から表土・黒色腐植土層（崩壊土の腐植したもの）・暗黄褐色礫混入土層（溝壁の崩壊土）の三層であり、周囲が徐々に崩壊し溝内に堆積することにより埋没したものであろう。溝底からは墓壙3基（1・2・3号）、土壙7基（16・17・18・19・21・22・23号）が検出されている（第31図）。溝状造構との関係は不明であるが、17号土壙は上面の砾群との係わりから溝状造構埋没後に掘り込まれた可能性が強く、他は溝状造構掘り込み以前・掘り込みと同時・掘り込み以後埋没以前の3つの可能性が考えられる。

**2号溝状造構** 本造構は4号と8号塚状造構の狭間にあり、8号に沿って北に曲がり、調査区域外へ延びている。上面幅0.7~0.8m、底面幅約0.4m、深さ0.2~0.5mである。地形の傾斜と溝の傾斜が異なるため、北西方向へ壁は高くなるが、傾斜自体は南東へ低くなっている。溝内の堆積土は、表土下が黒色腐植土と単純であり、1号同様に自然埋没したことがうかがわれる。本造構の東部先端に接して29号土壙、4号塚状造構下の本造構に接する位置に28号土壙が検出されているが（第30図）、土壙内には暗黄褐色礫混入土が堆積しており、本造構とは直接関係ないものであろう。

#### d 墓 壕

墓壙は人骨や錢貨の出土により推定したもので、他の土壙とはこれによって区別した。基數は10基で、2号土壙状造構上の10号墓壙以外の9基は、旧表土の除去後、あるいは溝状造構の完掘後に確認されたものである。



第24図 (左) 1号墓壙 (右) 1号墓壙出土遺物

1号墓壙（第24図、図版第15図3～8・16図3・4） 本造構は1号溝状造構底部西側で検出された（第30図）。平面形は卵形を呈し、長径1.10m・短径0.80m・深さは東西で高低差があるが、平均0.5mである。埋土中からは朱色の漆を塗布した木片と、目の荒い布片が付着した銭貨6枚が出土している。

木片は小形容器の口縁と考えられ、銭貨6枚は本來布に包まれていたと推定される。

2号墓壙（第25図、図版第11図・15図9～14・16図5～12）  
本造構は1号溝状造構底部西

側の1号塚状造構と2号土壘状造構に狹まれた位置で検出された（第31図）。平面形は梢円形を呈し、長径1.10m・短径0.90m・深さ0.33mを測る。埋土中からは鉄器（かすがい6本・角くぎ2本）と、繩片が貫通し相互に密着した銭貨5枚が出土している。かすがい先端部及び釘の身部には木片が密着しており、第26図13の釘には木目の直交する2枚の木片が付着していること、鉄器は分散して出土していることから、木箱の埋納が推定される。

3号墓壙（第26図左・中、図版第12図上・15図15～21） 本造構は1号溝状造構底部の

#### 1号墓壙

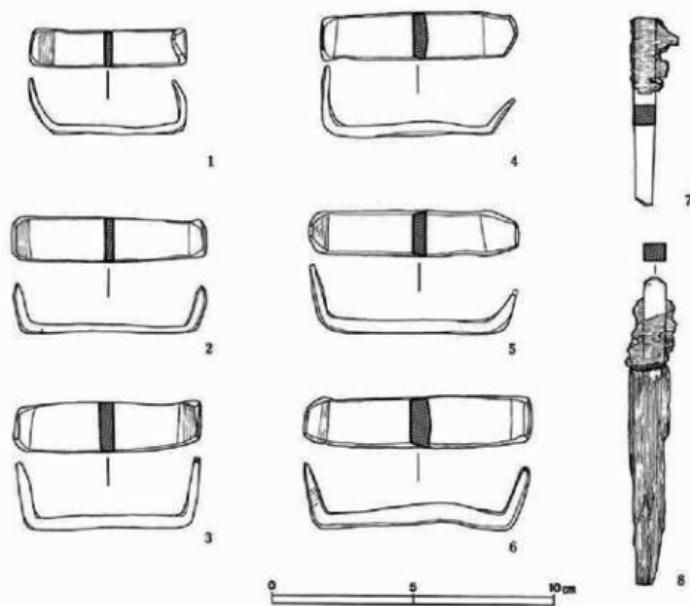
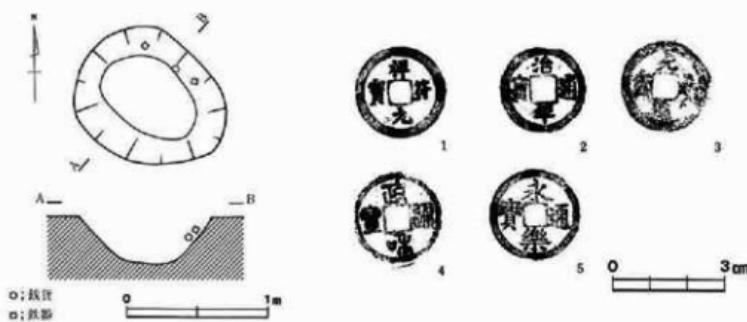
1	嘉祐通宝	径2.4cm・厚さ1.1mm(真)	北宋 1056年鑄
2	熙寧元宝	径2.25cm・厚さ0.9mm(篆)	北宋 1068年鑄
3	元豐通宝	径2.4cm・厚さ1.0mm(真)	北宋 1078年鑄
4	元豐通宝	径2.4cm・厚さ1.1mm(篆)	北宋 1078年鑄
5	紹聖元宝	径2.3cm・厚さ0.9mm(篆)	北宋 1094年鑄
6	大觀通宝	径2.3cm・厚さ1.1mm	北宋 1107年鑄

#### 2号墓壙

1	祥符元宝	径2.45cm・厚さ1.1mm	北宋 1008年鑄
2	治平通宝	径2.35cm・厚さ1.0mm(真)	北宋 1064年鑄
3	元祐通宝	径2.45cm・厚さ1.2mm(真)	北宋 1086年鑄
4	政和通宝	径2.4cm・厚さ0.9mm(篆)	北宋 1111年鑄
5	永樂通宝	径2.45cm・厚さ0.9mm	明 1408年鑄

#### 2号墓壙鉄器表

1	かすがい	長さ4.7cm・幅1.2cm・厚さ2.5mm	両先端部内外面に木質遺存 木目横位
2	かすがい	長さ6.2cm・幅1.5cm・厚さ3.0mm	左先端部内面・右先端部外面に木質遺存 木目横位
3	かすがい	長さ5.7cm・幅1.7cm・厚さ4.5mm	左先端部外面・右先端部内外面に木質遺存 木目横位
4	かすがい	長さ6.0cm・幅1.6cm・厚さ3.5mm	左先端部外面に木質遺存 木目横位
5	かすがい	長さ6.4cm・幅1.6cm・厚さ4.5mm	左先端部内面に木質遺存 木目横位
6	かすがい	長さ6.7cm・幅1.8cm・厚さ6.0mm	左先端部内外面に木質遺存 木目横位
7	角くぎ	長さ6.7cm・幅7.5×7mm	上半部に木片密着遺存 木目横位
8	角くぎ	長さ木片密着のため不明・幅7.5×6mm	頭部残して木片密着遺存 上半部木目横位・下半部木目横位



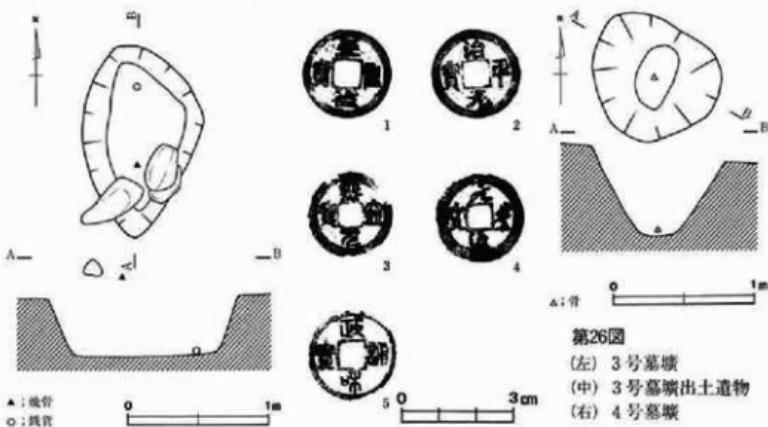
第25図 (上下) 2号墓塚・(上右・下) 2号墓塚出土遺物

2号塚状遺構と2号土壙状遺構に挟まれた位置で検出された(第30図)。平面形は三角形を呈し、長径1.35m・短径0.85m・深さ0.42mを測る。底面付近からは銭片が貫通し相互に密着した錢貨6枚が出土している。なお本墓塚確認面上の黒色腐植土(1号溝状遺構堆積土)中に偏平大蝶が重なりあって確認され、その隙間に焼骨片(下倉山城跡20号標本)が出土している。しかし焼骨の出土位置と本墓塚検出面とは約0.2mの高低差があること、1号溝状遺構堆積土中より出土していることから、本遺構とは直接関係せず2号土壙状遺構上の10号墓塚からの流れ込みの可能性が考えられる。<sup>3号墓塚</sup>

**4号墓塚**(第26図右、図版第12図下) 本墓塚は、2号土壙状遺構北東部の東南裾部の旧表土下で検出された(第30図)。平面図は隅丸三角形を呈し、長径0.95m・短径0.80m・深さ0.53mを測る。底面付近から歯を含む骨片(下倉山城跡18号標本)が出土している。

**5号墓塚**(第27図上左・上右、図版第13図上・15図22~27) 本墓塚は、2号土壙状遺構東側の道路敷の下から検出された(第30図)。平面形は梢円形を呈し、長径0.85m・短径0.70m・深さ0.36mを測る。底面付近から銭貨6枚と容器に塗布されていたと考えられる朱色の漆が2片出土している。銭貨は互いに密着しており、漆は薄皮状の小片で、それを塗布した木質部

1 天聖元宝	径2.4 cm・厚さ0.8mm(篆)	北宋 1023年鑄
2 治平元宝	径2.4 cm・厚さ0.8mm(真)	北宋 1064年鑄
3 熙寧元宝	径2.3 cm・厚さ0.9mm(篆)	北宋 1068年鑄
4 元豐通宝	径2.35cm・厚さ1.1mm(真)	北宋 1078年鑄
5 政和通宝	径2.4 cm・厚さ0.9mm(篆)	北宋 1111年鑄
6 不明	厚さ0.5 mm	



第26図  
(左) 3号墓塚  
(中) 3号墓塚出土遺物  
(右) 4号墓塚

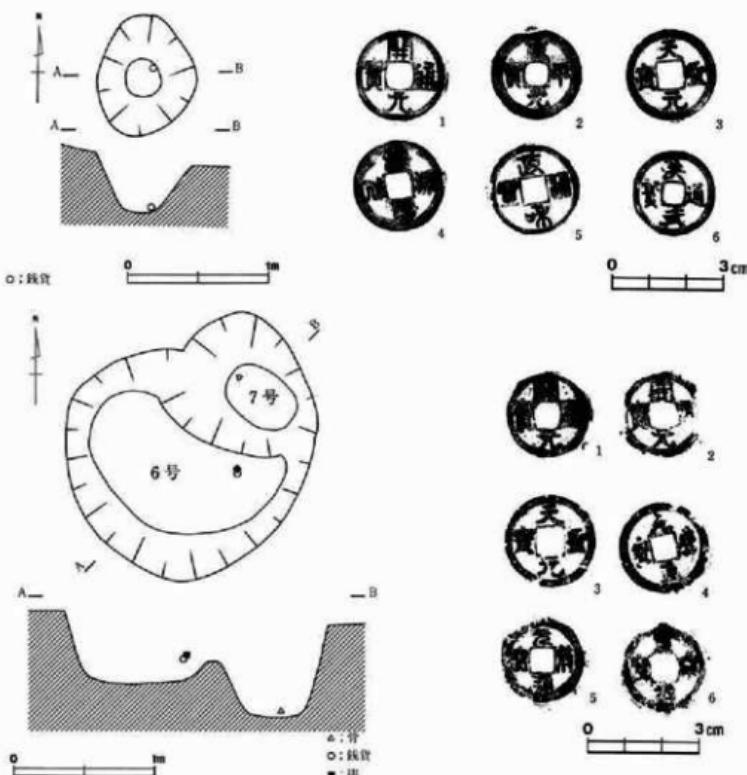
## 5号墓壙

1	開元通宝	径2.4 cm・厚さ1.0mm	唐 621年鑄
2	咸平元宝	径2.4cm・厚さ0.8mm	北宋 998年鑄
3	天聖元宝	径2.4 cm・厚さ0.9mm(真)	北宋 1023年鑄
4	熙寧元宝	径2.45cm・厚さ1.0mm(篆)	北宋 1068年鑄
5	政和通宝	径2.4 cm・厚さ1.1mm(篆)	北宋 1111年鑄
6	洪武通宝	径2.2cm・厚さ1.2 mm	明 1368年鑄

は遺存していなかった。

## 6号墓壙 (第27図下左・右下)

図版第13図下・15図28~33)  
本墓壙は、5号壙状遺構の東  
裾部の旧表土下で検出された  
(第30図)。平面図は、7号墓  
壙と重複し不明確な部分もある

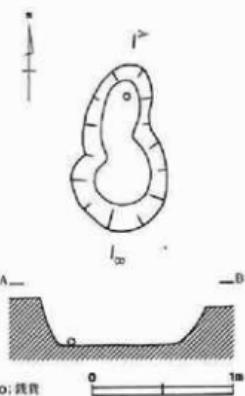


第27図 (上左) 5号墓壙 (上右) 5号墓壙出土遺物  
(下左) 6・7号墓壙 (下右) 6・7号墓壙出土遺物

るが、楕円形を呈し、長径 1.7m・短径 1.5m・深さ 0.55m と推定される。7号墓壙に近接する埋土中から銭貨 6 枚と、5号墓壙出土の漆と同様の薄皮状の朱色の漆約 10 片が混在して出土している。

7号墓壙（第22図下左、図版第13図下・18図1） 本墓壙は 6号墓壙と重複して検出された。平面形は卵形を呈し、長径 1.1m・短径 0.95m・深さ 0.63m と推定される。底面付近から土葬の頭蓋骨・下顎骨など（下倉山城跡21号標本）が出土している。

8号墓壙（第28図、図版第14図上・15図34～39） 本墓壙は 2号土壙状造構北部分の旧表土下で検出された（第30図）。平面形は瓢形を呈し、長径 1.20m・北側短径 0.42m・南側短径 0.70m・深さ 0.31m を測る。2基の重複とも考えられるが明確ではない。北側底面近くから銭貨 4 枚が互いに密着して出土している。



9号墓壙（第30図、図版第14図下・15図38～43） 本墓壙は、1号土壙状造構と1号塚状造構の狭間で1号塚状造構

#### 6号墓壙

1	開元通宝	径2.25cm・厚さ1.0mm	唐 621年鑄
2	開元通宝	径2.3 cm・厚さ0.9mm	唐 621年鑄
3	天聖元宝	径2.45cm・厚さ1.1mm(真)	北宋 1023年鑄
4	元豐通宝	径2.45cm・厚さ1.0mm(真)	北宋 1078年鑄
5	元符通宝	径2.3 cm・厚さ1.0mm(真)	北宋 1098年鑄
6	聖宋元宝	径2.8 cm・厚さ0.8mm(真)	北宋 1101年鑄

#### 8号墓壙

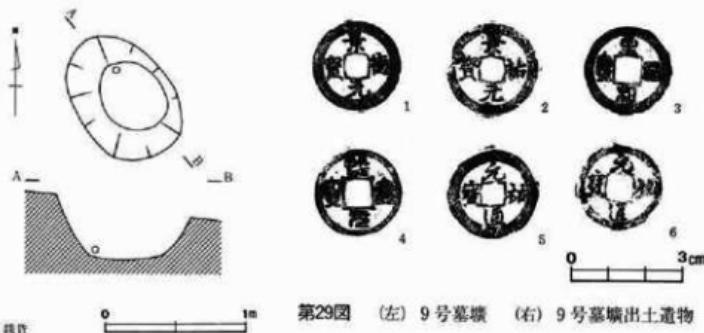
1	開元通宝	径2.4cm・厚さ1.1mm	唐 621年鑄
2	熙寧元宝	径2.4cm・厚さ0.8mm(真)	北宋 1068年鑄
3	洪武通宝	径2.3cm・厚さ1.3mm	明 1368年鑄
4	永樂通宝	径2.5cm・厚さ1.2mm	明 1408年鑄



第28図 (左) 8号墓壙 (右) 8号墓壙出土遺物

#### 9号墓壙

1	景德元宝	径2.4 cm・厚さ1.0mm	北宋 1004年鑄
2	景祐元宝	径2.45cm・厚さ0.8mm(真)	北宋 1034年鑄
3	至和通宝	径2.4 cm・厚さ0.9mm(真)	北宋 1054年鑄
4	熙寧元宝	径2.4 cm・厚さ1.0mm(真)	北宋 1068年鑄
5	元祐通宝	径2.45cm・厚さ1.0mm(真)	北宋 1086年鑄
6	元祐通宝	径2.35cm・厚さ1.1mm(真)	北宋 1086年鑄



第29図 (左) 9号墓墳 (右) 9号墓墳出土遺物

に近接し、旧表土下から検出された(第30図)。平面形は楕円形を呈し、長径0.95m・短径0.70m・深さ0.37mを測る。北側底面近くから銭貨6枚が相互に密着して出土している。

10号墓墳(第7図、図版第19図3) 本墓墳は2号土壙状遺構上の北東部の表土中で検出された。平面形は円形を呈し、直径0.75m・深さ0.20mを測る。墳内は焼骨・炭化物など(下倉山城跡19号標本)で充満している。本土壙は2号土壙状遺構表土中で検出されたこと、出土骨が焼骨であることにより、他の土壙とは性格を異にし、他より新しい時期のものと考えられる。

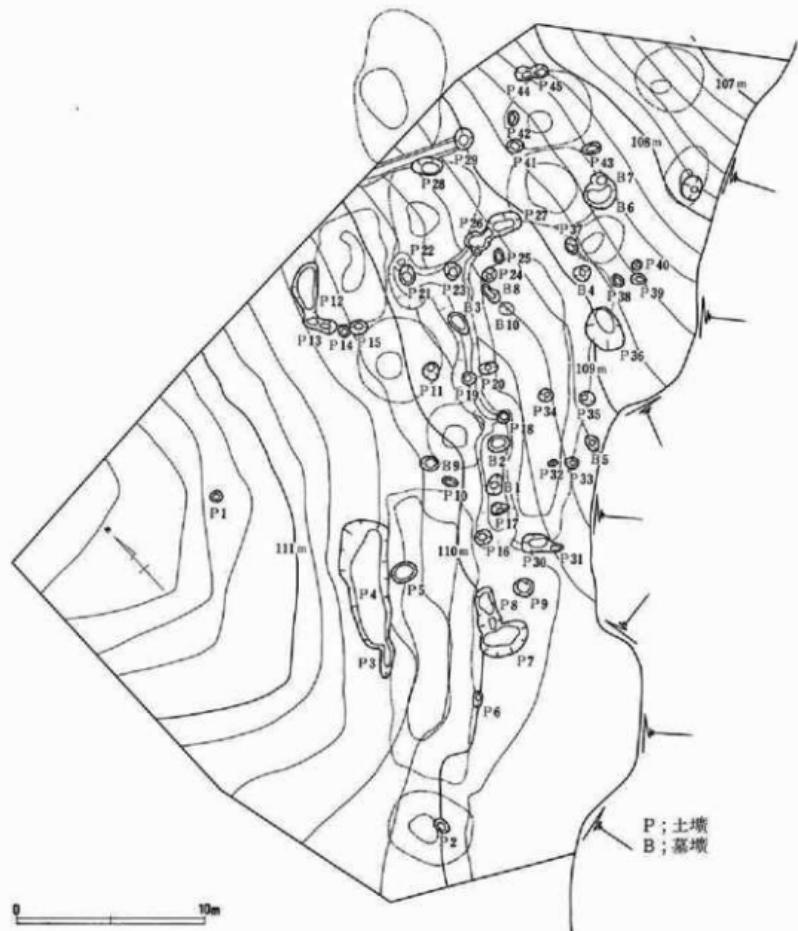
#### e 土壙(第30図)

土壙は45基確認され、表土あるいは旧表土除去後の基盤面で検出された。土壙内からの出土遺物はなく、また他遺構との関係が考えられるものについては、各遺構に付記し、以下には計測値を表記した。

土壙一覧表

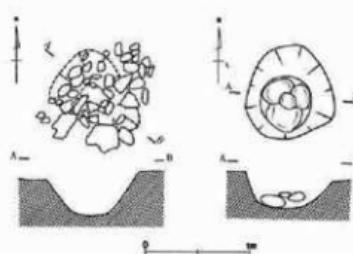
1	円形	直径60cm・深さ40cm	12	楕円形	長径300cm・短径140cm・深さ50cm 13号土壙と連なりL字形を呈する
2	楕円形	長径100cm・短径50cm・深さ23cm			
3	楕円形	長径200cm・短径50cm 4号土壙と重複	13	楕円形	長径170cm・短径70cm 深さ(南)15cm・(北)20cm
4	長椭円形	長径675cm・短径42cm	14	円形	直径60cm・深さ58cm
5	楕円形	長径130cm・短径100cm・深さ42cm	15	楕円形	長径90cm・短径70cm・深さ28cm
6	楕円形	長径80cm・短径50cm	16	楕円形	長径90cm・短径75cm
7	楕円形	長径270cm・短径160cm	17	隅丸 三角形	長径90cm・短径60cm・深さ31cm 上部に礫群を有する
8	楕円形	長径245cm・短径105cm	18	円形	直径63cm・深さ30cm
9	円形	長径95cm・短径80cm	19	楕円形	長径75cm・短径70cm・深さ30cm
10	楕円形	長径80cm・短径40cm・深さ27cm	20	楕円形	長径100cm・短径60cm・深さ34cm
11	円形	直径80cm・深さ19cm			

21	楕円形	長径100cm・短径75cm・深さ38cm 22号土壤と重複	23	楕円形	長径93cm・短径83cm・深さ33cm 底面に平石3個並置
22	楕円形	長径90cm・短径80cm・深さ32cm	24	円 形	直径70cm・深さ31cm



第30図 第4地点完掘平面図

25	楕円形	長径70cm・短径40cm・深さ48cm	42	楕円形	長径75cm・短径50cm・深さ20cm
26	不定形	長径140cm・短径110cm・深さ43cm 3 土壌重複か。27号土壌と重複	43	楕円形	長径100cm・短径55cm・深さ53cm
27	楕円形	長径180cm・短径115cm・深さ55cm	44	楕円形	長径90cm・短径80cm・深さ39cm 45号土壌と重複
28	楕円形	長径160cm・短径95cm・深さ51cm 2号溝状遺構と重複	45	楕円形	長径80cm・短径65cm・深さ56cm
29	楕円形	長径85cm・短径65cm・深さ23cm 2号溝状遺構と重複			
30	楕円形	長径150cm・短径100cm・深さ60cm 31号土壌と重複			
31	楕円形	長径60cm・短径50cm・深さ5cm			
32	楕円形	長径45cm・短径28cm・深さ39cm			
33	円形	直径70cm・深さ24cm			
34	楕円形	長径80cm・短径65cm・深さ37cm			
35	楕円形	長径115cm・短径105cm・深さ76cm			
36	楕円形	長径240cm・短径170cm 木根のため完掘不能 上面破片有り			
37	楕円形	長径85cm・短径55cm・深さ55cm			
38	楕円形	長径65cm・短径50cm・深さ35cm			
39	楕円形	長径80cm・短径60cm・深さ39cm			
40	楕円形	長径50cm・短径35cm・深さ31cm			
41	楕円形	長径85cm・短径75cm・深さ22cm			

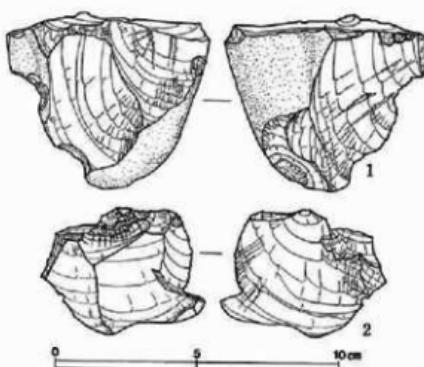


第31図 (左) 17号土壌 (右) 23号土壌

#### I その他の出土遺物 (第32図)

出土遺物としては、ほかに石核・剥片各1点が表土中から出土している。第33図1は石核、2は剥片で、石質はともに流紋岩である。

(田辺早苗)



第32図 第4地点表土中出土遺物

## 5. 下倉山城跡出土人骨所見

### (1) 下倉山城跡18号標本 (4号墓塙出土)

ヒトの両側の側頭骨の錐体と左側キヌタ骨、後頭骨の底部の一部、下顎左側第2乳臼歯の歯冠エナメル質、上顎右側第1大臼歯の歯冠の遠心舌側咬頭および遠心頬側咬頭と近心舌側咬頭の一部のエナメル質が保存されている。

この標本の年令は、後頭骨の底部の蝶後頭軟骨結合が癒着していない点から18才未満と、また、下顎左側第2臼歯が崩出し、わずかに咬耗している点から3才以上と推定される。上顎右側第1大臼歯の歯冠表面は暗褐色を呈しているが、これは後述する21号標本の状態から判断して、エナメル質の石灰化未完了の歯と考えられる。ただし、歯完形態はほぼ完成しているので、石灰化完了直前の歯と考えられる。この点から、この標本は5才以下と推定される。従って、この標本の年令は3~5才となるが、下顎左側第2乳臼歯の咬耗状態から判断して、4才の可能性が最も高い。

残存部位からは性別、生存年代は判断できない。また、残存部位には人為的損傷痕は認められない。

### (2) 下倉山城跡19号標本 (10号墓塙出土)

焼かれた多数の骨片で、大部分は人骨である。石炭ガラ状多孔物質と岩片が共産する。

部位の同定が可能な骨片は次の通りである。

〈頭蓋骨〉後頭骨片(外後頭隆起部、後頭崎破片-2個)、蝶形骨片(蝶形骨体の一部-1個)、側頭骨片(右乳様突起部、右乳突切痕部、左乳突切痕部、左錐体の一部、左S状洞溝部-5個)、頭頂骨片(鱗状縫合部-1個)、前頭骨片(左眼窩上緣外側部、左眼窩上緣内側部、前頭稜部-3個)、上顎骨片(右歯槽突起の一部で3<sub>j</sub>から6<sub>j</sub>の部位、右前頭突起部-2個)、歯根片(根端部-2個)、下顎骨片(右下顎小舌部、左筋突起-2個)、その他に頭蓋冠の一部と考えられる骨片が37個、頭蓋骨片と考えられるものが11個ある。

〈頭蓋骨以外〉椎骨片(頸椎片-2個、胸椎片-1個)、橈骨片(橈骨頭の一部-1個)、尺骨片(鈎状突起部-1個)、大腿骨片(近位部、粗線の一部、遠位部、膝蓋面の一部-計7個)、その他に椎骨片と考えられるものが12個、肋骨片と考えられるものが11個、中手骨あるいは中足骨片と考えられるものが6個ある。

上記以外には長骨片が約80個あり、さらに同定不能の骨片が多数ある。これらの中には他の動物の骨片と考えられるものが若干認められる。したがって、19号標本の大部分は人骨であるが、他の動物の骨も少數混在していることが考えられる。

人骨については、出土部位が限定されない事、また同一部位が重複して出土していない事より、一体分である可能性が十分考えられる。性別は頭蓋の乳様突起、外後頭隆起の発達が

良好なことから、男性と考えられる。年令は、骨の大きさ、頭蓋骨の形態より、中年以上の成人であると考えられる。さらに残存部位より歯牙の状態を推定すると、右上顎犬歯は健全、右上顎第一、第二小白歯は残根、右上顎第一大臼歯は欠如し、歯根端部に歯根囊胞があったと考えられ、これより30~40才と推察する。

残存部位から生存年代は判断できない。また、人為的損傷痕は認められない。

### (3) 下倉山城跡20号標本（3号墓出土）

焼かれた多数の骨片で、骨片の大きさ、形態より人骨の可能性が強いが、断定はできない。石炭ガラ状多孔質物が共産する。

頭蓋の一部と考えられる骨片が3個、長骨片が7個、その他に同定不能の骨片が多数ある。

残存部位から性別、年令、生存年代は判断できない。また、人為的損傷痕は認められない。

### (4) 下倉山城跡21号標本（7号墓出土）

ヒトの右側頭骨および口蓋骨の大部分、右側ツチ骨とキヌカ骨、左右側上顎骨の大部分、左側下顎骨の歯槽突起の一部、その他頭蓋片多数、上顎左側第3大臼歯と下顎右側第3大臼歯を除くすべての永久歯および上顎左右側第2乳臼歯が保存されている。

上顎右側第2小白歯と第3大臼歯はともに未萌出であるが、第2小白歯は歯根の形成が始まっており、エナメル質表面は白色で、光沢がある。一方、第3大臼歯では歯根は形成されおらず、エナメル質表面は暗褐色で、光沢が少ない。これより、第3大臼歯ではエナメル質の石灰化が未完了であると推察される。

この標本の年令は、上顎第2小白歯のエナメル質の石灰化が完了し、未萌出であるという点から、9~14才と推定される。また、第2大臼歯が萌出しているので10才以上であり、従って、10~14才となるが、上顎右側切歯の根尖が未完了で、その他の切歯の根尖が完了している点から、12才の可能性が最も高い。

側頭骨の乳様突起が破損しているため、性別査定のための決め手を欠くが、歯の大きさ等から総合的に判断すると、女性というよりは男性の可能性がやや高いように思われる。

この標本の上顎前歯部の歯槽突起はきわめて前方に突出している。鈴木(1963)によれば、上顎前歯部の歯槽突起は、縄文時代から鎌倉時代まではだんだん前方に突出していき、鎌倉時代から現代に至るまでは逆に歯槽突起の前突が弱くなっている。従って、この標本は、上顎前突の最も著しい鎌倉時代と時代的に近い室町時代人のものとしても矛盾はしない。

なお、残存部位には人為的損傷痕は認められない。

（吉岡敏雄・笠川一郎・高橋正志・高橋啓一）

\*鈴木 尚 1963 「日本人の骨」岩波新書477 (岩波書店)

## IV 総括

### 1. 発掘遺構の形成と性格

下倉山城は古志・上田・戸神の接点すなわち蒲原平野・関東・会津へ通ずる街道の三叉路という要衝の地にあって、戦国の争乱期における役割は大きかった。

今回発掘した第1地点とその上方に位置する二段は、それぞれ3m余の比高差はあるが、その上方とは13m上の小郭を除くと30m以上も隔っており、急斜面でもあって直接の退路は残されていない。本地は寺の沢を挟んで通称「馬立場」と対峙し、館跡とは至近の距離にあり、館からの退路に係る連絡と大手直前の防御機能を付与せられた所謂「捨曲輪」ではなかっただろうか。

第4地点は、要害と館の位置関係及び立地から、一連の城館遺構の中に含まれるものと考えられながら、今一つ性格が明らかにならなかった。「竜泉寺文書」によると、寺持の除地として「古城主様居屋敷跡土居之内、三反三畝歩境内、其外土居之外、畠式反武畠歩余」<sup>(註1)</sup>とあり、土居の痕跡・土地更正図及び面積比較から、竜泉寺堂宇敷及び庭が土居之内つまり館跡、東側の寺持畠地が土居之外の除地に比定できる。また、同文書によると、館跡への竜泉寺の建立は越後中将松平光長の支配となった元和9年(1623)であるが、当時から竜泉寺西接の墓地は寺持の除地とはなっておらず、即ち寺域外であったことになる。第4地点はこの墓地のさらに西にあり、竜泉寺とは無関係であったと考えられる。なお、竜泉寺西接のこの墓地は、旧下倉村持として竜泉寺開創後に設けられたものと思われ、近代になって堀之内町有地となっている。

第4地点で確認された地下遺構は、墓壙10・土壤45であったが、2号土壙状遺構上に掘込まれた10号墓壙を除いて地上遺構に先行するものである。当初、墓壙と塚状遺構との直結も想定したが、相互の位置関係や盛土の検討から無関係であろうとの結論に達した。墓壙からは人骨・鉄製品・漆片と多くの銭貨が出土し、銭貨はいずれも中世後半に流通したもので、唐銭1種4枚・北宋銭20種30枚・明銭2種4枚・不明1種1枚の計24種39枚であった。この銭貨から、墓壙は室町時代後期後半から戦国時代にかけての長尾・上杉支配期の所産と考え

(註1) 「乍恐以書付奉申上候 下倉村真言宗竜泉寺 境内并攝之儀者 元和末年建立之御當村古城 主様居屋敷ノ跡地ヲ 慈村中より寄進致置 建立成就仕候 則古城主様居屋敷跡土居之内 三反三畝歩境内 其外土居之外 畠式反武畠歩余 合而三石五斗 寛永元子年より 去々申 年迄 五十七年ノ間 越後守様御代無諸役竜泉寺へ被付置候 何様證処明白ニ候得者 如 前々居置 被成下度 言上 深々奉願上候以上 戊ノ四月□□□ 魚沼郡下倉村竜泉寺 団 同村庄や重兵衛(印) 太兵衛(印) 六兵衛(印) 御檢地御奉行様」 (竜泉寺文書)

られる。土壙は性格不明であるが、銭貨を伴わない墓壙もあったので、人骨の消失した墓壙が含まれている可能性はある。

地上遺構は、土壙状遺構2・塚状遺構11・溝状遺構2であった。これらは、土壙状遺構が段丘崖線と平行であること、塚状遺構が第6号を除いて土壙状遺構と同軸の列状またはかぎの手状を呈し盛土の構造が近似していること、溝状遺構が前二種と同時に掘削されていると認められることから、ほぼ同時期に同一目的のために設けられたものと推定され、後世に東接する墓地や6号塚状遺構の造成などによって削土されて変容したとする考えが支配的であった。形成年代は、上限を墓壙の形成から室町時代後期後半とし、下限を東の一部が竜泉寺西接の近世墓地によって削土され、この近世墓地の形成が竜泉寺の開創からさほど遅れない時期とみられることから、近世初頭とすることができるよう。また崖線と平行する形態と、近世墓地と現代墓地・開墾によって両端が破壊されたと推定されるところから、館と要害との間の空間を埋めていた可能性が大なので、これらを土壙と認めることがより自然であろう。

(波田野至朗)

## 2. 4号墓壙・7号墓壙出土人骨の歴史的性格

今回発掘された人骨4体のうち4号墓壙及び7号墓壙出土の2体は、頭部骨のみの推定年令4才と12才という若年者の土葬遺骨であった。

4才児の埋葬されていた4号墓壙の規模は、長径約95cm・短径約80cm・深さ約55cmで、12才児の7号墓壙は、長径約110cm・短径約95cm・深さ約65cmでやや大きいがそれほどの差がない。出土した骨の部位は頭骨・歯牙・下顎の頭部骨のみで、共に体部骨・両肢骨は全くなかった。人骨の鑑定結果・隣接墓壙出土の銭貨などから、被葬者の生存年代は室町時代後期後半に比定することができる。室町時代における若年者の平均体位はあまり知られていないが、屈身直葬であればそれぞれの墓壙内に収容可能と思われる。しかし、2号墓壙出土のかすがいやくざからして箱や曲物などの容器を用いて全身を納めようとすると無理があり、掘カタや骨の保存状態から、木製か布製容器を用い、全身埋葬の部分遺存ではなく、もともと頭部のみの埋葬であった可能性が大きい。骨片中に顎骨が見あたらず、遺存しなかった場合と改葬された場合との両方が考えられるが特定はできない。

中世における頭部骨の埋葬は、戦闘及び戦時処刑に係る首取りに起因するとするのが妥当なところであろう。首には「首級」と称されるように等級があり、それによって取り扱いに差違があり、埋葬方法にも単独で埋葬される場合<sup>(註1)</sup>・一括して処理される場合<sup>(註2)</sup>の別があった。<sup>(註3)</sup>埋葬に際しては怨霊への配慮から鎮魂儀礼が執り行われており、銭貨などの出土はこれら鎮

(註1) 岡山県吉備郡高松町・清水宗治首塚(明治年間、神野 力氏等調査)など。

(註2) 静岡県沼津市千本浜・千本首塚(昭和29年、鈴木 商氏調査)など。

(註3) 「常山紀談」・「続武将感状記」などに、塚塚・供養の記事が見える。銭貨の他に刀子・櫛・土器などの副葬が知られる。今回出土した朱の漆片からは櫛の他に蓋等も推定される。

## 新1表 下倉山城跡年譜

時 間	支 配	城 跡	要 事	考 證	記 述	資料 料
0	南北朝より松平氏支配。 （長名為本支配）	松井氏源頼か（？）	不 明		不 詳	
1	永平元年 （長名為本支配）	（松王寺守護持 有）				
2	天文20年正月 （長名兼亮支配 ・既城持）			天文4年2月 （松王寺文書） に改めらる。胡琴單院。 天文20年正月14日 （松王寺文書等、山中要害宮に 伏曾長方持を次唱。）	福寺守孝相等、穴伏長雄等 に改めらる。胡琴單院。 伏曾長方持を次唱。 （正月18日 “ ” 再改唱。 5月 下倉山城、穴伏長雄等に改 めらる。室通・大傳。	
3	天正6年10月 （上杉景友支配 〔北条氏團〕）	（金子太平助持）		天正6年 （松王寺文書） 貴傳寺守延王守重綱、板木 城を守る。下倉山城。 10月 貴傳寺守兼子大字助等に掌 取さる。次第一遷一里。 板木寺守重平左之等、 下倉山城に改めらる。	貴傳寺守延王守重綱、板木 城を守る。下倉山城。 貴傳寺守兼子大字助等に掌 取さる。次第一遷一里。 板木寺守重平左之等、 下倉山城に改めらる。	
4	天正8年 （上杉景友支配 〔佐藤石守守持 ・天正16年よる松井・林・井上・ 南雲の連姓在番 ・堀長三・堀秀治・堀秀吉・ 小倉主附持等）			天正7年3月 （本多吉宗文書） 喜秋院がわかれらる。 天正8年 （板木家文書） 喜秋院 （村松相家田文 書）	天正7年3月 （本多吉宗文書） 喜秋院がわかれらる。 天正8年 （板木家文書） 喜秋院 （村松相家田文 書）	
5	慶長3年 （堀長三・堀秀治・堀秀吉・ 小倉主附持等）			慶長5年8月1日 （本多吉宗文書） 休藤豊久等に改 めらる。小倉主源正繁。 8月2日 （村松相家田文 書） 堀長三・堀秀治・ 堀秀吉・堀源正繁等の 会議兵を制制に掌城。	慶長5年8月1日 （本多吉宗文書） 休藤豊久等に改 めらる。小倉主源正繁。 8月2日 （村松相家田文 書） 堀長三・堀秀治・ 堀秀吉・堀源正繁等の 会議兵を制制に掌城。	
6	元和元年 （清利佐美持）			慶長9年 代官所設置か 慶長11年 代官所廃設	慶長9年 （本多吉宗文書） 代官所設置か 慶長11年 代官所廃設	
7	元和9年 （松平光長支配 ・天和元年 天 保9年 松平肥後守持）			元和9年 （本多吉宗文書） 元和9年 （本多吉宗文書） 天和2年 （本多吉宗文書）	元和9年 （本多吉宗文書） 元和9年 （本多吉宗文書） 天和2年 （本多吉宗文書）	
8				享保9年 （本多吉宗文書） 享保9年 （本多吉宗文書） 天和2年 （本多吉宗文書）	享保9年 （本多吉宗文書） 享保9年 （本多吉宗文書） 天和2年 （本多吉宗文書）	

合す。

魂・供養によるものと考えられよう。

さて、若年者の首をあげる場合には、敵将の子弟等血縁者で人質にあった者を処刑する場合と本居地への進攻による捕獲の場合とがまず考えられる。下倉山城関係の記録の中から戦闘に係る事例を一瞥すると、天文20年(1551)正月18日の合戦記録に捕獲を示すものが記されている。これは、下倉山城將福王寺重綱等が長尾政景麾下の発智長芳を山田要害に攻めたもので、長芳の母・妻子を連れ去っている。通常これが男児であれば、天正元年(1573)小谷合戦における浅井長政の嗣子萬福丸・天正7年(1579)御館争乱での上杉景虎(北条氏秀)<sup>(註4)</sup>長子道萬丸の例もあり、斬殺された場合が多かったものと思われる。発智長芳には新左衛門・源六の二子があり天正9年(1581)に活躍しているが、彼等が30年前に福王寺重綱によって捕獲された「息」であったか否かは不明であり、一方当時捕獲された「息」の処遇も明らかではない。また、下倉山城が敵方に攻略され、戦死者の緊急埋葬・首かくしによる場合も考えられ、本城が度々攻撃されていることは諸史料に散見(年譜)する。しかし、戦死者の処理についての記録は残されていない。

先に述べた如く発掘した墓塚群は室町時代後期後半で、本城跡の年譜では福王寺氏が城主として在城した時期である。発掘地点から居館に隣接した地区であるが、福王寺氏の菩提寺とされる万福寺境内地内からの出土ではないことから福王寺氏一門の諸首とはしにくく、福王寺氏在城以降または福王寺氏以外の人々を想定したいところであるが、これ以上の推論は現状では適切ではない。従って、この若年者の頭部骨は、いかなる所為によるものかの特定はできないが、何れにせよ室町時代後期後半における合戦の痛ましい犠牲者の存在を物語るものと考えられる。

(波田野至朗)

(註4) 「古城徵考」に「山田城」とあり、北魚沼郡広神村山田の琴平山城跡に比定される。

(註5) 「発智文書」のうち「栗林經重書状」

「昨日如令啓 今度老母様 御内義並御息達 敵方へ引取由候事 誠以無念口惜次第候 御心底二相替存計候 然共不及御了簡事候間 被任筋目 御忠信簡要至極候 依之直令啓候 猶石井難栗助可申分候 恐々謹言

正月十八日 栗林 駿重(花押) 發右御印

(註6) 「浅井三代記」第十八 信長卿降人の沙汰おいち殿を出抜萬福丸を生害し給事

「前略 九月三日に江州木之本に着ければ秀吉中にて心得萬福丸を請取信長卿に此由被仰上 ければ汝其子を車指にしてきらせよとて車指にしてさらしける〔後略〕」

(註7) 御館城外四ツ屋で、前開東管領上杉憲政と共に、景勝の兵に害される。

「歴代古案」 「急度啓之候 仍 晩ニ御館さまへ可被爲押詰由候間 其元之御人數も 晩之 七ツ時分よりふねをこし 長慶寺ニ可被立御由 御意候 陣屋ニハ留守居を御置 心用かた く可被申付よし 御詮候 各たんこうあって 仕置可被申付簡用候 恐々謹言 三月十 七日 専御齋秀仙 上野九兵衛殿」

(註8) 「発智文書」(3) 「爲勘忍分 願生之内 坂野分之内 実行之候 猶 軍役等 嚴重ニ可 勤之者也 仍如件 天正九年十一月吉日 景勝(朱印) 發智源六殿」

## [付] 緊急追加調査報告

### 調査に至る経緯

本城跡は関越自動車道建設に係り、昭和55年9月24日から10月31日まで発掘調査が実施され、本書のとおり多くの成果があった。その後工事は開始されたが、昭和55年12月26日に日本道路公团新潟建設局から、下倉トンネル上部の尾根（今回調査の3つの郭が存在する）にかなり大規模な亀裂が発見され、降雪・融雪期に地滑りの恐れがあるため早急に防止工事を実施したい旨、県教育委員会に連絡があった。協議の結果、防止工事に係る郭について昭和56年1月8日より1週間の予定で発掘調査を実施することになった。しかし、例年にない降雪の中で雪崩の恐れがあるため現地確認を行った結果、安全確保が困難であると判断され、また亀裂に変動もみられないことから、融雪後まで見送ることとした。その後梅雨入りをひかえて再び地滑りの危険性が増大したため、公团から昭和56年5月25日付け新建總綱第507号で、県指定史跡下倉山城跡に関する現状変更等許可申請が提出され、前述の3つの郭に関して6月3日～6月5日に発掘調査を実施することになった。なお、地点の名称は第1地点を拡大して、最下段より第1地点-1～3とした。

### 調査の結果

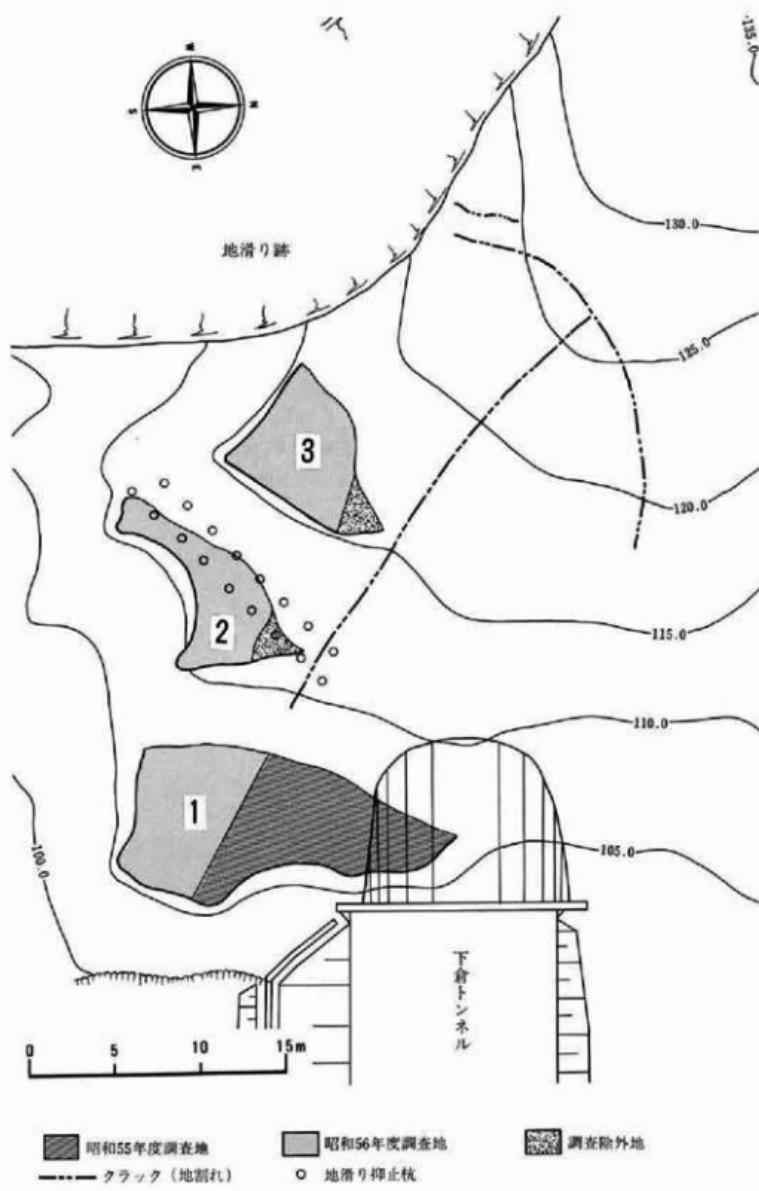
調査総面積は約106m<sup>2</sup>で、いずれの郭も表土は薄く遺構・遺物は全く検出されなかった。また、2と3に関して東側の一部は現地形でもかなりの傾斜をもち、表土を部分的に剥いで確認したところ、地山面も現地形なりに傾斜しており人為的な開削の跡がみられないことから、調査対象から除外した。

第1地点-1 昭和55年度調査地以外の44m<sup>2</sup>について実施した。第3地点とは約8.5mの比高をもち、標高は106.5mを計る。

第1地点-2 地滑り抑止杭のほとんどは本郭に打設されたが、郭としての形態は改変されることなく残っている。1との比高は4mを計り、面積は約30m<sup>2</sup>である。本郭の南東側は大きく弧を描く形になっているが、旧状は3と同様三角形に近い郭であって、地滑りによって崩壊したものと判明した。

第1地点-3 2との比高は約5mで、標高は約115mである。1・2に比べ表土が薄く6～7cmで、大小礫を若干含むが、これは尾根上部からの崩れによるものと思われる。本郭は、地滑り抑止杭打設工事によって、南東の半分が掘削された。

（北村亮）



第33図 緊急追加調査実施状況

### 参考文献

- 穴沢吉太郎 編 1977 「大和町史」本編上巻 広神村  
井上 納夫 著 1970 「新潟県の歴史」 山川出版社  
遠藤秀男 著 1973 「日本の首塚」 雄山閣  
近藤瓶城 編 1901 改定『史籍集覽』第六冊 近藤出版部  
近藤圭造 編 1903 改定『史籍集覽』第十九冊 近藤出版部  
佐藤進一・藤木久志・桑山浩然・阿部洋輔・中野豈任・金子 達 編著 1957  
「影印北越中世文書」 柏書房  
鈴木 尚 著 1960 「骨」 学生社  
鈴木 尚 著 1962 「日本人の骨」 岩波新書477 岩波書店  
高橋義彦 編 1971 「越佐史料」卷五・卷六 名著出版  
浅沢健三郎 編 1979 「越後入廣瀬村編年史」中世編 入廣瀬村  
広神村史編さん委員会 編 1980 「広神村史」上巻 広神村

# 権現平遺跡発掘調査報告

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

昭和46年、関越高速自動車道の法線が発表になり、堀之内町管内では5遺跡が法線内にかかっていた。北魚沼郡の遺跡については、星野芳郎氏の調査があり（星野 1969）、堀之内町根小屋地区で寺村・本村遺跡の2ヶ所が報告された。これらの位置は不詳であったが、昭和48年の法線内分布調査の際、当遺跡を本村遺跡と確認し、地点を地図上に明示した。昭和48年以来、発掘調査実施までの間、県教育庁文化行政課の埋蔵文化財担当職員が、数回にわたり表面採集・聞き込み調査を実施した。その折、遺物の採集される範囲は台地先端の畠地に限定され、その量も希薄で遺跡とするに疑問視するむきもあった。しかし、地形・周辺の遺跡立地等から考えて、遺跡としての可能性は否定できなかった。そのため、県教育委員会と日本道路公団とで協議を行い、発掘調査を実施し記録を残すこととなった。なお、遺跡名称は、本村遺跡の立地する台地を、地元根小屋地区で「権現様の平」と呼称していることから、昭和53年の北魚沼郡内詳細分布調査の際に、「権現平遺跡」と改名した。

発掘調査体制は下記のとおりである。

主 体	新潟県教育委員会（教育長・久間健二）
総 括	南 義昌（教育庁文化行政課長）
管 理	石山欣弥（教育庁文化行政課長補佐）
指 導	金子拓男（教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）
調査担当	斎藤基生（教育庁文化行政課学芸員）
調査員	高橋 保（教育庁文化行政課学芸員） 佐藤雅一（教育庁文化行政課嘱託） 池田 享（六日町高等学校教諭） 澁沢健三郎（新潟県文化財保護指導委員） 原喜久男（小出町文化財室嘱託）
庶 務	近藤信夫（教育庁文化行政課副参事） 獅子山隆（教育庁文化行政課主事） 伊藤和子（教育庁文化行政課主事）

## 第Ⅱ章 遺跡

### 1. 地理的位置と周辺遺跡

権現平遺跡は、新潟県北魚沼郡堀之内町大字根小屋字瓜ヶ沢3165-3~5番地ほかに所在する。遺跡は魚野川右岸の段丘上、標高114mに立地し、現魚野川河床との比高80mを測る。遺跡前方を流れる魚野川は上越国境に源を発し、南北30kmにわたる六日町盆地を北流して盆地北端の小出で磐越国境を源とする破間川と合流し、流れを大きく西に変え堀之内町市街地付近で数段の河岸段丘を形成し、川口町で信濃川に流入している。

権現平遺跡周辺の魚野川沿岸は丘陵がせまり、いくつかの段丘が形成されている。魚野川が破間川と合流し信濃川に流入するまでの地域は、1976年に鈴木郁夫氏等によって地形調査が行われた。それによれば本地域には、第Ⅰ面~第Ⅹ面までの河岸段丘が存在し、第Ⅰ面~第Ⅳ面が洪積世段丘面・第Ⅴ面~第Ⅹ面が沖積世段丘面として区分されている(第1図)。

第Ⅰ面は、根小屋放牧場・道光高原など比較的広く分布する本地域最上位の段丘面である。第Ⅱ面は、下島集落南西部に広い平坦面として分布する。第Ⅲ面は、大石集落南部~田河川両岸にかけて、かなりの広がりをもって分布する。第Ⅳ面は、田河川両岸に偏在的に分布する。第Ⅴ面は、根小屋・大石新田~和南津南部に広さをあまりもたずに分布する。権現平遺跡はこの段丘面に立地している。第Ⅵ面は、田河川両岸に細長く分布する。第Ⅶ面は、魚野川・破間川沿岸に分布するが、この面のみ火山灰層が認められない(鈴木 1976)。

新潟県内では、今まで発掘調査により確認された先土器時代の資料は数少ない。そのため編年的問題を考えるうえで、現在研究の進んでいる関東地方に対比して理解するべきであろう。以上の理由から、本地域の段丘面を関東地方と対比するならば、第Ⅰ・Ⅱ面が武藏野面・第Ⅲ面~第Ⅵ面が立川面に相当する。

周辺の先土器時代・縄文時代の遺跡分布は第1図の通りである。先土器時代の遺跡には広神村中平遺跡・堀之内町月岡遺跡・川口町荒屋遺跡がある。中平遺跡は第Ⅰ面・月岡遺跡は第Ⅴ面・荒屋遺跡は第Ⅵ面にそれぞれ立地する。中平遺跡から尖頭器・剝片類が採集されている。月岡遺跡・荒屋遺跡からは細石刃核・彫器等が発掘によって出土している。これらの遺物からみれば、時間的に古いと考えられる中平遺跡が高い段丘面に立地し、新しい時期の月岡遺跡・荒屋遺跡が低い段丘面に立地していることが知られる。縄文時代の遺跡としては、前期以前の遺跡は現在確認されておらず、中期以降にその分布が認められる。中期に属する遺跡は43ヶ所あり、第Ⅰ面~第Ⅶ面に広く点在している。その中で第Ⅵ・Ⅶ面上に大きな遺跡が1ヶ所づつ分布し、丘陵の尾根上に小さな遺跡が5ヶ所認められる。また、7ヶ所の遺跡は沖積世段丘面上に分布する。後期の遺跡は第Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ面上に4ヶ所確認されている。

晩期は第Ⅳ・Ⅴ面の沖積世段丘面に1ヶ所づつ分布している。中期以降は丘陵尾根上・沖積世段丘面に遺跡が分布し始めることが認められ、これらは遺跡における性格の反映ではなかろうか。

以上見てきたように、時期が新しくなるにつれて、高い段丘面から低い段丘面へ生活地の選地が変化する傾向と、両時代とも大差なく段丘崖線に近い平坦部に立地する傾向が認められる。また、遺跡の分布密度は堀之内町付近では、右岸に比べて左岸の北向き段丘面上が高い。北向き段丘上は、一見日照条件が劣ると考えられるが、それにもかかわらず左岸に遺跡が集中するのは生活地の選定において、日照条件よりも段丘面の広さや後背地などの条件が優先した結果と思われる。

(註1) この第Ⅳ面には、火山灰層が認められないが、場所によっては20cm~30cmの水成堆積したと考えられる薄い火山灰層が認められる(鈴木 1976)。

(註2) 右表参照のこと。

(註3) 原喜久男・大平昭作両氏による表面採集資料は、新潟県御調上遺跡の石器群に類似するものである(筆者実見)。

(註4) 中村孝三郎・小林達雄「月岡遺跡」『日本の旧石器文化』2下 1975 雄山閣

(註5) 斎沢長介「新潟県荒屋遺跡における縄石刃文化と荒屋型彫刻刀」(予報)『第四紀研究』1~5 1956

(註6) 洪積世段丘の中で、一番魚野川と比高差が少ない第Ⅳ面に、形成後まもなく荒屋遺跡は立地したと考えられる。

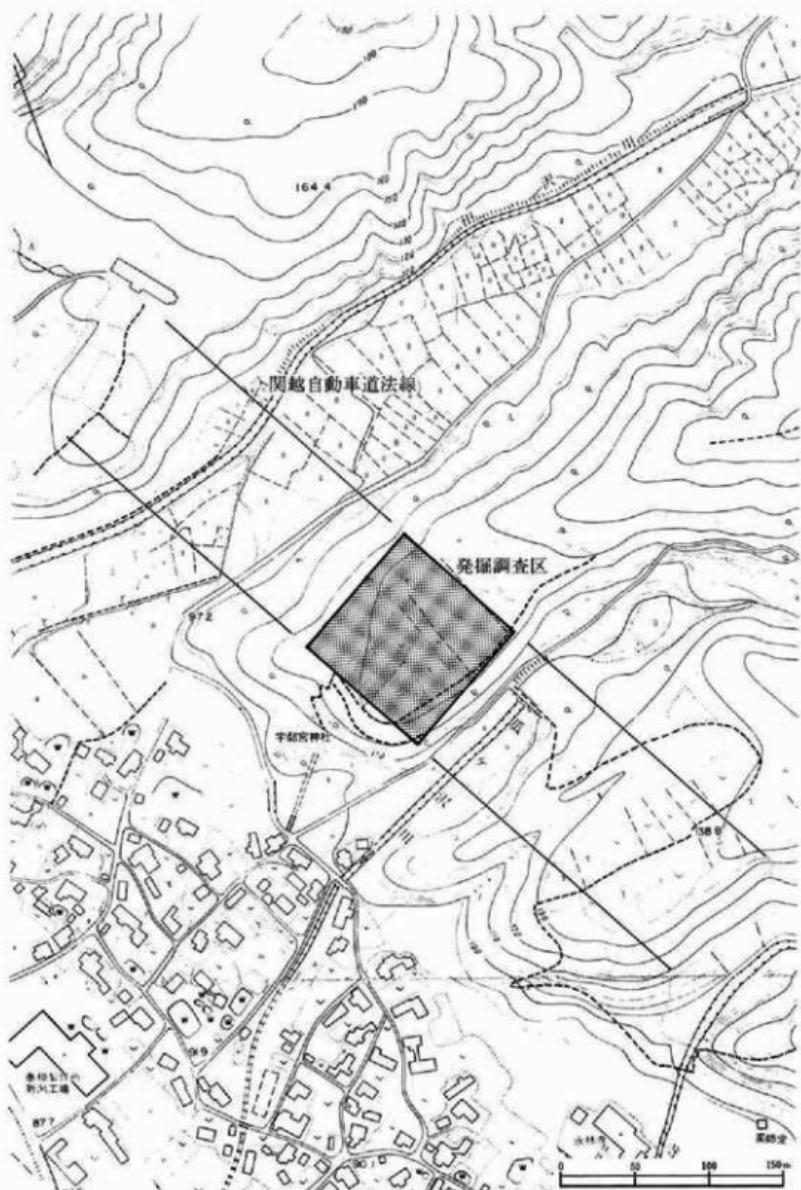
	魚野川北岸	小千谷	十日町	津南
立 川 ヨ リ ム	第Ⅳ面 第Ⅲ面 第Ⅱ面 第Ⅰ面	御音寺 (塙殿) 今岡山	下原田面 下原田面 千手	正面 貝坂
東 京 ヨ リ ム	第Ⅳ面 第Ⅲ面 第Ⅱ面	地中新田 (吉川)の字 山本前山	上之山 舟ノ木 城山日	舟ノ木 舟ノ木 舟原日
下 川 ヨ リ ム	小千谷 中条 古井 中条	山本山I 山本山II	萬山I	

(鈴木邦夫) (鈴鹿明) (斎沢長介)



第1図 横現平遺跡周辺の道路と地形

(国土地理院「小千谷」1:50,000原図 昭和48年発行)



第2図 植現平道路の発掘調査区

## 2. 発掘経過

椎原平遺跡の発掘調査は、新潟県教育委員会（教育長 久間純二）が発掘主体者となり、県文化行政課埋文化財担当職員を中心に、地元の考古学研究者を調査員に依頼し、また地元の根小屋・童光の両集落から調査作業員として有志の人々の協力を得た。調査は昭和55年10月13日から11月22日の間まで、延26日間行った。調査の方法は、調査対象範囲全体に対し、10m×10mの大グリッドを設定し（第3図）、大グリッド北東隅（2m×4m）の試堀を北から南へ進めた。遺物の出土状況により、発掘範囲の把握を目的とした。

### 調査日誌抄

10月13日～10月18日

発掘用具・資材の搬入、テントの設営、下草の処理を行う。グリッドは工事用地内の、STA 62+40の杭（3・4-1・J境界杭）を基準とし、STA 62+60を見返り、10m×10mの大グリッドを設定した。大グリッド北東隅に向って、1-25の小グリッド（2m×2m）に細分した。17日、試掘により、3H-6区・3I-10区で打製石斧、フレイクが検出された。<sup>(註7)</sup>この段階では、南蒲原郡下田村にある縄文時代早期の布倉橋遺跡に類似した石器群があると予想した。そのため、3H・3I・4I区を拡張したが、耕作により包含層は擾乱を受けて、ほとんど残っていないことが確認された。

10月20日～10月24日

拡張した3・4I区の精査を開始した（～10月31日）。精査中に3・4I区の地山直上から、フレイク・砾のまとまりを検出した。その段階で、地山上部層に先土器時代の遺物包含層があると推定し、3H・3I・4I区を中心に、第Ⅲ層の発掘を実施した。遺物は原位置の状態で記録をしたのちに、個別Noで処理した。そのような進行過程で、4I-5区を中心とするAユニットを確認することができた。20日は豪雨のため、止むを得ず作業を中止した。22日には、小出町文化財審議委員長の大平昭作氏が来訪され、適切な御教示をいただいた。

10月28日～10月31日

3・4H区の第Ⅱ層下部を精査開始（～11月3日）。28日～31日の3日間にわたり、豪雨のため止むを得ず作業を中止した。

11月1日～11月8日

3・4H区の第Ⅱ層下部精査完了後、第Ⅲ層上部の発掘を開始した（～11月13日）。3・4I区・第Ⅲ層上部で先土器時代遺物包含層を検出していたため、細心な発掘を実施した。検出した遺物の脇に、竹串を刺して遺物分布を視覚的にとらえ、図面及び写真による記録をとった。また、発掘過程の堆土は、後日洗浄するために小グリッド別に保管した。3H-19区を中心として、片面調整尖頭器を主体とするBユニットが検出された。5日、3・4H区第Ⅲ層上部精査を開始した（～11月8日）。

11月10日～11月15日

第Ⅲ層上部に先土器時代遺物包含層が検出されたため、第Ⅲ層下部より下層について、遺物包含層の追求が必要であろうと判断した。そのため、すべての試掘孔及び発掘区に対して深層発掘を行った。しかし遺物は検出されず、また第Ⅲ層下部から、第Ⅳ層の魚沼層群上部層が堆積しているため、遺物包含層は存在しないと判断し、深層発掘を終了した。

11月17日～11月22日

碎片採集もれの実態把握と碎片の分布を把握するために、小グリッド別に洗浄（11月11日～19日）。一部の作業員は、来年度調査予定の瓜ヶ沢遺跡の試掘及び新たに発見した流沢の塚の測量・試掘を行う（11月17日～21日）。22日には器材の点検・整理を行い撤収した。堀之内町教育委員会・日本道路公団小出工事事務所に、発掘調査終了の旨を連絡し、正午には権現平遺跡の現地調査を完了した。

（註7） 布倉橋遺跡の石材組成、打製石斧製作技法が類似している（齋藤 1980）。

### 3. 層位

権現平遺跡は、第V段丘面に立地している。第V段丘構成物は、基盤は魚沼層群があり、その上に厚さ5mの砂礫層、1.7mの細砂層、0.6mの褐色火山灰層が堆積している（島津 1977）。今回の調査では、褐色火山灰層の上部まで掘り下げた3H-1の南北断面を、本遺跡の標準層序とした。特徴は下記のとおりである。

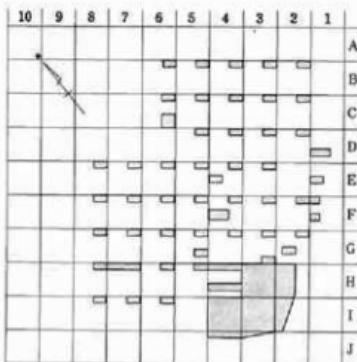
第I層 表土層（耕作土） 黒褐色を呈し粘性に乏しく軟質である。本層より打製石斧、フレイク等の縄文時代の遺物が、攪乱を受けた状態で存在した。

第II層 暗褐色土層 部分的に褐色火山灰層の小ブロック（1cm位）が混入する。

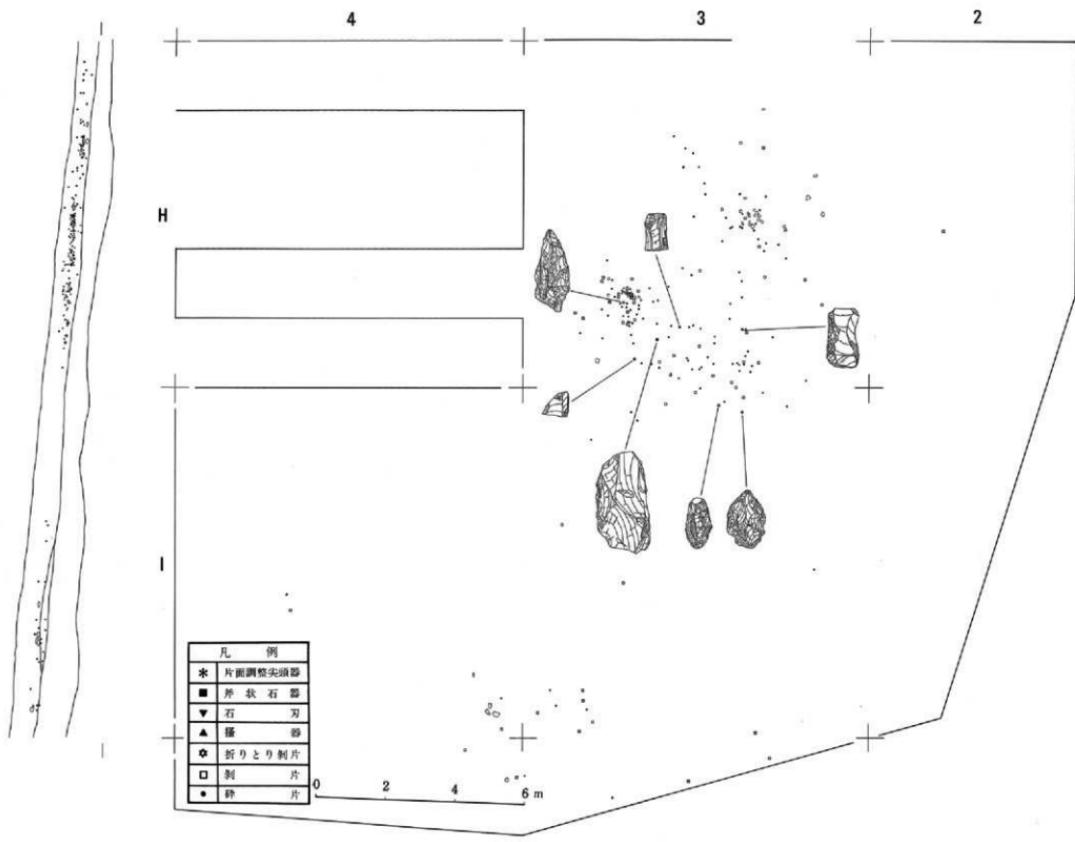
第III層 褐色火山灰層 40cm位の厚さで台地先端部のみ分布する。あまりしまってはおらず、炭化物片が若干認められた。本層上部に、石器群が包含されていた。

第IV層 褐色火山灰層 III層の下部層で細砂粒を含み堅くする。

（註8） 魚沼層群は、下部の塚山（互）層と上部の小国（夾巖炭）層にわけられる。塚山層は、巨礫を含む礫群と砂岩の互層で、11枚程の凝灰岩層が存在している。小国層は、砂岩・泥岩の薄互層と泥岩を主とし、礫岩・夾巖層が存在する（島津 1977）。



第3図 グリッド及び発掘区



第4図 遺物分布状況

### 第Ⅲ章 遺構と遺物

#### 1. 先土器時代

推定現存跡で確認された先土器時代の遺物は、第Ⅱ層下部～第Ⅲ層上部の軟質部に包含されていた。遺構として遺物集中地点（ユニット）が2ヶ所存在し、その中に礫群が3ヶ所あった。（註9）遺物は石器・剝片・礫群を構成する礫の3種があった。

##### （1）Aユニット

台地縁辺部に剝片7点、碎片6点が、第Ⅱ層下部～第Ⅲ層上部の径5mの範囲に集中している。この集中地点を指してAユニットと呼称する。Aユニットは、5個の礫からなる礫群（第1号礫群）を伴なっている。石器は検出されなかった。

###### 第1号礫群（第5図・図版第

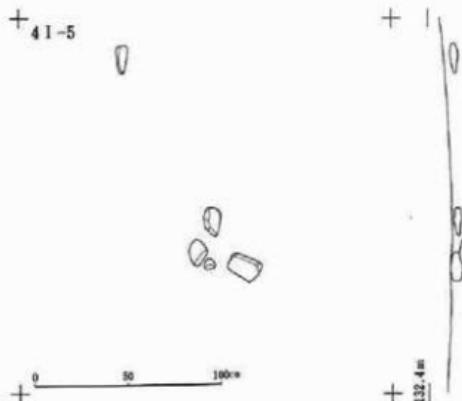
21図） 41-5区のⅢ層上部に分布する拳大の扁平礫のまとまりである。礫はまったく赤化しておらず、黒色付着物も認められないことから、熱を受けているかは不明である。ただし、礫群周辺には炭化物片の分布があった。

###### 剝片（第9図・図版第23図）

1は全長4.7cm、最大幅5.6cm、厚さ1.2cmの流紋岩の、多剥離面打面をもつ横長剝片である。2は全長3.7cm、最大幅2.8cm、厚さ0.4cmで流紋岩を用いており、正面に原石面を有し剥離面打面をもつ剝片である。3は全長5cm、最大幅1.9cm、厚さ0.5cmでチャートを用いており、剥離面打面をもつ石刃状剝片である。

##### （2）Bユニット

Aユニットより北へ約10m奥まった所に、尖頭器4点、尖頭器碎片3点、斧形状石器1点、石刃1点、搔器1点、折とり剝片1点、剝片82点、碎片141点が、第Ⅲ層上部に径10mの範囲に集中しており、Aユニットに比べて遺物分布が濃密である。この集中地点を指してBユニットと呼称する。Bユニットには拳大の礫と小礫で構成された礫群が2基伴なっている。南から第2・3号礫群とする。



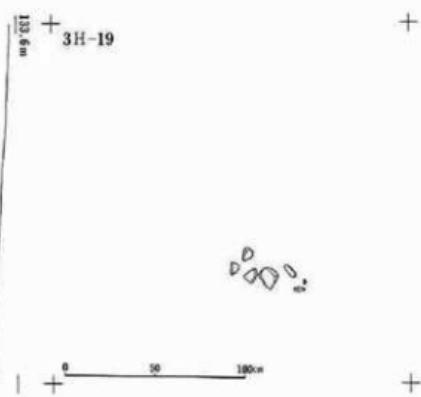
第5図 第1号礫群

第2号礫群（第6図・図版第22図） 3H-19区の第Ⅲ層  
上部に分布する拳大の礫と小礫のまとまりである。礫に黒色付着物はみられないが、7点中2点に赤化が認められた。なお、礫群周辺には炭化物片の分布があった。

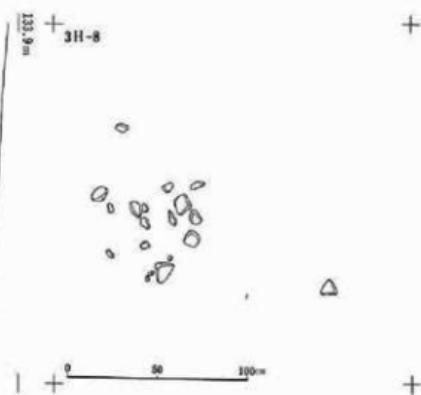
第3号礫群（第7図） 3H-8区の第Ⅳ層上部に分布する拳大の礫と小礫のまとまりである。礫には黒色付着物はみられないが、22点中7点に赤化が認められた。なお、礫群周辺には炭化物片の分布があった。また、第2号礫群との接合礫が存在した。

片面調整尖頭器（第8図・図版第23図） 4は基部欠損品である。最大長9.0cm、最大幅3.8cm、厚さ2.4cmの流紋岩製である。厚手の横長剝片を素材とし、右側縁は打面除去のため極厚形、薄形細部調整により整形されている。左側縁は主剥離面から行われた深形細部調整により整形されている。裏面は主剥離面を残す。

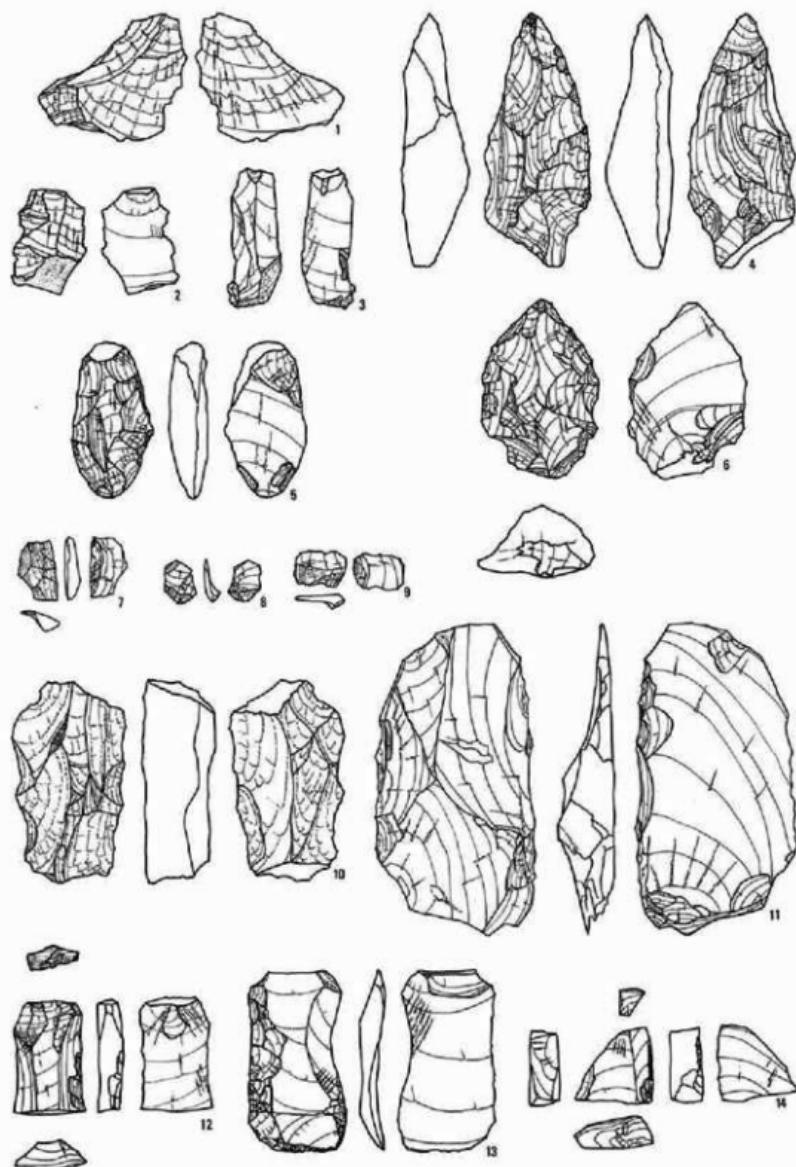
断面は最厚部が右側縁に寄るため、くさび形にやや似る。基部の欠損部は、正面から裏面にぬける力によって折れている。5は先端部が欠損している。最大長5.5cm、最大幅2.9cm、厚さ1.9cmの流紋岩製である。やや厚手の素材主剥離面より、両縁に薄形細部調整を施し、全体の輪郭を整形している。基部は打面除去が行われている。6は最大長6.3cm、最大幅4.2cm、厚さ2.1cmの流紋岩製である。素材の主剥離面より高い角度の深形細部調整を施し、基部は原石面打面・打瘤をとどめている。断面はかまぼこ状に近い。



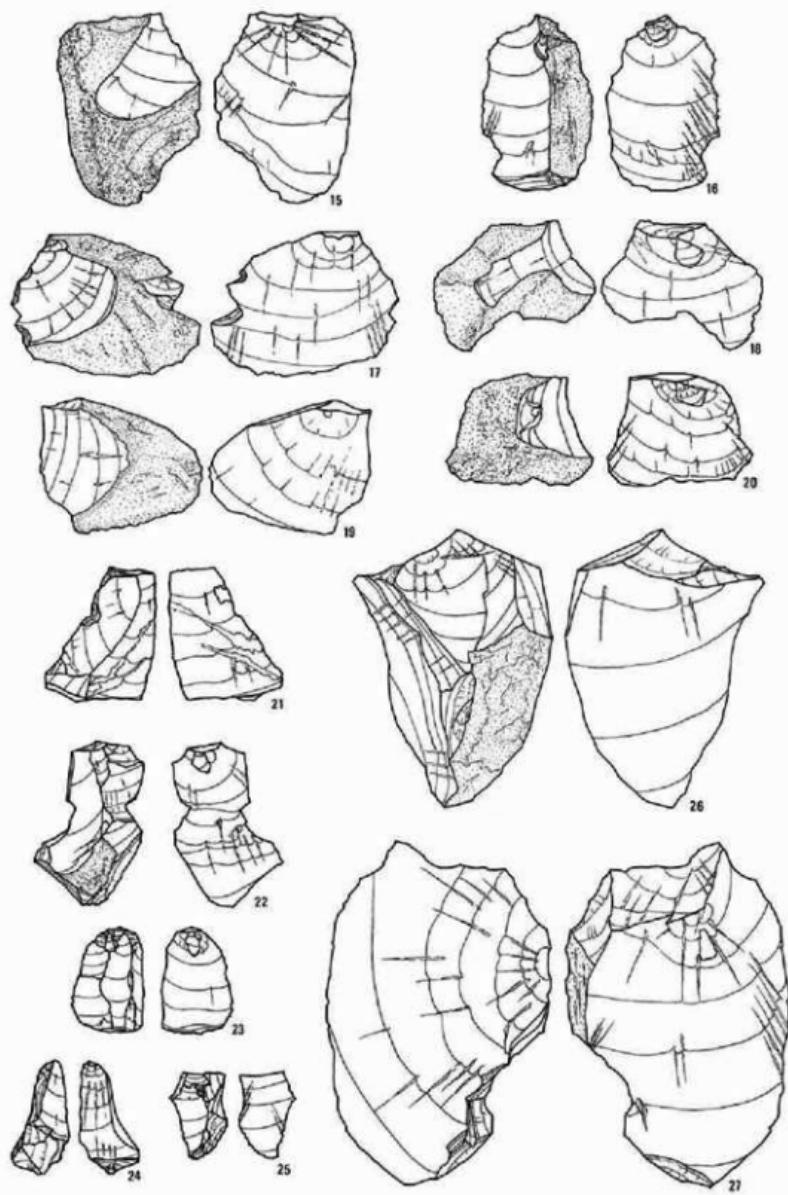
第6図 第2号礫群



第7図 第3号礫群



第8図 先土器時代資料 I (1~3 : Aユニット, 4~14 : Bユニット)



第9図 先土器時代資料Ⅱ (15~27 Bユニット)

尖頭器破片（第8図・図版第23図） 7～9は尖頭器製作または再成時に剥離された尖頭器碎片であろう。すべて流紋岩製である。

尖頭器（第8図・図版第23図） 10はBユニット発掘時の堆土から採集したものである。最大長7.2cm、最大幅3.8cm、厚さ2.7cmの流紋岩製である。風化度が著しく観察はむづかしいが、厚い剥片を粗い深形縫部調整によって輪郭を整えている。両端とも欠損している。剥離面に第Ⅲ層土が附着している点及び風化度から、Bユニットに伴なうものと考えた。

斧形状石器（第8図・図版第23図） 11は最大長11.2cm、最大幅5.7cm、厚さ2.1cmの安山岩製である。石器主軸と素材主軸は一致するが、刃部を調整する段階に打面除去が行われたと考えられる。右側縫は階段状剥離を施し、左側縫は厚いため90度に近い粗い剥離が施されている。裏面はほとんど調整されないまま、主剥離面を残している。刃部は欠損している。また、右側縫を刃部とした凸形削器とも考えられるが、斧形状石器として扱った。

石刀（第8図・図版第23図） 12は先端が正面から裏面にねげる力で折れており、最大長4.1cm、最大幅2.6cm、厚さ1.0cmを測るもので、石材は流紋岩である。多剥離面打面より剥離された厚みのある石刀である。

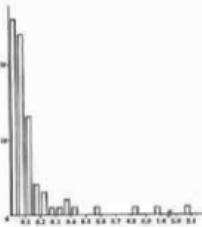
搔器（第8図・図版第23図） 13は最大長6.3cm、最大幅3.5cm、厚さ0.9cmの粘板岩製である。反りのある石刀状剥片を素材とし、打面、打瘤は除去されている。調整剥離は正面左側縫、右側縫刃部付近、刃部に施されている。両側縫部の稜線が特に磨滅を受けている。

折りとり側片（第8図・図版第23図） 14は厚い石刀状剥片を素材としている折りとり側片である。他の剥片と区別したのは、上下及び左側縫に折損が認められる点、右側縫に調整剥離が施されている点が認められることによる。最大長2.6cm、最大幅2.9cm、厚さ1.2cmの流紋岩製である。

側片（第9図・図版第24図） 53点の剥片から、ここでは13点を抽出して図示した。15～20は流紋岩の同一母岩資料である。すべて原石面を有し剥離面打面が存在する横長剥片・剥片の一組である。21～25は流紋岩の剥片・石刀状剥片・石核接つき石刀である。26は最大長9.9cm、最大幅7.2cm、厚さ2.8cmの大形に属する剥片である。27も最大長12.2cm、最大幅7.8cm、厚さ2.4cmの大形の剥片である。剥片剥離の際に90度の打面転位を行っていることが、明瞭に認められるものであり、打面再成剥片とも考えられる。

碎片（第10図） 碎片は201点検出され平均重量は0.73gである。201点中79点は堆土洗浄での結果検出したものであり、それらを重さと数量によってグラフ化し、いかに精度の高い発掘をしても採取もあるという事実を改めて理解できた。碎片は素材に二次的に剥離を施す際などに生じる。そのため、遺跡における碎片のまとまりを把握することが、遺跡のどこで石器が製作されたかを推測する手がかりとなる。

### (3) 母岩別資料（第11・12・13・15図、図版第25・26図）



第10図 碎片数量グラフ

両ユニット検出の剥片すべてを、母岩で識別したところ、母岩別資料として3点以上認められるものが12グループあった(第15図)。この母岩別資料の中から、接合例Aを抽出して第12・13・14図に示した。以下、この母岩別資料Aを紹介する。

母岩別資料Aは、Bユニットに伴なう第2号蝶群を中心に検出された、流紋岩の剥片12点である。ここでは、それらの剥片剥離技術をより正確に把握するために、接合資料間の遺存しない剥片及び残核の復元を試みた。それらの復元された剥片を「<sup>(11)</sup>欠失剥片」と呼称する。

剥片・欠失剥片の詳細については第3・4表のとおりである。

第11図は残存していた接合剥片と欠失剥片を接合し、剥離工程順を模式化したものである。接合状態からこの石核は本来長軸13.0cm、短軸9.0cm、厚さ8.0cmで円盤を半割したものであったことが知られる。石核から推定すると原石は13.0cm×16.0cmくらいの円盤であろう。以下、説明しやすく区分し、工程順に示す。また、接合資料の個別実測図を第14図に掲げて図示番号をもって説明していく。「欠失剥片」については、欠失剥片の頭文字のKを取り、K-1と略しておこう。

I [1+K-1→2→K-2→3→K-3→K-4→4→4-5→K-6]

同一剥離面である打面a・bより順次1+K-1・2・K-2が剥離された。その後剥離作業打面を約90度移動し、c等の打面から3・K-3を順次剥離する。次の段階で打面調整を部分的に何度も行っており、その一部の打面調整剥片がK-4に相当する。その後d等の打面から4・K-5・K-6の順番で剥離される。

II [5-6→7→K-7→K-8→8+9]

Iで打面調整された打面から順次剥離された。IIの段階の剥片打面には、力がぬけきらないために現われる打撃痕跡が認められる。

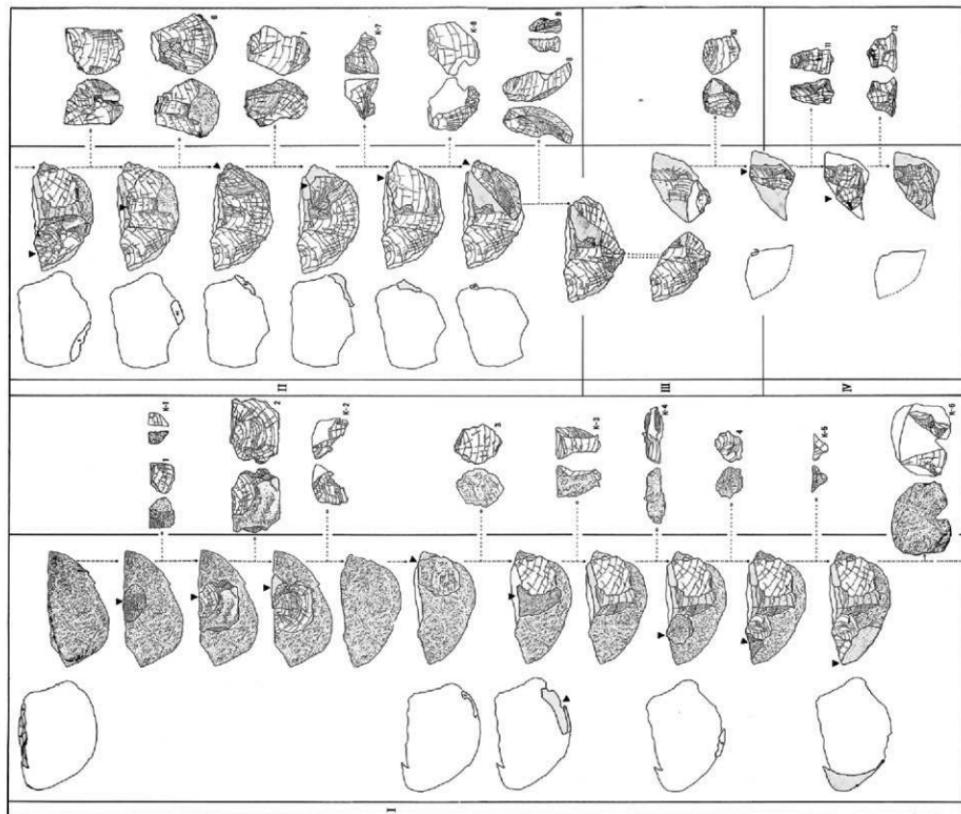
III [10]

I・IIで使用していた打面を90度転位し、Iの段階で2を剥離した際に生じた剥離面を打面iとして10が剥離される。また、この段階での石核の大きさは、10の先端に調整剥離が施され、10の主剥離面に切られていることから、欠失残核ほど大きくないようである。その大きさは、10の先端はIVで剥離される11の打面を結ぶライン最小限の輪郭の一部がのってくるものと考えられる。

IV [11→12]

IIIの段階での打面iを再度90度転位し、打面jを設定する。打面jはIの段階の打面a・bとは同じ高さである。11を剥離した際に生じた面を周囲から調整して12を剥離している。そのため12下端に調整剥離の一部が認められる。12は折損によって打面は存在しないもののリング等の観察から、さほど遠くない位置に打面が存在したと推測される。よってIVの段階においては、欠失残核とは比べられないほど、小さな石核となり欠失したものと考えられる。

以上、剥片剥離技術をまとめれば以下のとおりである。



第11図 母岩別資料 A 及び火成岩片判斷工程模式図

第12圖 母岩別資料 A 接合狀態

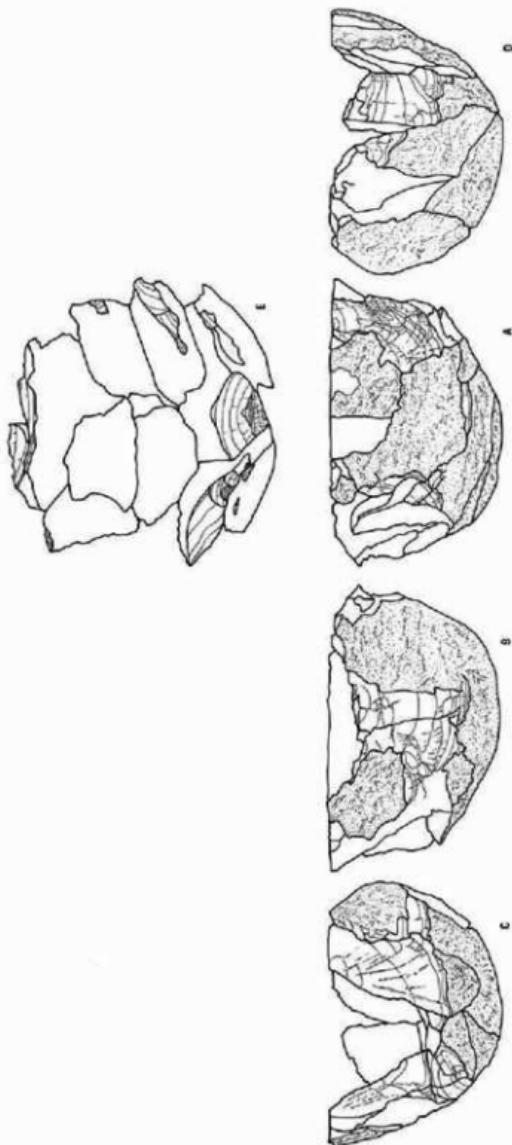
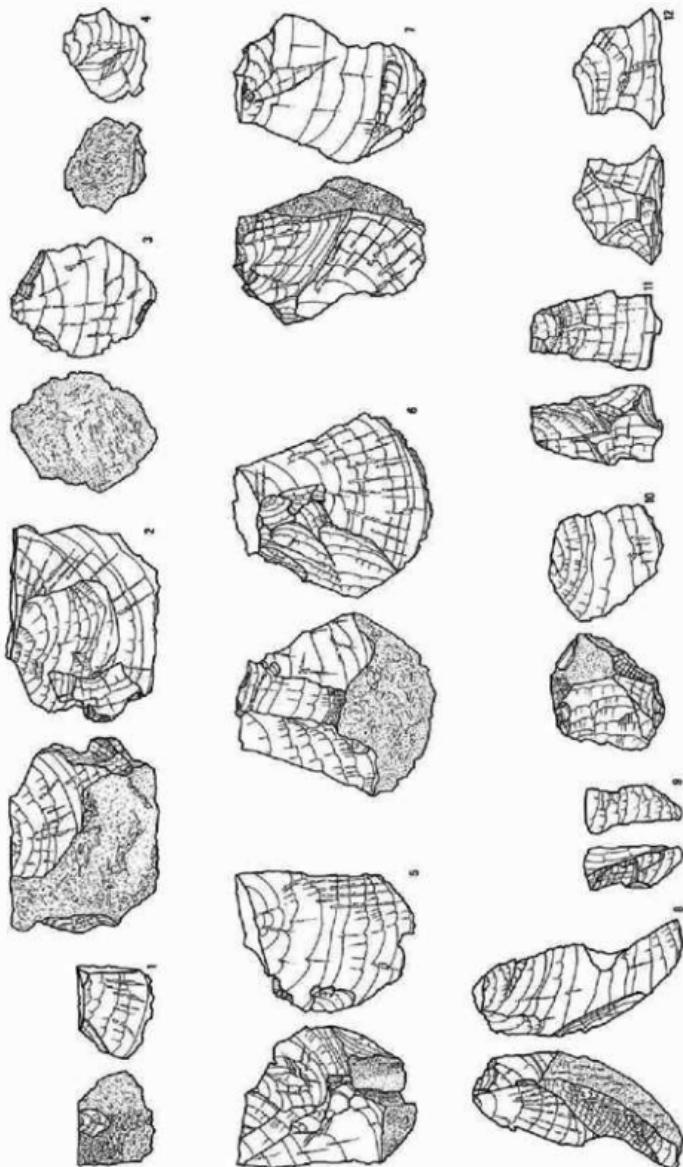


圖13 圖 母岩測接合資料A



円錐を半割した剥離面打面を持ち、打点を石核打面の周間に順次移動させていくような剥片剥離が展開された。この時薄い剥片がいくつか剥離される。その後、何度も打面調整を行い、打点を石核打面の周間に順次移動させていくような剥片剥離が展開された。剥離角は極めて鋭角なため、部厚い剥片がいくつか剥離された。そして打面を90度転位し、剥片剥離を行い、さらに90度の打面転位を行っている。これらの剥片剥離によって得られた剥片で遺存しないものを、欠失剥片として復元を試みた結果、さほど大きくない完形化していない剥片が存在したものと推測される。それらの欠失剥片から、石器素材を推測するならば、削器しか考えられない。また、縦長剥片になりうる調整剥片が存在しないことから、尖頭器の素材として使用されている可能性がある。このように欠失剥片を復元することによって、遺存しない剥離面の実体化が可能であり、下記のことが推測される。

1. 剥片剥離技術を明確に把握できる。
2. 欠失剥片から石器の素材に対するアプローチが可能である。
3. 欠失剥片は他の地点へ移動している可能性が考えられる。欠失剥片と母岩を照合することによって、接合すれば異なる地点を結びつける鍵となる。

以上のように欠失剥片と接合剥片相互の関わりを精査することは剥片技術の研究には有効な方法ではないかと考えている。

このように、欠失剥片と接合剥片相互の取り組みは、研究の方向性として有効な方法ではないだろうか。

(註9) 石器・剥片類名称及び石器製作工程による各名称は(赤澤威・小田静夫・山中一郎『日本の旧石器』立風書房 1980)によった。なお、その他用語の設定については『瓜ヶ沢遺跡』(佐藤雅一 1982予定)で説明する。

(註10) 石質鑑定は新潟県立教育センター 若林茂敬氏から御教示を得た。個々の石質同定は筆者が行った。若林氏によれば、流紋岩と安山岩は基本的な線引きはむずかしく、観察者の主觀によるものが多いという。また、流紋岩でも色調など一定しておらず、さまざまな様相を呈している。これは硬化する段階の諸条件によって、密度や色調の相違が生じることによる。

(註11) ここでいう「欠失剥片」とは、接合資料間の欠失している部分に、石音を流し込んで遺存した剥片の剥離面を、両面もしくは片面に転写して作りだしたものという。欠失剥片は、一打撃でその欠失剥片が剥離された確証ではなく、1つの欠失剥片に2つ以上の欠失剥片が含まれている可能性があり、その点を考慮しなければならない。しかし、接合資料間の欠失部での、最小限の剥離面数・形状を復元することは可能である。また、復元しきれない欠失部でも、欠失剥片の集合体として「欠失残核」が復元される。しかし最終段階の残核と比べ類似性はとはしいものであろう。だが欠失残核を作ることによって、接合作業の際にベースになるため、安定して接合作業が行なわれる利点をもっている。このような欠失剥片を復元する作業は、遺存する接合資料をもとに、より確実に剥片剥離の実態を把握するための、ひとつの方法であると考える。

## 2. 繩文時代・中世

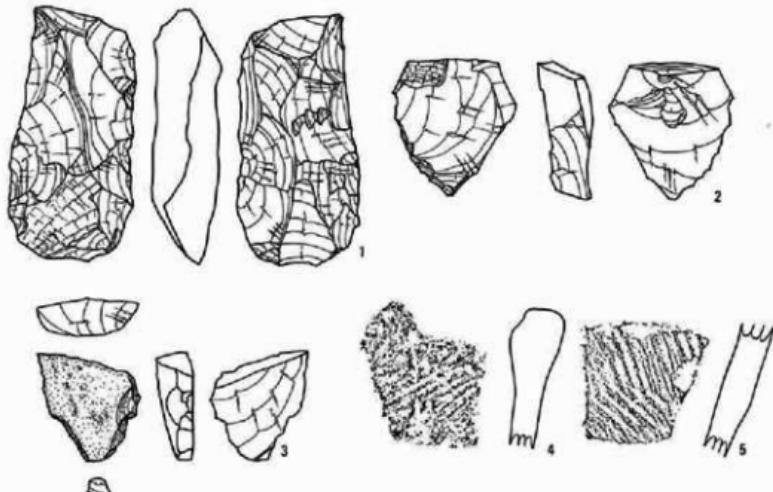
縄文時代・中世の遺物は、第Ⅰ層の表土から出土し、すべて耕作の攪乱を受けていた。遺物は縄文土器片・打製石斧・剥片・中世陶器片が検出された。遺構は検出されなかった。

縄文土器片（第15図4） 色調は明褐色で、胎土に小礫を若干混入する口縁部破片である。口縁には山形の肥大する小突起がある。器面にはL-Rの繩文が施されている。時期不明。

打製石斧（第15図1） 全長8.0cm、最大幅3.9cm、厚さ2.0cmの流紋岩製である。両側縁から粗い調整剝離が施され、正面には棱をもつ。刃部は節理面を有し、裏面となす角度は45度を測り片刃状である。裏面は平坦に近い調整剝離が施されている。

細部調整剝片（第14図2・3） 2は全長4.3cm、最大幅4.0cm、厚さ1.5cm、メノウ製の剥片である。剝離面打面を有し、左側縁に粗い調整剝離が施され、先端は正面から裏面にぬける力で折損している。3は全長3.3cm、最大幅3.1cm、厚さ1.2cmの流紋岩製の剥片である。正面は原石面を有し、石器主軸と素材主軸が一致している。先端は両側縁からの調整剝離によって、尖頭状に整形されている。基部は正面右側縁からぬける力で折損している。先端を尖頭状に調整していることから、石器基部の可能性がある。

中世陶器片（第14図5） 色調は暗黒灰色を呈し、細砂粒を混入する壺の胴部破片である。外面は平行叩き目、内面にはナデが見られる。珠洲焼に類似する。



第14図 縄文時代・中世の遺物

## 第Ⅳ章 まとめ

本遺跡を特徴づける先土器時代資料について若干触れておきたい。

### 出土遺物

第Ⅱ層下部—第Ⅲ層上部軟質部において、2ヶ所のユニットが確認された。Aユニットは径5mの規模で、石器は存在せず、剝片7点、碎片6点、礫群1基が検出されている。Bユニットは径10mの規模で、片面調整尖頭器4点、尖頭器碎片3点、斧形状石器1点、石刀1点、搔器1点、折りとり剝片1点、剝片112点、碎片68点、礫群2基が検出されている。相互のユニットにおける接合関係は認められず、共存関係は明確ではない。しかし、第一に相互のユニットの主体がともに第Ⅲ層上部軟質部に包含されていること、第二に相互のユニットの剝片・碎片は接合しないが、母岩別資料と確認されるものが存在することから、A・B両ユニットは共存関係にあるとの想定が可能である（第15図）。各ユニット内で確認された礫群には、第一に拳大の礫と小礫による小さなまとまりがある。第二に赤化したものがほとんど認められない。第三に破損面のある礫が多く存在し、礫群内で接合する。第四に礫の一部に打痕のあるものが含まれている。第五に礫群周辺には炭化物片の分布があった。以上五点の共通性が認められた。これらの共通性は、両ユニットの共存関係の裏付けになろう。

### 石材組成

本遺跡で検出された石材は、若林茂敬氏の観察によれば、流紋岩・安山岩・チャート・泥岩の4種類に大別される。そのうち全体の9割を流紋岩が占める。しかし、流紋岩と安山岩の識別は専門家でもむずかしく、通常考古学研究者の認識している安山岩は、流紋岩にきわめて類似している。そこで流紋岩と安山岩を同一グループとみなし、周辺の河床礫の組成と本遺跡の石材組成を比べてみよう（第17図）。周辺河床礫中の流紋岩と安山岩の占有率は、B地点では65%でC地点より魚野川上流ではほとんど認められず、D地点で15%である。原石の供給地を河床に求めるならば、このような組成率は、本遺跡の石材組成に合致しない結果になる。したがって、周辺の河原において意識的に流紋岩・安山岩を選定したと思われる。

### 遺跡の位置付け

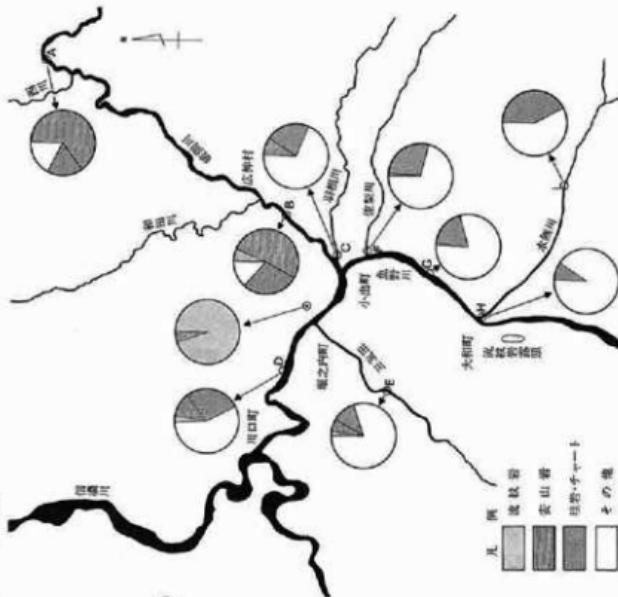
本地域では、ほとんど先土器時代及び縄文時代草創期の調査が行われていない。そのため詳細な時間的位置について、現段階では不詳といわざるをえない。しかし、①褐色火山灰層（第Ⅲ層）上部軟質部に遺物の包含主体があること。②片面調整尖頭器を主体とする石器組成であること。③石材組成の9割が流紋岩であること。④ユニットに礫群が伴出したこと。⑤礫群の縮小化。以上5点の諸特徴をふまえると、硬質頁岩を主体とする先土器時代第Ⅲ文化期の月岡遺跡・荒屋遺跡より新しく、チャートを主体とする縄文時代草創期の小瀬ヶ沢洞窟より古く位置づけることができ、先土器時代第Ⅳ文化期の大枠の中で理解できよう。

（佐藤雅一）

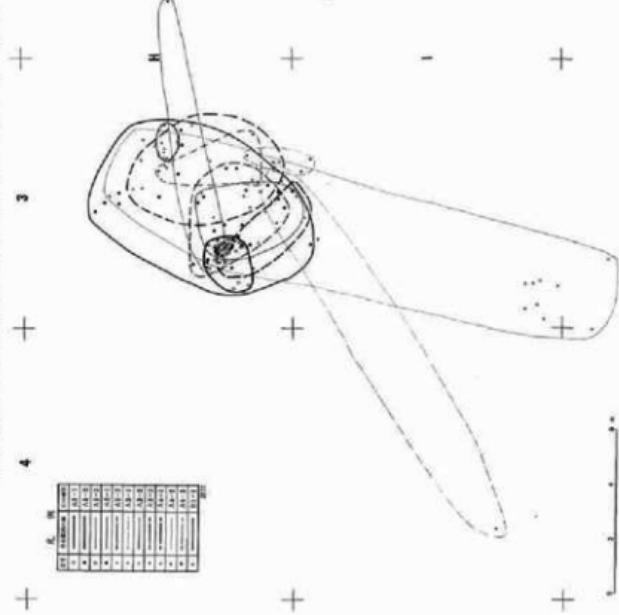
(註12)

ドット化して検出した割片・碎片中、識別可能な119点の結果について、石材の密度・色調等によって識別を試みた。その結果は下記のごとく12点の母岩別資料に分類できた。  
 A 1 - 1 流紋岩 斜墨灰岩色を呈す。流理構造が密で斜長石の顆粒の少ないもの：A 1 - 2 流紋岩 墓墨灰岩色を呈す。流理構造が認められた斜長石の脈もよく認められるもの：A 1 - 3 流紋岩 斜墨灰岩色を呈す。流理構造は認めにくく斜長石の脈が頗るなもの：A 2 - 1 流紋岩 黄褐色を呈す。流理構造は認めにくく斜長石の脈がないもの：A 2 - 2 流紋岩 黄褐色を呈す。流理構造が認められ斜長石の脈があるもの：A 3 - 1 流紋岩

黑色を呈す。流理構造が皆である：A 3 - 2 流紋岩 黑色を呈す。流理構造がさほど認められないもの：A 3 - 3 流紋岩 黑色を呈す。流理構造がさほど認められないもの：A 4 - 1 流紋岩 灰色を呈す。細かな流理構造のしまが明瞭に認められるもの：A 4 - 2 流紋岩 灰色を呈す。細かな流理構造が認められるもの：A 4 - 3 流紋岩 灰色を呈す。断面風景が海綿的に密になるもの：A 4 - 4 流紋岩 灰色を呈す。断面風景は認められるものの：B 1 - 1 ガラス質安山岩 黑色を呈す。流理構造は認めにくく酸化鉄の付着のあるもの：B 1 - 2 流紋岩 黑色を呈す。流理構造は皆のためにほとんど認められず白度があるもの。



第16図 桶現平野跡周辺の河床礫の組成



第15図 母岩別資料分布状況

### 参考文献

- 赤澤 威・小田静夫・山中一郎 1980 「日本の旧石器」 立風書房
- 伊藤富治夫・富樫雅彦 1980 「貫井南遺跡」 小金井市貫井南遺跡調査会
- 福場 明・歌代 劍 1977 「3・2更新統(洪積統)」「新潟県地質図説明書」128~137頁  
新潟県
- 岡村道雄 1979 「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例—その1—」「東北歴史資料館  
研究紀要第5巻」 1~19頁
- 小田静夫 1974 「調付市仙川遺跡」 東京都埋蔵文化財調査報告書第2集 東京都教育委員会
- 加藤 乾 1978 「弓張平遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告第15集 山形県教育委員会
- 加藤 乾・鶴丸俊明 1980 「国録 石器の基礎知識Ⅰ 先土器(上)」 柏書房
- 加藤 乾・鶴丸俊明 1980 「国録 石器の基礎知識Ⅱ 先土器(下)」 柏書房
- 小林達雄編 1980 「王遺跡」 国学院大学文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1981 「王遺跡 1981」 国学院大学文学部考古学研究室
- 佐藤正俊・大類 誠 1980 「日山沢遺跡」 山形県埋蔵文化財報告第29集 山形県教育委員会
- 島津光夫 1977 「8・新世界」「新潟県地質図説明書」36~44頁 新潟県
- 白石浩之 1979 「尖頭器石器群研究の現状と展望」「神奈川考古第7号」 117~148頁 神  
奈川考古同人会
- 白石浩之・鈴木次郎 1980 「寺尾遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告第18 神奈川県教育委員会
- 鈴木郁夫 1977 「地形分類図」「新潟県中越地域土地分類基本調査 小千谷」 11~27頁 新潟  
県農地部農地整備課
- 鈴木遺跡調査会 1978 「鈴木遺跡Ⅰ」 小平市鈴木遺跡調査会
- 岸沢長介 1955 「新潟県荒屋遺跡における繩石刃文化と荒屋型調刻刃(予報)」「第四紀研究  
1~5」 174~181頁 第四紀研究会
- 中村孝三郎 1960 「小瀬ヶ沢洞窟」 長岡市立科学博物館研究報告書No3 長岡市立科学博物  
館
- 中村孝三郎 1971 「御淵上遺跡」「日本の旧石器文化」第2巻(上) 242~254頁 藤山園
- 橋本 正 1977 「直坂Ⅱ遺跡第5ユニットから」「どるめんNo15」 63~80頁 JICC出  
版局
- 星野芳郎 1969 「魚野川流域の史前文化について」

第1表 硬質岩

番号	厚さ (cm)	鉄鉱 有無	磁化 有無	石英 有無	斜長 石英	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	第3号標		第4号標		第5号標		第6号標		第7号標						
										砂岩	頁岩	砂岩	頁岩	砂岩	頁岩	砂岩	頁岩	砂岩	頁岩					
1-1	0	2	X	X	砂岩	打抜有り 1-3層合 成化鉄鉱 打抜有り 成化鉄鉱	106	0	3	X	X	子サート	4	4と組合	1 長手形片	2.8×3.4×0.6	0	0	94	X	0	X	X	8
2	0	3	X	X	砂岩	打抜有り 成化鉄鉱	2	0	1	X	X	葉緑岩	5	3と組合	2 長手形片	5.3×7.3×1.2	0	0	72	X	X	-	X	62
3	0	2	X	X	砂岩	打抜有り 成化鉄鉱	3	55	0	1	X	X	子サート	3	斜片	5.5×4.5×1.1	0	0	88	O	X	-	X	30
4	0	1	X	X	鞍山岩		4	0	3	X	X	子サート	4	斜手形片	2.7×3.8×1.2	0	0	52	X	O	X	X	15	
5	0	3	X	X	チヤート		5	73	0	3	X	X	砂岩	5	斜片	6.3×5.8×1.6	0	0	40	O	X	-	X	62
6	0	3	X	X	チヤート		6	29	0	1	X	X	砂岩	6	斜片	7.7×7.0×2.9	0	0	69	X	X	-	X	136
7	0	3	X	X	チヤート		7	83	0	2	X	X	片麻岩	7	斜片	7.3×4.9×1.9	0	0	79	X	X	-	X	71
8	0	3	X	X	チヤート		8	109	0	2	O	X	かん砂岩	8	斜片	8.2×2.2×2.5	0	0	52	X	O	X	X	65
9	0	1	X	X	出云山岩		9	0	1	X	X	片麻岩	9	斜片	3.32×1.6×1.3	X	0	92	X	X	-	X	8	
10	0	3	X	X	チヤート	成化鉄鉱	10	69	X	-	O	X	片麻岩	10	斜片	4.5×4.0×1.9	0	0	55	X	X	-	X	21
11	0	1	X	X	チヤート		11	0	1	O	X	砂岩	11	石英鉄鉱片	4.5×2.9×1.1	X	0	73	X	O	X	X	14	
12	0	2	O	X	ガラス質 成化鉄鉱		12	0	1	O	X	安山岩	12	斜片	3.3×4.5×1.2	X	X	-	-	-	-	X	12	
13	0	3	X	X	チヤート		13	X	-	X	X	砂岩	13	斜片	3.3×4.5×1.2	X	X	-	-	-	-	X	12	
14	0	3	X	X	チヤート		14	68	0	4	O	X	砂岩	14	斜片	2.9×2.0×0.6	1	1	2.9×2.0×0.6	1	2.9×2.0×0.6	1	2.9×2.0×0.6	1
15	0	3	X	X	チヤート		15	78	0	4	O	X	砂岩	15	斜片	4.2×5.3×1.8	0	2	4.2×5.3×1.8	0	4.2×5.3×1.8	0	4.2×5.3×1.8	0
16	0	3	X	X	チヤート		16	58	0	4	O	X	砂岩	16	斜片	3.1×3.3×0.3	4	3	3.1×3.3×0.3	4	3.1×3.3×0.3	4	3.1×3.3×0.3	4
17	0	2	X	X	花崗岩 つばかずり		17	67	0	3	O	X	砂岩	17	斜片	4.1×3.4×0.8	4	4	4.1×3.4×0.8	4	4.1×3.4×0.8	4	4.1×3.4×0.8	4
18	0	1	O	X	花崗岩 つばかずり		18	35	0	4	X	X	子サート	18	斜片	5.1×6.3×1.1	4	5	5.1×6.3×1.1	4	5.1×6.3×1.1	4	5.1×6.3×1.1	4
19	0	2	X	X	花崗岩 つばかずり		19	0	2	X	X	子サート	19	斜片	5.1×6.3×1.1	4	6	5.1×6.3×1.1	4	5.1×6.3×1.1	4	5.1×6.3×1.1	4	
20	0	1	O	X	花崗岩 つばかずり		20	0	1	X	X	片麻岩	20	斜片	5.1×6.3×2.1	2	7	5.1×6.3×2.1	2	5.1×6.3×2.1	2	5.1×6.3×2.1	2	
21	0	2	X	X	花崗岩 つばかずり		21	137	0	2	X	X	片麻岩	21	斜片	3.7×4.6×1.0	6	8	3.7×4.6×1.0	6	3.7×4.6×1.0	6	3.7×4.6×1.0	6
22	0	2	X	X	花崗岩 つばかずり		22	0	2	X	X	片麻岩	22	斜片	6.6×4.3×1.2	7	9	6.6×4.3×1.2	7	6.6×4.3×1.2	7	6.6×4.3×1.2	7	

第2表 母岩別資料A概要表

番号	長さ×幅×厚さ(cm)	鉄鉱 有無	第3委 剥離試験表		第4委 剥離試験表		第5委 剥離試験表		第6委 剥離試験表		第7委 剥離試験表	
			斜片	片麻岩								
1	2.9×2.0×0.6	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
2	4.2×5.3×1.8	0	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3
3	3.1×3.3×0.3	4	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4
4	4.1×3.4×0.8	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5
5	5.1×6.3×1.1	4	5	5	6	6	6	6	6	6	6	6
6	5.1×6.3×2.1	2	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8
7	3.7×4.6×1.0	6	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8
8	6.6×4.3×1.2	7	8	8	9	9	9	9	9	9	9	9

第4章 磁片(逻辑处理)观察表

種別	規格	長さ×幅×厚さ (mm)	断面形状	打抜孔 (φmm)	引抜孔 (φmm)	新規の 寸法	既存の 寸法	規格の 寸法	規格の 寸法	規格の 寸法	規格の 寸法	規格の 寸法
1 鈑片	2.4X1.9X0.4	X	-	-	○	X	X	1.2	A1-1			
2 刃片	4.4X5.7X1.2	O	O	60	X	X	-	X	20	A3-1	3と合	
3 鈑片	4.7X5.8X1.4	O	O	65	X	X	-	X	32	A2-1	3と合	
4 刃片	5.2X6.8X1.2	O	O	65	X	X	-	X	35	A2-1	3と合	
5 鈑片	2.1X1.7X0.2	X	O	57	△	X	-	X	65	A1-2		
6 鈑片	2.8X2.8X1.0	X	O	82	O	O	X	X	4.0	A1-1		
7 刃片	5.5X2.7X0.5	X	O	82	△	X	-	X	7.5	A1-2		
8 鈑片	1.3X1.9X0.2	X	O	82	X	X	-	X	3.5	A1-1		
9 鈑片	3.4X1.7X0.2	X	O	84	X	X	-	X	1.4	A1-2		
10 刃片	5.8X4.1X1.5	O	O	82	X	O	X	X	25	A4-1		
11 鈑片	2.6X1.6X0.6	X	O	78	O	X	-	X	6	A4		
12 刃片	4.2X5.6X1.5	O	O	95	X	X	-	X	26	A2-2		
13 鈑片	4.2X5.6X1.5	O	O	95	X	X	-	X	26	A2-2		
14 刃片	2.0X1.9X0.2	X	X	-	O	X	X	X	6.5	A1-2		
15 鈑片	2.2X4.7X0.2	X	X	-	O	X	X	X	35	A1-2		
16 刃片	3.0X5.5X1.1	O	O	-	O	O	X	X	17	A2-2		
17 鈑片	0.8X1.9X0.2	X	O	-	O	O	X	X	15	A1-2		
18 鈑片	1.4X1.8X0.3	X	O	84	△	X	X	X	6.5	A1-2		
19 鈑片	1.0X1.1X0.1	X	O	-	O	X	X	X	0.1	A3		
20 鈑片	2.5X1.7X0.5	X	X	-	O	X	X	X	1.5	A4-3		
21 鈑片	2.5X5.1X0.5	X	X	-	O	X	X	X	5	A1-3		
22 鈑片	2.6X1.6X0.6	O	O	68	X	X	-	X	1.1	改良品		
23 刃片	5.1X7.0X1.2	O	O	53	-	-	X	X	36	ガラス質安全用		
24 鈑片	1.5X2.4X0.2	X	X	-	O	X	X	X	0.45	A4-3		
25 鈑片	1.5X1.5X0.2	X	X	-	O	X	X	X	0.7	A4-3		
26 鈑片	2.0X3.8X0.5	X	O	74	O	X	-	X	1.7	A1-2		
27 鈑片	1.6X1.9X0.6	O	O	86	X	X	-	X	5.5	A4-2		
28 鈑片	1.5X1.8X0.2	X	O	76	O	X	-	X	0.65	A3-1		
29 鈑片	2.0X1.9X0.2	X	O	-	O	X	X	X	0.45	A3-1		
30 鈑片	2.0X1.9X0.2	X	O	-	O	X	X	X	0.45	A3-1		

種類	長さ×幅×厚さ (cm)	表面仕上げ の仕様	引張 荷重 (kgf)	引張 荷重 (kgf)	引張 荷重 (kgf)		引張 荷重 (kgf)	引張 荷重 (kgf)	引張 荷重 (kgf)
					引張 荷重 (kgf)	引張 荷重 (kgf)			
28 純片	0.8×0.9×0.1	X	X	-	○	X	X	0.05	A3-2
30 純片	3.7×4.1×0.7	X	X	79	-	X	X	0.05	A3-2
40 純片	0.65×0.8×0.1	X	○	88	○	X	X	0.1	B1-1
41 純片	0.6×0.8×0.1	X	○	-	○	X	①	16	B1-1 布と組合
42 純片	3.3×4.3×1.4	X	○	-	○	X	X	0.06	A3-2
43 純片	0.8×1.0×0.1	X	X	-	○	X	X	1.4	A3-2
44 純片	3.1×2.1×0.2	X	X	-	○	X	X	0.65	A3-2
45 純片	1.9×1.5×0.4	X	X	62	-	○	-	0.79	
46 純片	6.5×5.2×0.9	X	○	77	○	X	-	X	A1-2
47 純片	1.5×4.8×0.4	X	○	-	○	X	X	0.85	A1-2
48 純片	5.0×5.2×0.7	X	○	80	○	○	X	10	A1-3
49 純片	3.0×3.5×0.3	X	X	-	○	X	X	20	B1-1 42上割合
50 純片	4.0×5.2×1.8	X	X	59	X	-	X	22	A2-1 2上割合
51 純片	9.9×8.8×2.9	○	②	63	X	X	-	X	160 ガラス貼面 黒化加工
52 純片	1.9×2.2×0.2	X	○	77	X	X	-	X	A3-2
53 純片	1.2×1.9×0.3	X	X	81	X	X	-	X	A1-1
54 純片	1.1×1.7×0.2	X	X	-	○	X	X	0.35	A1-1
55 純片	0.33×0.7×0.6	X	X	-	○	X	X	0.3	A1-2
56 純片	0.8×1.0×0.1	X	X	-	○	X	X	0.06	A1-1
57 純片	0.6×0.7×0.1	X	X	-	○	X	X	0.06	A1-1
58 純片	1.1×2.0×0.3	X	X	-	○	X	X	0.55	A1-1
59 純片	0.8×1.2×0.2	X	○	65	X	X	-	0.15	A1-1
60 純片	1.5×1.2×0.1	X	X	-	○	X	X	0.25	A1-2
61 純片	1.2×1.9×0.2	X	○	88	△	X	-	0.45	A1-3
63 純片	0.5×0.7×0.1	X	○	77	X	X	-	0.03	A1-1
64 純片	0.6×0.6×0.05	X	X	-	-	○	X	0.01	A1-1
65 純片	0.9×1.1×0.2	X	○	88	△	X	X	0.15	A1-3
66 純片	0.8×0.7×0.1	X	X	-	○	X	X	0.05	A1-1
67 純片	2.5×3.6×0.9	○	○	67	X	X	-	4.5	A1-1
68 純片	0.7×1.2×0.1	X	○	85	△	O	X	0.8	A1-1

No.	種別	延長×幅×厚さ (mm)	鉛直面打合の 有無	横面打合の 有無	打合の 有無	表面仕上げ		底面仕上げ	底面の 有無	備考
						粗面	滑面			
69	鉄片	0.5×1.5×0.2	X	O	X	-	X	X	X	A1-2
70	鉄片	0.3×0.3×0.1	X	X	-	O	X	X	X	A1-1
71	鉄片	0.6×0.7×0.2	X	O	O	-	O	X	X	0.1 A1-3
72	鉄片	1.6×2.7×0.2	X	X	-	O	X	X	X	0.6 A1-2
73	鉄片	0.7×0.7×0.2	X	X	-	O	X	X	X	0.05 A1-1
74	鉄片	1.5×2.1×0.4	X	X	-	O	X	X	X	1.35 A1-2
75	鉄片	1.4×1.7×0.2	X	O	O	-	O	X	X	0.4 A1-2
76	鉄片	1.1×1.7×0.3	X	O	O	△	O	X	X	0.6 A1-2
77	鉄片	1.1×1.7×0.3	X	O	O	△	O	X	X	0.6 A1-2
78	鉄片	1.1×1.6×0.2	X	X	-	O	-	-	X	0.2 A3-2
79	鉄片	2.1×2.0×0.3	X	X	-	O	X	X	X	0.9 A1-2
80	鉄片	2.3×2.0×0.3	O	O	O	△	X	-	X	3 A4-1
81	鉄片	1.7×0.9×0.2	X	X	O	△	X	X	X	0.3 鋼板
82	鉄片	2.9×2.9×0.2	X	X	O	△	O	X	X	1.45 A1-2
83	鉄片	1.5×1.5×0.2	X	X	-	O	X	X	X	0.5 A4-2
84	鉄片	1.1×1.2×0.2	O	O	O	△	X	-	X	7.4 A2-2
85	鉄片	3.1×2.0×0.6	X	O	O	△	X	-	X	0.4 A1-3
86	鉄片	3.1×2.0×0.6	X	O	O	△	X	-	X	4 A1-3
87	鉄片	1.8×1.3×0.1	X	X	-	O	X	X	X	0.2 A3-4
88	鉄片	3.1×2.0×0.6	X	O	O	△	X	-	X	7 A4-1
89	鉄片	1.8×1.3×0.1	X	X	-	O	X	X	X	100 鋼板
90	鋼片	3.7×1.7×0.12	O	O	O	△	X	-	X	15 mB(底板)
91	鋼片	8.8×5.9×2.0	O	O	O	△	X	-	X	3 A4
92	鋼片	3.4×3.5×1.2	X	O	O	△	X	-	X	3 A4
93	鋼片	3.7×1.7×0.8	X	O	O	△	X	-	X	3 A4
94	鉄片	1.6×2.7×0.5	X	O	O	△	X	-	X	3 A4 4つ角付アーチ
95	鉄片	2.9×2.6×0.5	X	O	O	△	X	-	X	3 鋼板
96	鉄片	0.8×0.9×0.3	X	O	O	△	X	-	X	0.3 A4-3
97	鉄片	1.5×1.2×0.2	X	O	O	△	X	-	X	6 A3-4
98	鉄片	4.1×1.7×0.3	X	O	O	△	X	-	X	5 A3-3
99	鉄片	4.1×1.7×0.3	X	O	O	△	X	-	X	0.3 A4
100	鋼片	1.6×1.4×0.2	X	X	-	O	X	X	X	38.6×121.0

No.	種別	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(約) kg/m <sup>3</sup>	原木の寸法(約) 径寸(外径×内径) ×高さ(約) mm		打込み 溝の寸法 ×高さ(約) mm		表面の 寸法(約) 幅×高さ mm		表面の 寸法(約) 幅×高さ mm		重さ (kg)	偏 差
				径寸	高さ	内径	高さ	幅	高さ	幅	高さ		
143	棒片	0.8×1.7×0.2	X	○	79	△	○	X	X	0.2	A1-2		
144	棒片	1.6×0.9×0.2	X	○	45	○	○	X	X	0.2	A1-2		
145	棒片	0.7×1.4×0.1	X	×	—	○	—	X	X	0.15	A1-3		
146	棒片	1.2×1.4×0.3	X	×	—	○	—	X	X	0.25	A1-2		
147	棒片	0.9×1.4×0.2	X	○	81	×	○	X	X	0.2	A1-2		
148	棒片	1.4×0.8×0.2	X	○	88	△	○	X	X	0.2	A1-3		
149	棒片	3.5×3.1×0.4	X	○	62	○	○	X	X	4	A1-2		
150	棒片	12.2×7.7×2.3	○	○	61	○	○	X	X	—	●●●●		
151	棒片	2.5×2.1×0.5	○	⑧	88	×	—	—	—	2.5	A3		
152	棒片	1.4×1.3×0.1	X	×	—	○	—	X	X	0.25	A4-2		
153	棒片	2.6×1.7×0.7	X	○	74	△	○	X	X	3	A3		
154	棒片	0.6×0.7×0.1	X	○	77	△	○	X	X	0.05	A3-3		
155	棒片	1.6×1.8×0.2	X	○	—	○	—	X	X	0.3	A3-2		
156	棒片	2.1×1.8×0.4	X	○	95	—	—	X	X	0.8	A3		
157	棒片	1.5×1.6×0.1	X	×	—	○	—	X	X	0.3	A3		
158	棒片	11.2×8.1×0.2	X	○	87	○	○	X	X	0.3	A3-1		
159	棒片	2.0×2.6×0.5	X	○	75	×	○	X	X	3.5	A4		
160	棒片	0.7×1.2×0.1	X	○	73	○	○	X	X	0.15	A5-3		
161	棒片	1.0×1.6×0.2	X	○	—	○	—	X	X	0.4	A1-2		
162	棒片	1.3×1.1×0.2	X	×	—	○	—	X	X	0.15	A1-3		
163	棒片	1.3×1.8×0.2	X	○	90	×	○	—	X	0.6	A1-3		
164	棒片	2.3×1.7×0.3	X	○	75	×	○	X	X	1.8	A4-1		
165	棒片	4.3×2.3×0.3	X	○	75	△	—	X	X	3.0	A1-2		
166	棒片	2.2×2.1×0.3	X	○	88	○	—	X	X	1	A3		
167	棒片	0.6×1.2×0.1	X	○	87	×	—	X	X	0.05	A1-2		
170	棒片	0.6×1.9×0.3	X	○	88	×	—	X	X	0.2	A1-3		
171	棒片	1.4×1.5×0.4	X	○	—	○	—	X	X	0.7	A1-3		
173	棒片	1.7×1.3×0.3	X	○	65	○	—	X	X	0.45	A1-2		
174	棒片	4.8×1.9×0.5	○	○	68	○	—	X	X	6.5	●●●●●		

第5表 刺片・砂片(グリット処理)観察表

No.	種別	長さ×幅×厚さ (mm)	標本番号	打撲 の位置	打撲 の形態	摩擦 の位置	摩擦 の形態	衝撃 の位置	衝撃 の形態	由来	層位	備考
195	刺片	5.1×5.8×1.5	O	O	47	X	X	-	X	49	41-5	流紋岩(赤色を呈す)
197	刺片	3.1×1.8×0.7	O	X	-	O	X	X	X	4	31-10	流紋岩(赤色を呈す)
199	刺片	3.3×2.8×0.4	X	X	-	O	-	X	-	2.5	31-14	流紋岩(A-3)
200	刺片	3.5×5.8×1.2	X	O	75	X	-	X	X	13	4H-1	流紋岩(赤色を呈す)
201	刺片	8.4×4.8×1.5	O	O	84	△	O	O	X	50	3H-6	1層
202	砂片	1.7×2.2×0.4	X	④	65	X	X	-	X	1.35	41-11	1層
203	刺片	3.8×2.8×0.8	O	O	69	X	⑥	X	X	11	31-9	1層
204	砂片	3.1×1.8×0.5	X	X	-	O	X	X	X	1.2	4H-4	1層
205	砂片	0.8×2.8×0.1	X	X	-	O	X	X	X	0.4	41-1	1層
206	刺片	3.8×2.3×0.5	O	O	84	△	O	X	-	5.5	21-17	流紋岩
207	刺片	7.6×4.8×1.2	O	X	-	O	X	-	X	38	41-6	1層
208	刺片	3.9×2.7×1.2	O	⑧	51	X	X	-	X	13.5	31-5	1層
209	刺片	2.1×2.7×0.3	X	X	-	O	X	X	X	1.9	31-8-9	流紋岩
210	刺片	6.7×6.8×1.8	O	X	-	O	O	O	X	42	31-6	流紋岩
211	刺片	2.9×5.1×0.8	X	X	83	△	X	-	X	15.5	1層	
213	刺片	4.5×1.3×1.5	O	O	61	O	X	-	X	44	1層	流紋岩(赤色を呈す)
214	刺片	3.6×2.3×0.9	X	X	-	O	X	X	X	12	流紋岩	A-1
215	刺片	2.8×2.5×1.2	O	O	70	X	X	-	X	7	4-1	流紋岩
216	砂片	0.9×1.1×0.2	X	O	79	△	X	-	X	0.5	流紋岩	
217	刺片	3.4×1.5×0.3	X	O	98	O	X	-	X	2.5	41-5	2層流紋
218	刺片	6.1×1.7×1.9	X	O	61	O	X	-	X	21	31-21	1層
219	刺片	4.2×4.3×0.7	X	O	88	X	X	-	X	12.5	31-5-10	2層
220	砂片	2.6×2.1×0.5	X	O	95	X	O	X	X	3	31-5-10	2層
221	刺片	1.9×1.5×0.6	X	X	-	O	X	X	X	2.5	31-5-10	2層
222	刺片	2.6×1.9×1.2	X	X	-	O	X	X	X	6	4-1	流紋岩(赤色を呈す)
223	刺片	3.9×2.2×1.2	O	O	69	X	-	X	X	7	31-5-10	2層

# 両新田遺跡発掘調査報告

# I 序 説

## 1. 発掘調査に至る経緯

新潟県小千谷市大字桜町字天田に所在する両新田遺跡は、関越自動車道の法線発表に伴って実施された法線内遺跡分布調査によって、平安時代の遺跡として確認・登録された。その後、遺跡の取扱いについて日本道路公団と新潟県教育委員会とで協議を進めたが、自動車道建設の予定時期との調整もあり、以下3次の確認調査を実施した。

### (1) 第1次確認調査

建設を急ぐプレロード部分について、道路公団から遺構・遺物の有無を確認調査して欲しい旨希望があり、昭和54年9月に藤巻・波田野学芸員が調査を実施した。調査の結果、縄文土器片1片及び遺構らしきものを検出し、更に調査を重ねる必要があると判断された。またこの際にあらたに塚1基の存在を確認し、発掘調査に係る旨を道路公団へ通知した。

### (2) 第2次確認調査

第1次確認調査の結果に基づいて協議を進め、昭和55年6月に藤巻・齊藤学芸員が第2次確認調査を実施した。この結果、周辺から中世陶器片を探集したが、遺構及び遺物包含層の存在は認められず、遺跡範囲から除外した。また、前述の新発見の塚は全堀調査した。なお、一部に買収未了地があったが、これについては買収完了後に再度確認調査を実施するものとした。

### (3) 第3次確認調査

買収の完了に伴って未調査部分の確認調査実施の要望があり、昭和55年11月に藤巻学芸員が第3次確認調査を実施した。調査の結果、縄文時代の遺構・遺物を検出し、この旨を道路公団へ通知した。この通知に基づいて協議を再開し、県教育委員会はその緊急性を認め昭和55年12月に、特別に発掘調査を実施するものとした。なお、調査体制は次のとおりである。

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 久間健二）

管 理 総 括 南 義昌（県教育庁文化行政課長）

総括補佐 石山欣弥（県教育庁文化行政課長補佐）

管 理 近藤信夫（県教育庁文化行政課副参事）

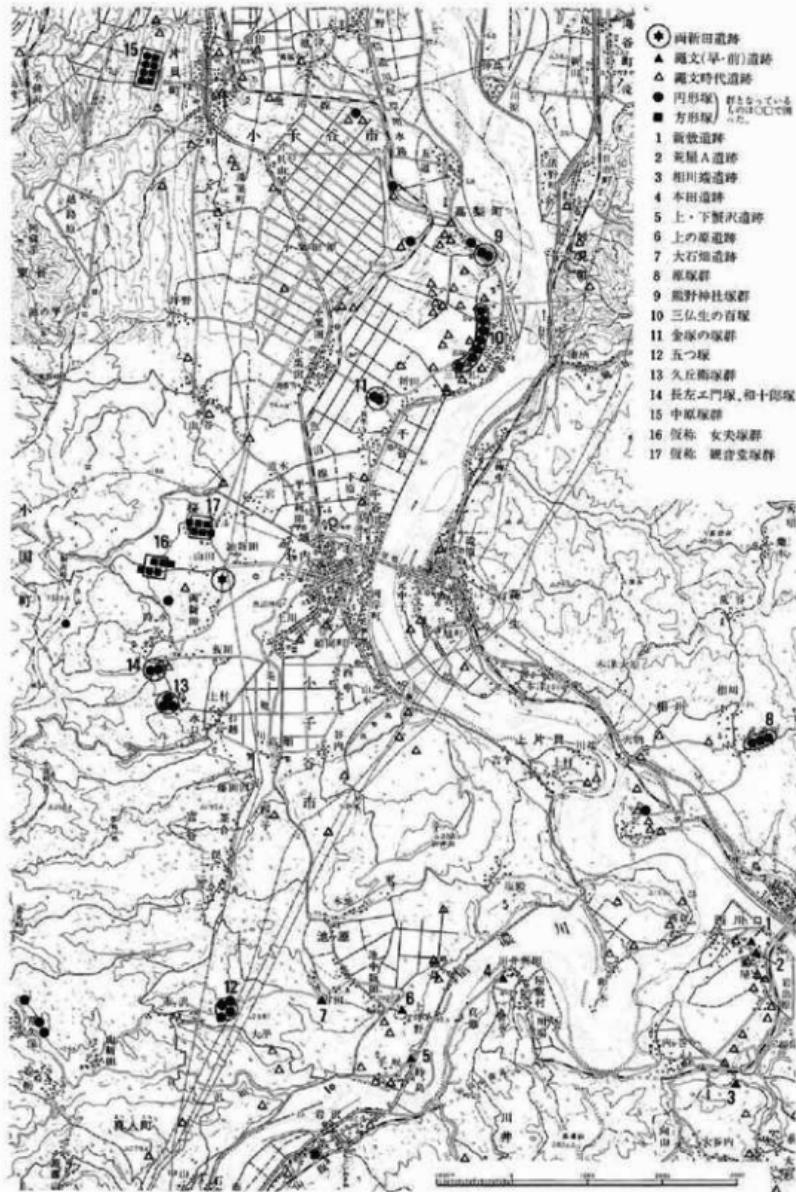
指 導 金子拓男（県教育庁文化行政課係長）

庶 務 獅子山隆（県教育庁文化行政課主事）

調 査 担 当 藤巻正信（県教育庁文化行政課学芸員）

調 査 員 佐藤雅一（県教育庁文化行政課嘱託）

協 力 小千谷市教育委員会・日本道路公団



第1図 周辺の遺跡  
(国土地理院「長岡」「小千谷」1:50,000原図 昭和48年発行)

## 2. 遺跡の環境

越後平野には第三紀摺曲山地が雁行状に並列し、このうち東山山系と関田山系との間を縫って信濃川が流れる。信濃川は越後川口で魚野川を併せて水量を増し、左右両岸に大規模な河岸段丘を形成する。発達した段丘は高位段丘から沖積段丘まで11段階に分けられるといい（小千谷段丘調査グループ 1977）、両新田遺跡は左岸の低位段丘小千谷Ⅰ面の上に存在する。

三国街道は信濃川の右岸を走り、越後川口から荷生を経て長岡に至る。小千谷は信濃川の左岸にあって直接には三国街道とかかわりがなかったが、寛永年間に新町割が実施されるなどの左岸交通の要所であった。即ち三国街道荷生から中子の渡しを経て小千谷に入ると、

- ① 上片貝・岩沢・十日町を経て飯山に至る妻有路
- ② 山本山から真人を経て飯山に至る市川通り
- ③ 打越を通り小国峠を越える小国道（柏崎街道）
- ④ 山谷を通って薬師峠を越え、柏崎に至って北国街道と接続する高田街道
- ⑤ 片貝・与板を通り抜ける弥彦参道
- ⑥ 三仏生を通り、渡しを経て三国街道妙見に至る長岡道

と幾多の左岸交通路がそこに結節しており、両新田遺跡は、③と④とに挟まれて山田通り丸山の桐沢峠を経て小国に至る旧道と山裾を走る旧道（現在は市道桜町～時水線）との交差点に位置するのである。

## 3. 周辺の遺跡（第1回）

小千谷市管内では遺跡分布調査が不充分であるが、これまでに知られている遺跡を第1回に示した。これにより、縄文時代遺跡は前述の段丘区分のうち山本山Ⅳ面以下の段丘上に存在することが知られる。中でも縄文時代早期～前期に係る遺跡を図中に①～⑦として示したが、これらはいわゆる小千谷Ⅰ面上に存在し、両新田遺跡とその存在面を共通とする。なおこれらのうち押型文土器を検出した遺跡は⑥下蟹沢（芋坂）遺跡であり、この他には三仏生及び川井の愛染堂裏の遺跡でも押型文土器が確認されている（中村考三郎 1978）という。早、前期の遺跡は信濃川と魚野川との分流点及至上流に位置していることが知られる。即ち遺跡分布調査の不充分な現在では、両新田遺跡は他の同時期遺跡とその存在する段丘面を共通しながら、関田山系と東山山系とで閉塞された両川の合流点より下流の、長岡地溝盆地初端のいわゆる小千谷洪面地に認められる第3の遺跡として注目される。

また、小千谷周辺には多数の塚・塚群が存在する。第2図に⑧～⑯として示した。これにより、塚・塚群はほとんど例外なく前述した三国街道を除く旧道沿いに分布することが知られる。なお、これまで知られていた塚・塚群はほとんどのものが円形であり、方形のものは

片貝町所在の⑯中原塚群中に7基が確認されているのみであったが、周辺調査の折にあらたに⑰女夫（メット）塚群⑯竜ヶ池観音堂塚群を発見した。⑯は周囲に半埋没状態の溝が巡っている方形塚10基で構成され、桐沢沢を抜ける同道沿いに存在する。⑯は吉蔵寺前の字觀音堂に存在し、方約16mで周囲に半埋没状態の溝を巡らす大型の塚とこの周辺に位置する中型・小型の周溝をもつ塚ともたない塚とで構成される約20基の塚群である。この発見は半日という限られた短時間の周辺調査によったため、近辺には未確認の塚が数多く存在することと思われる。

#### 4. 発掘調査の経過

県教育委員会は前述の調査体制をもって、昭和55年12月1日～12月18日の間で両新田遺跡の発掘調査を実施した。調査は迅速を要し、発掘・記録は簡便を旨とした。このため、第3次確認調査で遺構・遺物の希薄と判断された部分を重機によって排土する。また、悪天候に備えてテントを用意し、テント内で作業するなど時間的短縮に努力した。しかし、越後の冬は日に日に近づき、調査期間前半では強風雨のためテントの倒壊、ローリング・タワーの転倒など作業に支障があった。また、後半からは本格的な降雪を見、連日雪かきをしながらの雪中発掘となり、作業は困難を極めた。以下に調査日誌抄を記す。

12月1日（月） 雨のち曇り

初日、詰所開設、新潟からトラックにて器材を搬入する。小千谷市教育委員会へ挨拶する。現場は前もって指示した範囲を重機で表土除去済み、排土を注意して観察するも遺物なし。午後から作業を開始する。作業に先立ち全員に安全・衛生等の諸注意を与える。作業は表土除去分についてジョレン精査による遺構確認、併行して諸準備（テント設営、排水溝・貯水池の設定等）を行なった。

12月2日（火） 雨

ジョレン精査による遺構確認を続行。この結果、塚の痕跡と思われる遺構が2基検出された。1号は長溝3本及び短溝2本とで方形に区画され、2号はその延長が市道桜町一時水線の下に入っていると思われ全容は明らかでないが2本の短溝が対となって一辺を形成し方形に区画されると思われた。一端もしくは両端が舟形となる短溝・長溝から、1号・2号とも共通して四隅が意図的に陸橋とされていると思われる。また、対になる短溝間も意図的な陸橋であると思われる。なお、1号の長溝覆土（黒色土）中から陶器片1片を採取した。O-Q-14～15及びT～Vに遺構のないことを確認し、この部分をゲスト・シートと定めた。

12月3日（水） 雨のち曇り

昨日発見の2基の遺構は、方形周溝墓・方形台状墓の可能性もあるとして方形周溝状遺構と呼称することとした。表土未処理分について表土除去作業を開始する。1号・2号清掃・

写真撮影の後に発掘開始。2号の各溝は確認面でも黒色土・白色粘土・黒褐色土がレンズ状に堆積していることが観察されたが、周辺には白色粘土ではなく、また露頭もない。方形周溝状遺構の内部に白色粘土が存在し、降雨等によって流失し、空間であった溝を埋めたのではないかとも思われる。1号では白色粘土は認められないが長溝床直から陶器片1片を検出。市教委社会教育課長の紹介で両新田集落の沢中忠太郎氏を訪問、「当該地は大字両新田字行塚であり、通称十三塚であるが、塚のあった記憶はない」という。また、同集落五十嵐三郎氏は、「確かに塚のあった位置として、記憶にある」という。

12月4日(木) 雨のち曇り

本序連絡 ①これまでの経過 ②昨夜の暴風でテント倒壊 ③2号方形周溝状遺構は確認された各短溝の配置からその略半分が市道の下に延長しているとみられるため、市道を剥がして調査をしたい。③について関係機関と連絡、明日から市道を剥がすこととした。

作業 1号発掘(明日に継続)、2号セクション図・写真撮影(明日に継続)・表土除去部分からは縄文土器片・フレークが黒色土下層から出土している。

12月5日(金) 雨のちあられのち雪

本日から市道部分をバックホー・ブルドーザー・ダンプにて剥がしあらげる。月曜日には2号連続部分がみられるであろう。また、この作業によって仮想3号の存在の有無が確認される。なお、N-Pをバックホーによって表土除去し、仮想0号の存在の有無を確認する。

1号発掘継続 2号セクション図・写真撮影・完掘平面図 1号・2号ともこれまでの観察では中央部及び周辺部に他の遺構は認められないが、追求の必要があると思われ、試掘溝を設定し、明日より試掘することとした。

縄文時代遺物・遺構はR-T-13-15に集中しており、他の地区には認められない。小型円形土壙をJ-1、大型円形堅穴(住居址とみられるが詳細は不明)をJ-2とし、J-2のセクション図・写真撮影を行なう。この際、J-2覆土(褐色土上面)からフレーク出土。褐色土は観察によれば、他遺跡との比較で縄文時代早期~前期の様相である。

12月6日(土) 雨のち晴

1号セクション図・写真撮影・清掃、2号清掃、明日休みのためシートをかけて帰る。  
J-1・J-2・J-3発掘、黒色土・褐色土から縄文土器片、フレーク等出土、出土遺物は平面図に記入し、レベルを測って取りあげた。土器片には纖維の含まれるものがある。なお、1号の短溝には2号と同様の白色粘土の層が存在することが判明した。床上約15cmの位置に約1cmの厚さでレンズ状に堆積している。この白色粘土は長溝中には認められない。

12月8日(月) 雨

雨のため、これまで調査中の部分を一時中止し、2号連続分及び仮想0号の追求を人力・ブルドーザーにより行なう。この結果、2号は予測どおり道路下に伸長しており、計8本の

短溝がそれぞれ2本づつ対となって方形に巡ることが確認された。しかし、0号については存在しないことが明らかとなり、また、他の遺構も存在しなかった。

土曜日に取りあげた遺物を水洗したところ、J-1号覆土中出土の土器片には楕円形押型文があることが判明した。当小千谷市管内では芋坂など稀少であり、注目に値する。他の土器片及びはは同一層序であるJ-2出土の土器片は、縄文前期と思われる羽状縄文がほとんどである。また、フレーク類のうちには若干の使用痕を認めるものも存在した。

12月9日（火） 晴

2号連続部分発掘、J-1・J-2・J-3・J-6・J-7・J-8・J-9を発掘、午後に周辺の塚を分布調査する。

12月10日（水） あられのち雪のち雨

昨夜末のあられ・雪にて南西方の山城・時水城は真白となる。融けた水は遺構内に充満し遺構発掘は不可能である。作業は水の汲み出し、排水溝の追加設定及び道部分の追求とした。この結果、仮想3号は存在しないことが明らかとなった。

12月12日（金） 晴のち雨

遺構追求、2号連続部分の発掘を開始する。終息準備としてローリング・タワー2基を設定する。写真撮影・測量準備を行う。また、1号・2号については中央部に試掘溝を設定して関連遺構の有無を追求していたが、遺構は存在しないことが明らかとなった。

12月13日（土） 雪のち吹雪のち大雪

昨夜の暴風により、ローリング・タワー2基とも転倒していた。作業は雪かきしながらの各種落ち込み（搬乱）の追求・遺構分布図の作成・レベリングを行う。吹雪がひどく、作業員から中止の申し入れがあり、午前中で作業を中止（担当・調査員は実測を飛行）した。

12月15日（月） 雪

積雪55cm、大雪のため作業員が激減した。一つには高齢者であり、天候から今後人数の回復は望めない。できる限りの作業を行い、終息に務めることとする。作業は、午前中、雪に埋れた器材を掘り出してプレハブ内に収納する。午後から降雪の中、J-4・J-5を発掘する。湧水激しく難行する。明日のためにシートをかけて保護した。

12月16日（火） 吹雪のちみぞれ

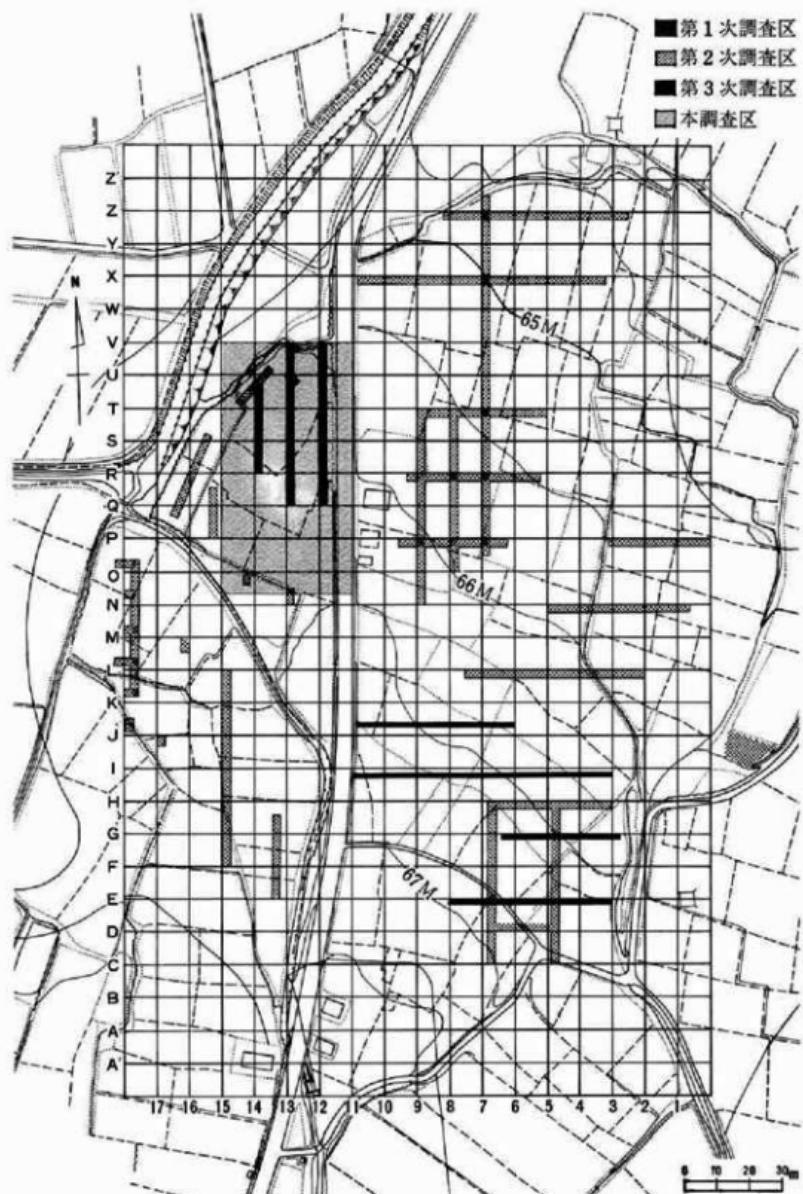
J-4・J-5完掘、1号セクション・ベルト除去、本日も作業員少なし。

12月17日（水） みぞれ

2号セクション・ベルト除去、雪中のため一部の写真撮影を除いて全ての調査作業を完了。

12月18日（木） 晴のち雨

市教委・区長へ挨拶、道路公团工事長来跡、器材の整理・賃金の支払いを済ませて引上げる。



第2図 グリッド配置図

## II 調査

### 1. グリッドの設定（第2図）

第1次確認調査では任意の個所にトレチを設定したが、第2次確認調査には、調査対象範囲全体にグリッドを設定した。道路公団ステーションNo239とNo240とを基軸として10mピッチの方眼を設定し大グリッドとした。大グリッドの内部には2mの小グリッドを設定したが、確認調査では小グリッドを利用することはなかった。第3次確認調査及び本調査ではこの段階で設定したグリッドを利用した。

### 2. 層序

遺跡は低位段丘小千谷Ⅰ面上に存在する。低位段丘であるため基本的に腐植土の堆積は少なく、また狭い調査対象範囲はどこでも單一の層序を示した。第3図の塚断面及び第7図のJ-2遺構断面に認められるように、20cm~40cmの黒色土の下に部分的に薄い漸移層を挟んで地山（黄色ローム）が存在する。発見された遺構は黒色土中からロームを掘り込んでいたものと思われるが、観察によっては明らかにし得なかった。

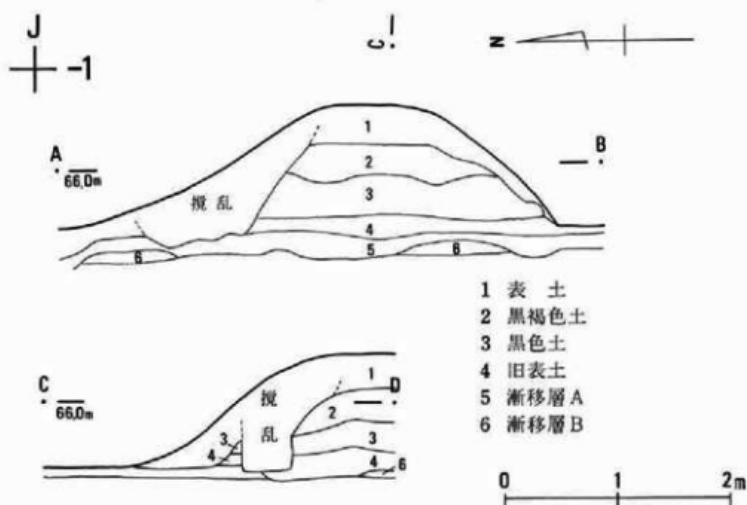
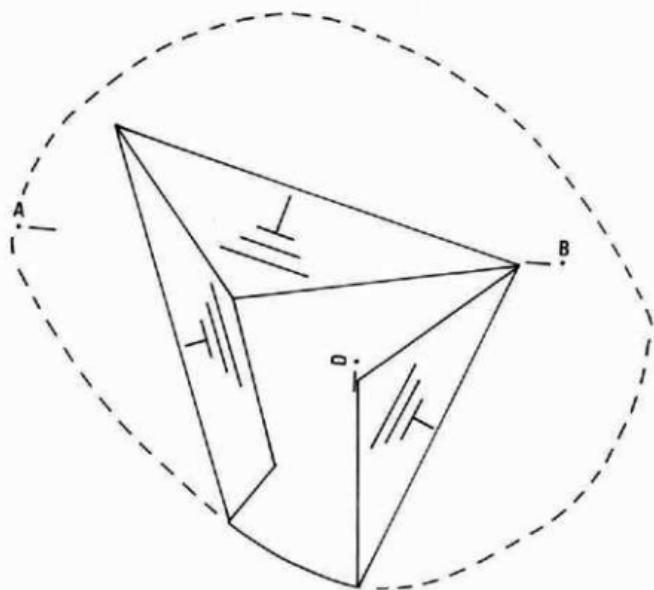
### 3. 遺構

本遺跡では塚1基・方形周溝状遺構2基・縄文時代遺構9基（J-1~J-9）を検出しこれらを全掘調査した。塚は第1次確認調査の時にあらたにその存在を発見したものであり、第2次確認調査に併せて発掘調査を実施した。縄文時代遺構はJ-2のみを第3次確認調査で検出しており、他の8基及び方形周溝状遺構は本調査で全面を排土した結果検出したものである。以下に各遺構を説明する。

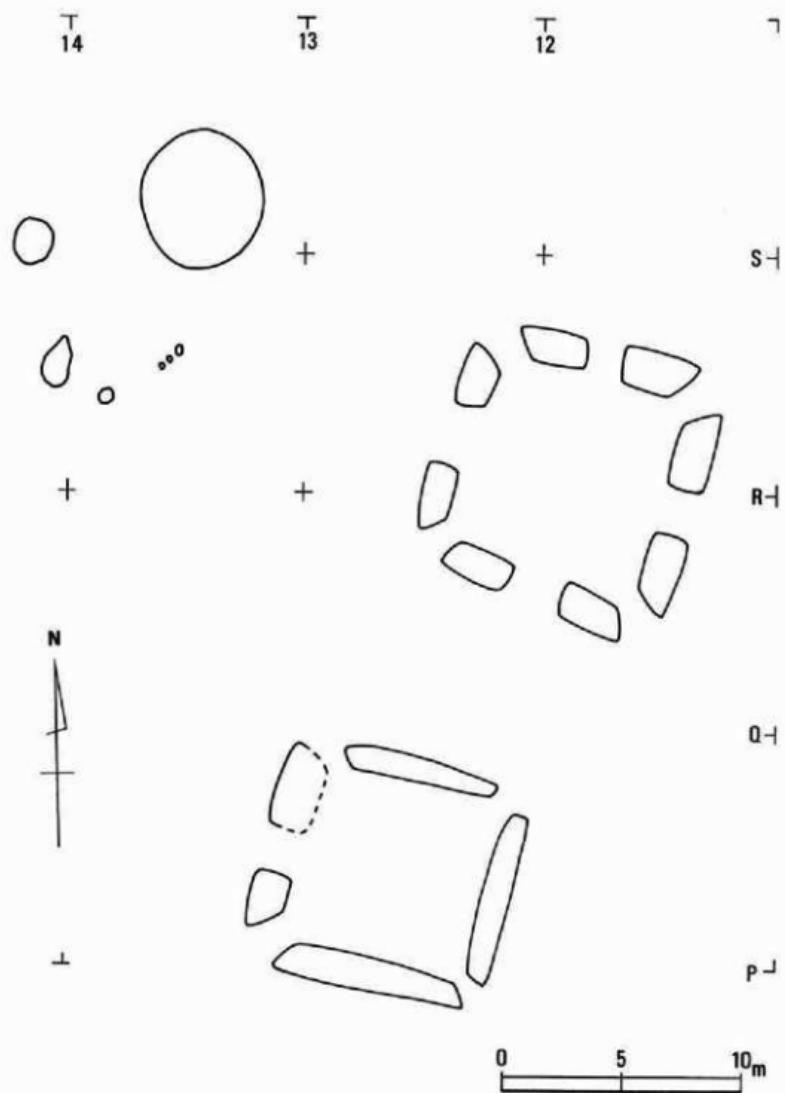
#### 塚（第3図、図版2）

I~J-1ライン上に位置する。マウンドは発見当時に略円形と観察されていたが、第2次確認調査の実施前に開発事業下請業者の認証によって約半分を削りとられており、正確な測量による全形は示すことができない。従って主軸方位も不明である。現在の比高は約1.1mを測り、黒色旧表土の上に三層の土を盛って築かれている。現状では内部及び周辺には関連する遺物・遺構は発見されなかった。

なお、岡新田集落在住の五十嵐三郎氏は「自分が若い頃に掘り返してみたが、何もでてはこなかった」という。縦・横の断面に大型の擾乱が認められたがその痕跡であろう。



第3図 塚平面図・断面図



第4図 遺構分布図

### 1号方形周溝状遺構（第5図、国版第30～32図）

P～Q～12～13に位置し、主軸方位はN-15°-EまたはE-15°-Sである。本遺構は平坦な畠地に埋没していた3本の長溝と、対になって一辺を形成する2本の短溝とによって構成される。一辺約10mの方形を呈する周溝状遺構である。3本の長溝はそれぞれ両端を舟形に整形されており、対となる短溝は各内端を直にまた各外端を舟形に整形されている。これらの長溝と短溝とはたがいに接触することなく方形に配置されてその内と外とを区別しているが、方形の四隅及び一辺の中央には堀り残しによる陸橋様の通路が設けられている。中央部及び周辺には関連する遺構は確認されなかった。

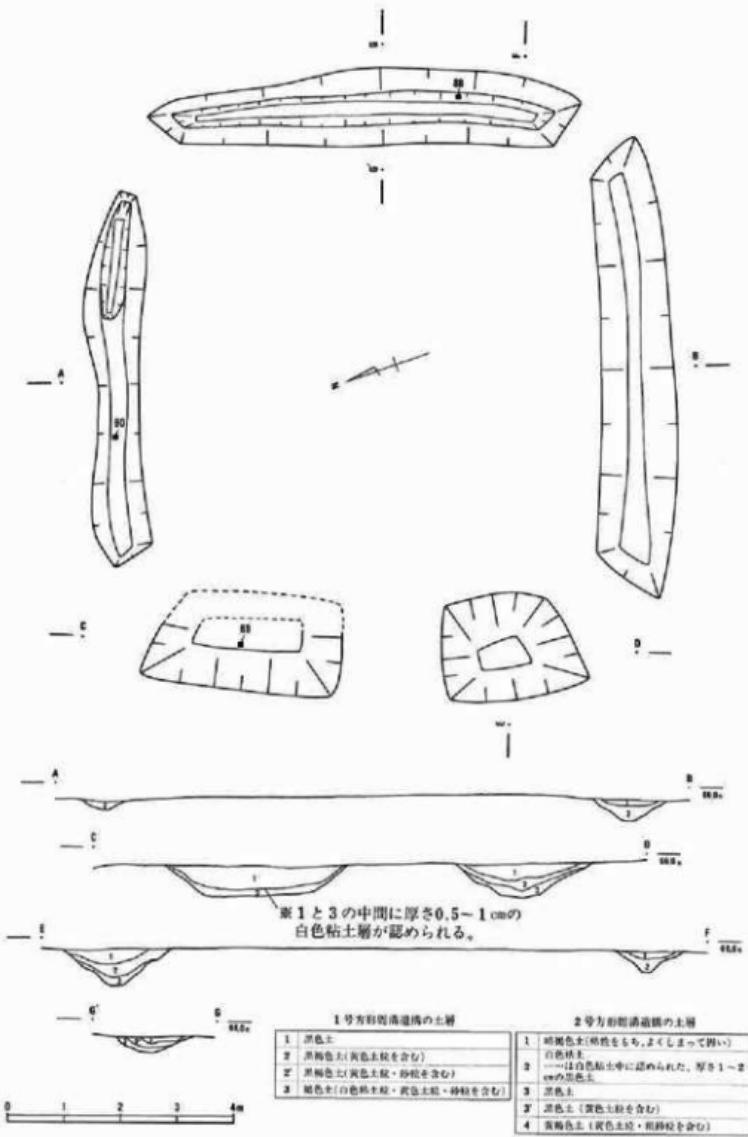
長溝は確認面から溝底まで約30cmと浅く、覆土は黒色土・黒褐色土である。短溝は60cm～70cmと長溝よりも深く、裏研に掘られていて覆土は黒色土・黒褐色土・褐色土であるが、No89を出土した短溝にのみ2号方形周溝状遺構に認められた白色粘土の存在を確認した。なおいずれもレンズ状堆積を示し自然堆積と思われる断面の観察から、本遺構は確認面（D-4）より上位の黒色土を切っていることが明らかであるが、堀り込み面は明らかにできなかった。

本遺構からは遺物No88～90が出土しているが、いずれも近世に所属するものと思われる。

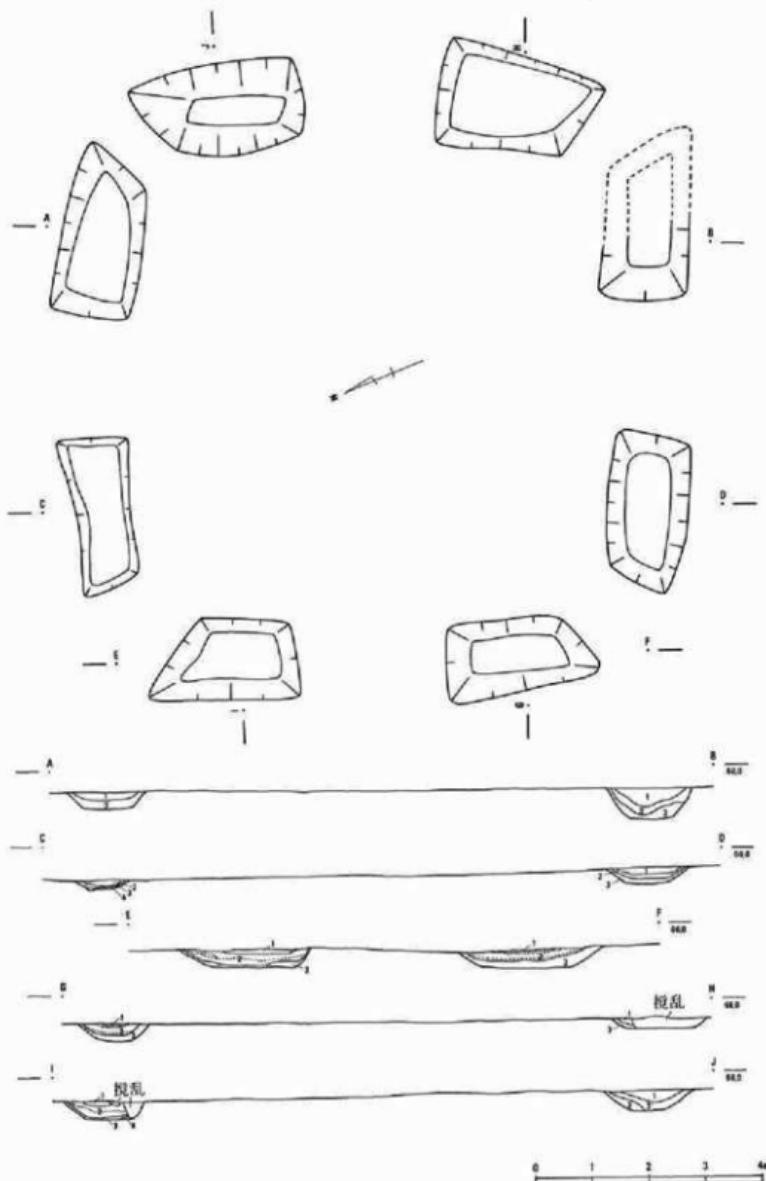
### 2号方形周溝状遺構（第6図、国版第33～35図）

1号方形周溝状遺構の北東に並行して近接し、R-12に位置する。1号と同じく畠地に埋没していたものであり、全面排土によってその存在を確認した。本遺構は計8本の短溝が、それぞれ2本づつ対になって各辺を形成し、方形を呈する周溝状遺構である。8本の短溝はどれも内端を直に外端を舟形に整形されており、それぞれ接觸することなく2本を一辺として方形に配置されている。このため、方形区画の四隅及び四辺の各中央には堀り残しによる陸橋様通路が存在する。やはり確認面下では中央部・周辺に関連する遺構は検出されていない。各短溝は一端が舟形に近い略台形で、断面は皿形につくられ、深さは確認面から溝底まで平均約30cmと1号の長溝に近似する。覆土は暗褐色土・黒色土・黄褐色土を共通としており、自然堆積とみられる。なお、8本の短溝のうち北西の4本（C・D・I・G）についてはこの他に白色粘土がみられる。白色粘土はその層の中に橙色固結分を認め、また1ないし2枚の黒色土を挟んでいることが確認されている。この白色粘土は2号の4基の短溝の他には1号の短溝（C）中にわずかに認められたのみで、遺跡中では他のどこにも存在してはいない。本遺構に伴う遺物は検出されなかった。

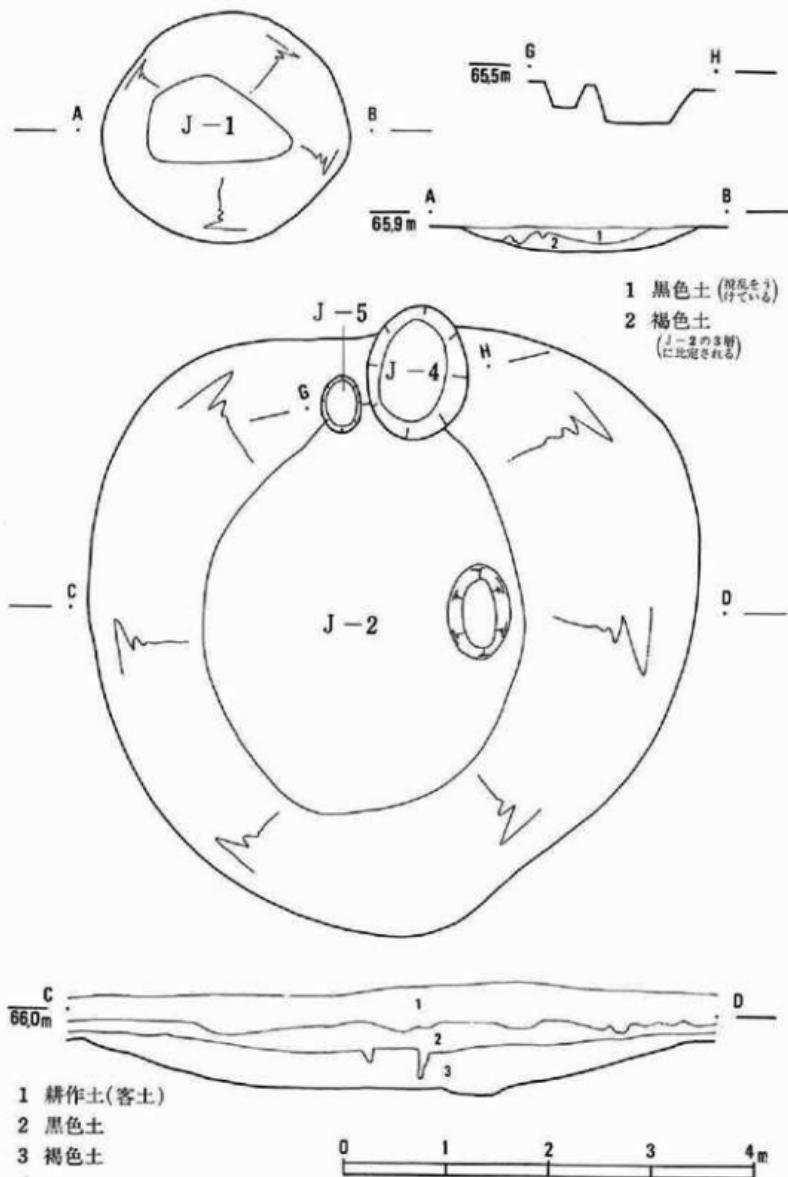
方形周溝状遺構は2基検出されたが、ほぼ直線上に並行して存在していたために0号及び3号の存在を仮想して、市道を剥ぎ、或は地均し部分を剥いでその存在の有無を追求したが、



第5図 1号方形周溝状遺構



第6圖 2号方形周溝状構



第7図 繩文時代造構平・断面図

2基のみの存在であり連続する0号及び3号は存在しないことが明らかとなった。

#### 縄文時代の遺構（第9図の人）

##### J-1号（第7図、図版第38図）

S-14に位置する直径約2.3mの略円形土壙である。確認面から壙底までは約25cmを測り、壁の傾斜は緩く、断面は皿形である。A-B断面の観察によれば覆土は黒色土・褐色土であり、J-2号の覆土に近似している。なお、確認面よりも上位からロームを切り込んでいることが認められる。

本遺構からは押型文土器片・羽状縄文土器片・磨石・焼石・フレーク等が出土している。

##### J-2号（第7図、図版第36図）

S-T-13-14に位置する直径約6.0mの略円形竪穴状遺構である。現表土から60cmの深さでローム上面に確認された。深さは約40cmで覆土は黒色土・褐色土の2層であり、基本的にJ-1号・J-3号・J-9号と共通する。壁は緩く傾斜し、断面は皿形となる。平坦な床底には深さ10cmほどの凹みが認められた他、炉・柱穴等の施設は確認できなかった。南壁に小土壙2基（J-4・J-5）が検出されたが、本遺構に付属するものではない。

本遺構からは羽状縄文土器片・磨石・スクレーバー・加工痕ある剝片・使用痕ある剝片・フレーク等が出土している。

##### J-3号（第8図）

R-S-14に位置する不定形の土壙である。長さ約2.0m・幅約1.1m・深さ約60cmを測り、壙底は凸凹である。覆土は黒色土・褐色土の他に地山ブロックを含む褐色土がある。

本遺構からは羽状縄文土器片が出土しているが石器類は認められない。

##### J-4号（第7図、図版第37図）

J-2号の南壁にJ-5号と並んで位置する梢円形の小土壙である。長径約1.3m・短径約1.0m・深さ約30cmを測り、覆土は黒色土であった。覆土が黒色土であったため、最初はその存在に気付かなかつたがJ-2の3層を切ってつくられていることが判明した。

本遺構からは斜（羽状）縄文土器片・竹管文土器片・磨石・フレーク等が出土している。

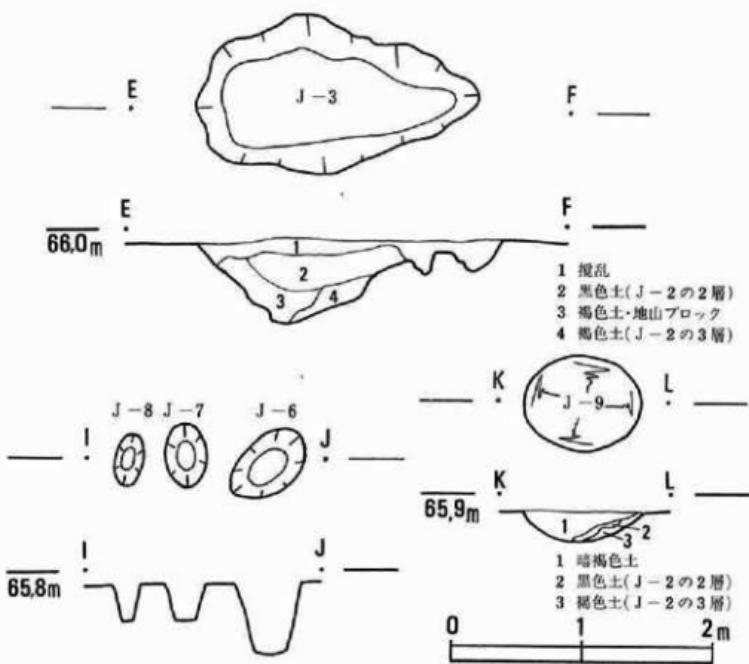
##### J-5号（第7図、図版第37図）

J-4号と並んでJ-2号の南壁を切って存在する。長径約50cm・短径約40cm・深さ約20cmを測り、覆土は黒色土であった。やはりJ-2号の発掘が進むに連れて、その存在を知つたものである。

本遺構からは羽状縄文土器片・フレーク・チップ等が出土している。

##### J-6・7・8号（第8図、図版第37図）

R-S-13-14に位置し、相互に隣接して直線上に並ぶ小孔である。いずれも覆土は黒色



第8図 繩文時代遺構平・断面図

土であったが、共通して孔底に砂の堆積を認めた。

J-6号からは羽状縄文土器片・石核・フレーク等が出土している。

J-7号からは羽状縄文土器片・磨製石斧刀部片・使用痕ある剝片・フレーク等が出土しているが、どれも磨滅していることが特徴的であった。

J-8号からはフレーク1点が出土している。

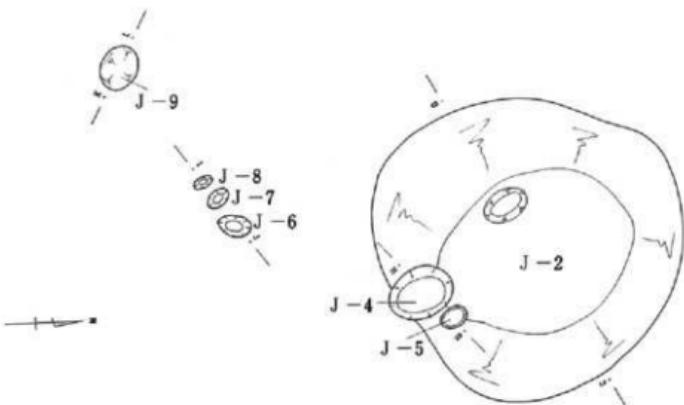
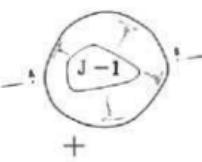
J-9号(第8図、図版第38図) J-3号の東南に位置する。長径約90cm・短径約70cm・深さ約20cmを測る略円形の小土壠である。覆土は暗褐色土・黒色土・褐色土であった。

本遺構からは遺物は検出されなかった。

#### 4. 遺 物 (表1、第9図のB、第10~13図、図版第39~41図)

両新田遺跡では3次にわたる確認調査と本調査とを実施した。この結果、第2次確認調査では遺物を検出していないが、第3次確認調査時に縄文時代の土器片・石器類を検出した。

14



13



8

第9図のA 縄文時代遺構配置図



第9図のA 繩文時代遺構配置図

● 土器片  
▲ 石器類



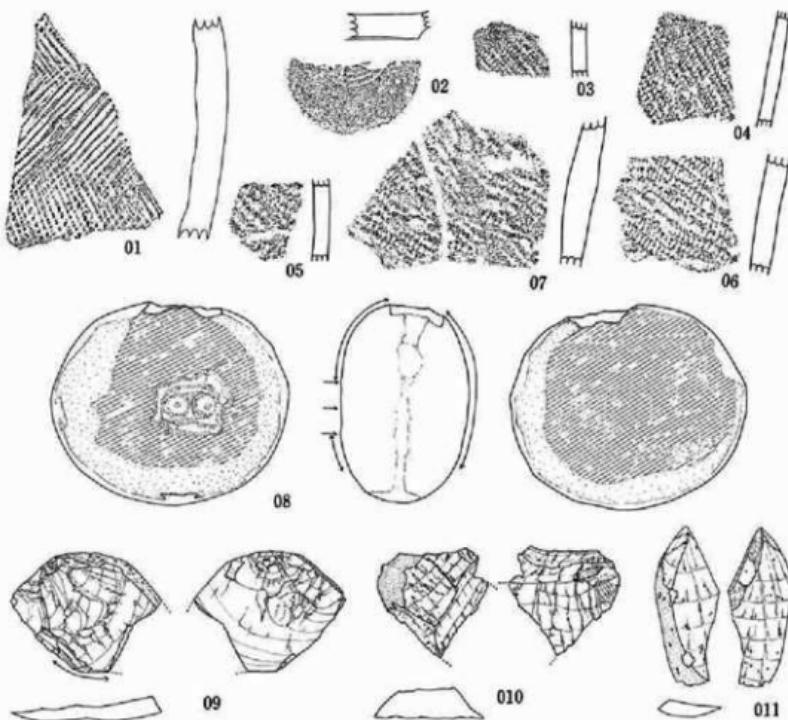
### 第9図の日 縄文遺物分布図

第1表 出土遺物一覧表

品 名	種 別	所 属	絶対高 (m.sea)	觀 察	記 号	種 別	所 属	絶対高 (m.sea)					
01 磁器 中腹輪形	器	第二次試掘時に出土した。	15 フレーツ J-2	65.751 宝山岩。自然面を正面としている。コガニ自然面を有する。	15 フレーツ J-2	65.751 宝山岩。自然面を正面としている。コガニ自然面を有する。	16 磁文土器	65.776 寶文の下に平行な面で周縁部の文様を有する。底面は、無文の下に斜面で、底面には他の文様を有する。底面は、無文の下に斜面で、底面には他の文様を有する。					
02 中世陶器	器	第二次試掘時に出土した。小ぶりの呂宋陶片。	16 磁文土器	65.776 無文の下に斜面で、底面には他の文様を有する。底面は、無文の下に斜面で、底面には他の文様を有する。	17 磁文土器	J-1	65.776 無文の下に斜面で、底面には他の文様を有する。底面は、無文の下に斜面で、底面には他の文様を有する。						
03 磁文土器	器	第三次試掘時に出土した。R-S-14で出土した中より宝山土器T077まで一 枚。無文と呂宋片。	17 磁文土器	J-1	65.776 無文の下に斜面で、底面には他の文様を有する。底面は、無文の下に斜面で、底面には他の文様を有する。	18 磁文土器	J-1	65.771 宝山岩。自然面を正面としている。磁文の部分が、底面に付いていた。					
04 磁文土器	器	R-Lで確認されたもの。輪上に用給の跡入	18 磁文土器	J-1	65.771 宝山岩。自然面を正面としている。磁文の部分が、底面に付いていた。	19 磁文土器	J-1	65.746 宝山岩。自然面を正面としている。磁文の部分が、底面に付いていた。					
05 磁文土器	器	05-07まで同一個体と思われる輪上部	19 磁文土器	J-1	65.746 宝山岩。自然面を正面としている。磁文の部分が、底面に付いていた。	20 磁 石	J-1	65.741 宝山岩。火照地。					
06 磁文土器	器	軸上に輪、小柄を含む。斜状焼成、底部片	20 磁 石	J-1	65.741 宝山岩。火照地。	21 磁文土器	J-1	65.716 磁器大。軸上に輪と押す。磁文を含み複雑地。底面。					
07 磁文土器	器	陽地。内側は化粧釉。軸上に輪、小柄を含む。斜状焼成、底部片	21 磁文土器	J-1	65.716 磁器大。軸上に輪と押す。磁文を含み複雑地。底面。	22 フレーツ	65.651 宝山岩。自然面を正面としている。コガニ自然面を有する。	22 フレーツ	65.651 宝山岩。自然面を正面としている。コガニ自然面を有する。				
08 磁 石	石	J-2	65.651 宝山岩。自然面を正面としている。コガニ自然面を有する。	23 磁文土器	65.791 軸上に輪と押す。斜状焼成、底部片。	24 磁文土器	65.716 斜状焼成。表面に化粧釉。斜状焼成。底面。	24 磁文土器	65.716 斜状焼成。表面に化粧釉。斜状焼成。底面。				
09 指揮印	印	J-2	65.791 宝山岩。自然面を正面としている。斜下斜面。	25 便用印	65.616 宝山岩。自然面を有する。左端に火照地。斜面。	25 便用印	65.616 宝山岩。自然面を有する。左端に火照地。斜面。	26 便用印	65.571 宝山岩。自然面を有する。左端に火照地。斜面。				
010 フレ タ	タ	J-2	65.791 宝山岩。自然面をもつ。斜下斜面。	27 フレーツ J-5	65.511 宝山岩。自然面を正面としている。左端に火照地。	27 フレーツ J-5	65.511 宝山岩。自然面を正面としている。左端に火照地。	28 磁文土器	65.416 斜状焼成。表面に化粧釉。斜状焼成。底面。				
011 フレ タ	タ	J-2	65.791 宝山岩。自然面をもつ。上端斜面。	28 磁文土器	J-5	65.336 斜状焼成。表面に化粧釉。斜状焼成。底面。	29 磁 石	65.336 宝山岩。自然面を有する。斜面。	29 磁 石	65.336 宝山岩。自然面を有する。斜面。			
1 磁文土器	器	J-1	65.766 内側はよく施釉されない。斜状焼成、底部	30 フレーツ J-5	65.206 宝山岩。自然面を有する。斜面。	30 フレーツ J-5	65.206 宝山岩。自然面を有する。斜面。	31 ナフ タ	65.441 宝山岩	31 ナフ タ	65.441 宝山岩		
2 フレ タ	タ	J-9	65.766 宝山岩。自然面を有する。斜面。	32 磁 石	J-4	65.476 宝山岩。表面焼成。	32 磁 石	J-4	65.476 宝山岩。表面焼成。				
3 フレ タ	タ	J-9	65.766 宝山岩。自然面を有する。斜面。	33 フレーツ J-4	65.331 宝山岩。下端にシリフラチャード。左上部焼成。	33 フレーツ J-4	65.331 宝山岩。下端にシリフラチャード。左上部焼成。	34 加工印	65.331 ナフタ。	34 加工印	65.331 ナフタ。		
4 磁文土器	器	J-3	65.861 表面は粗面でおどり明るが、底面は滑らか。表面は粗面でおどり明るが、底面は滑らか。斜面。	35 フレ タ	J-2	65.536 宝山岩。自然面を有する。斜面。	35 フレ タ	J-2	65.536 宝山岩。自然面を有する。斜面。	36 ナフ タ	65.361 宝山岩。上・下斜面。	36 ナフ タ	65.361 宝山岩。上・下斜面。
5 久 善	善		表面は粗面でおどり明るが、底面は滑らか。斜面。	37 フレ タ	J-2	65.346 宝山岩。自然面を有する。斜面。	37 フレ タ	J-2	65.346 宝山岩。自然面を有する。斜面。	38 磁文土器	J-2	65.486 斜状焼成。表面に化粧釉。斜状焼成。底面。	
6 スカラベー ド	ド	J-2	65.746 自然面。斜面。	38 磁文土器	J-2	65.486 斜状焼成。表面に化粧釉。斜状焼成。底面。	39 便用印	J-2	65.491 宝山岩。自然面を有する。斜面。	39 便用印	J-2	65.491 宝山岩。自然面を有する。斜面。	
7 アレ タ	タ	J-1	65.876 宝山岩。斜面。	40 新序	J-2	65.521 新序。表面に火照地。	40 新序	J-2	65.521 新序。表面に火照地。				
8 フレ タ	タ	J-4	65.841 自然面。										
9 フレ タ	タ	J-4	65.856 宝山岩。自然面を有する。上端斜面。										
10 生 蠅	蠅		65.721 自然面。底面を有する。										
11 フレ タ	タ	J-1	65.426 自然面。										
12 スカラベー ド	ド	J-4	65.841 自然面。下端にシリフラチャード。										
13 スカラベー ド	ド	J-4	65.856 自然面。										
14 フレ タ	タ	J-2	65.631 宝山岩。自然面を有する。底面を有する。										

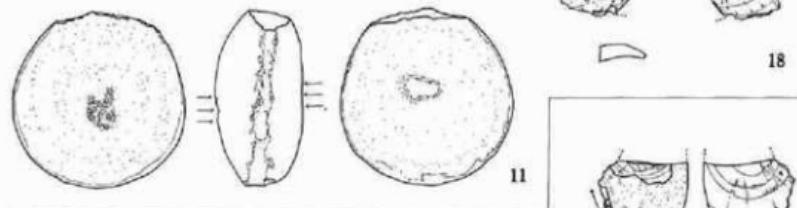
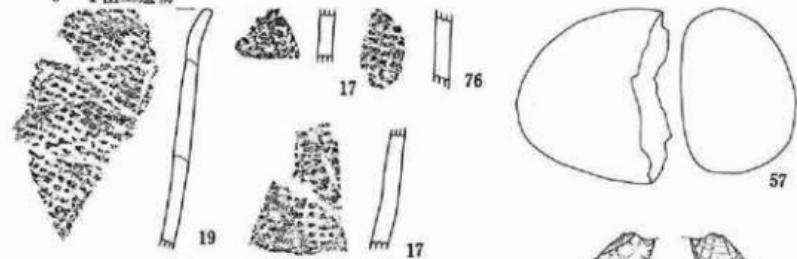
No	種 別	所 屬	地対高 (m/Sea)	観 察	No.	種 別	所 屬	地対高 (m/Sea)
41	磯文土器	J-3	65.553	半分のナメ物質を含む、少しの砂粒を含む、表面は滑らか、底面は粗い。	66	ア レ ー ク	J-6	65.306 安山岩。
42	磯文土器	J-3	65.785	全表面滑。本文の特徴をもつす。	67	ア レ ー ク	J-6	65.298 安山岩。
43	磯文土器	J-3	65.466	球状に研磨。他のものと形状、表面、底面全く同じ。	68	ア レ ー ク	J-6	65.466 安山岩。表面を有晶としている。
44	磯文土器	J-3	65.533	R.L.端縁。底面上に斜面、底面を含む、やや外側を削除。底面、	69	チ ッ ツ	J-7	65.611 安山岩。
45	磯文土器	J-3	65.744	R.L.端縁。底面上に斜面、底面を含む、斜面ややくらみ。口	70	生 石	J-7	65.811 安山岩。
46	磯文土器	J-3	65.496	R.L.端縁。底面上に斜面、底面を含む、斜面ややくらみ。	71	透 石	J-6	65.796 安山岩。水滴が入しているが滑石と思われる。
47	磯文土器	J-3	65.516	46と同様。外側を削り、	72	闊文土器	J-6	65.191 滑石塊。底面上に斜面、底面を含む、斜面ややくらみ。
48	磯文土器	J-3	65.603	全表面滑。いわゆる本文が口部に削除され、底面上に斜面がある。	73	ア レ ー ク	J-6	65.186 安山岩。表面を有晶としている。
49	磯文土器	J-3	65.621	R.L.端縁。底面上に斜面、底面を含む、斜面より外側を削除部分	74	ア レ ー ク	J-6	65.196 安山岩。表面を有晶としている。
50	磯文土器	J-4	65.281	斜面。底面を含む、斜面。	75	闊文土器	J-3	65.191 安山岩。底面上に斜面、底面を含む、斜面。
51	磯文土器	J-5	65.411	斜面。底面上に斜面、底面を含む、斜面。	76	闊文土器	J-1	65.070 安山岩。斜面に斜面を含む、斜面。
52	磯文土器	J-5	65.603	全表面滑。底面上に斜面、底面を含む、斜面。	77	闊文土器	J-1	65.776 鹿島田。
53	ア レ ー ク	J-7	65.541	全表面滑。底面上に斜面、底面を含む。	78	闊文土器	J-2	65.823 安山岩。底面上に多量の繊維を含む。灰色、崩壊。
54	磯文土器	J-7	65.571	R.L.端縁。底面上に斜面、底面。	79	ア レ ー ク	J-2	65.425 安山岩。L字型に自然剥離を呈す。上口斜面。
55	磯文土器	J-7	65.351	直筒形。底面上に斜面、底面を含む。	80	闊文土器	J-7	65.444 全表面滑。底面上に開口部を含む。
56	コ ア	J-6	65.346	直筒形。底面上に斜面、底面を含む。	81	溶製石斧	J-7	65.455 万代のル。斧刃。
57	焼 石	J-1	65.741	丸形。底面上に斜面、底面を含む。	82	使用跡ある	J-7	65.468 斧形。底面上に斜面。
58	磯文土器	J-3	65.311	直筒形。底面上に斜面、底面を含む。	83	ア レ ー ク	J-7	65.440 安山岩。自然剥離を有する。
59	ア レ ー ク	J-2	65.346	内側に斜面、底面上に斜面。	84	ア レ ー ク	J-7	65.459 安山岩。
60	ア レ ー ク	J-2	65.336	直筒形。底面上に斜面、底面を含む。	85	ア レ ー ク	J-7	65.462 安山岩。
61	チ ッ ツ	J-5	65.441	直筒形。底面上に斜面、底面を含む。	86	ア レ ー ク	J-7	65.446 斧形。
62	磯文土器	J-4	65.311	二重の直筒形の上に直筒形の上に直筒形を重ねて、底面上に斜面。	87	ア レ ー ク	J-8	65.441 安山岩。
63	生 石	J-6	65.616	直筒形。底面上に斜面、底面を含む。	88	近世陶器	1号	馬鹿顔色。底面上に斜面。
64	磯文土器	J-6	65.296	直筒形。底面上に斜面、底面を含む。	89	近世陶器	1号	馬鹿顔色。底面上に斜面。
65	磯文土器	J-6	65.396	直筒形。底面上に斜面、底面を含む。	90	近世陶器	1号	馬鹿顔色。底面上に斜面。

本調査では2基の方形周溝状遺構を確認し、このうち1号の溝中から近世陶器片を検出している。また、縄文時代遺構及びその周辺からは押型文土器片・羽状縄文土器片・竹管文土器片の他に、コア・スクレーパー・使用痕ある剥片等早~前期の遺物を検出した。中には後期に属する若干の土器片も認められるが、一括資料として取り扱うことができると思われる。以下、挿図と一覧表によって説明する。

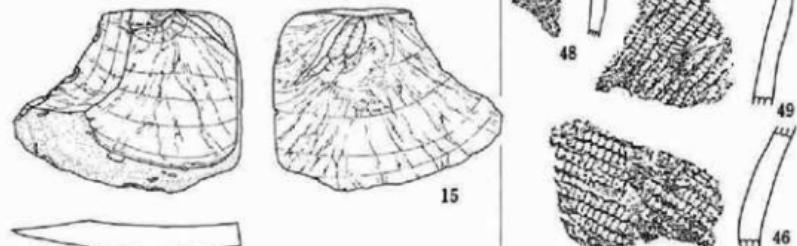
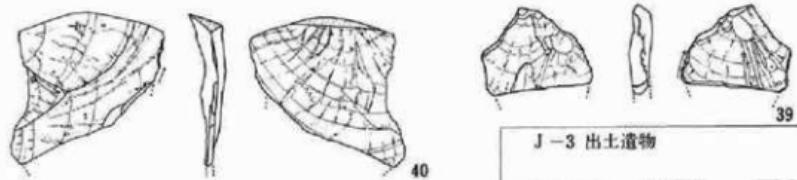
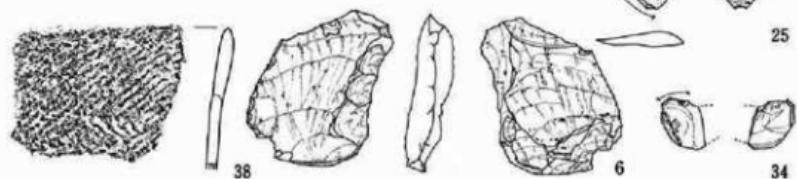


第10回 確認調査出土遺物

J-1 出土遺物

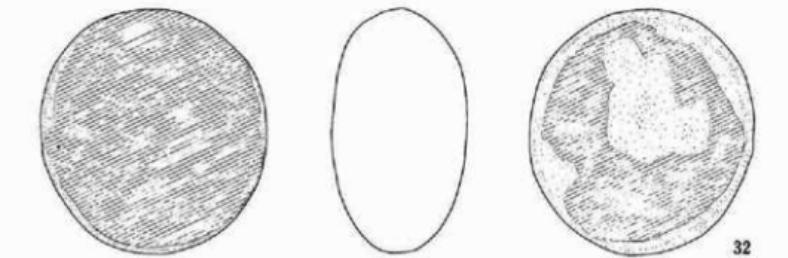
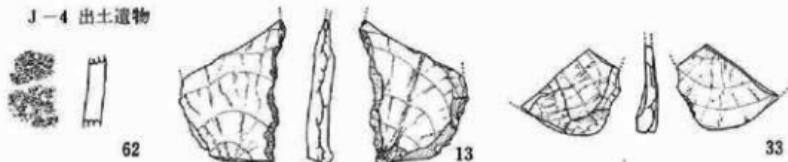


J-2 出土遺物

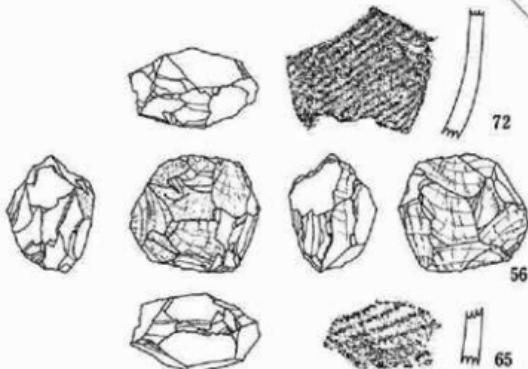


第11圖 出 土 遺 物

J-4 出土遺物

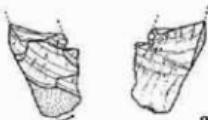


J-6 出土遺物

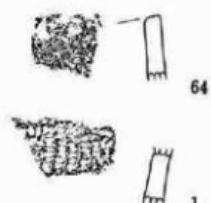
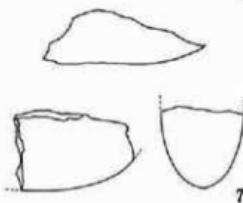
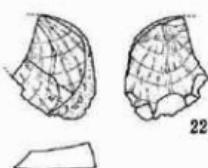


第12圖 出土遺物

J-9 出土遺物



無所属の遺物



時期の異なる遺物



1号方形周溝状造構出土遺物



第13図 出 土 遺 物

### III ま　と　め

① 両新田遺跡は平安時代の遺跡と考えられていたが、関越自動車道の小千谷インターチェンジの建設にかかわることになった。このため遺跡の内容を記録に留めることを目的として発掘調査を実施した。

② 第1次・第2次確認調査を行い、遺構・遺物包含層の認められない部分を除外したが、第3次確認調査で縄文時代の遺構・遺物の存在を認めたため、この部分を発掘調査した。

なお、第1次確認調査で塚1基を新発見し、第2次確認調査時に全掘調査した。

③ 発掘調査は昭和55年12月1日から12月18日までの延13.5日間に実施した。発掘面積は3,440m<sup>2</sup>で、作業員は延170.5名。この間の堆土総量は2,064m<sup>3</sup>（うち1,300m<sup>3</sup>を機械堆土）であった。

④ 調査の結果、当該地域は平安時代の遺跡ではなく、縄文時代及び近世の遺跡であることが判明した。

#### 1. 縄文時代

① 遺跡は信濃川左岸段丘（小千谷I面）上に位置し、近隣の他の同時代遺跡と存在位置を共通していると理解されるが、発掘例が少ない中では重要である。

② 出土遺物は楕円形押型文・羽状縄文・竹管文・無文の土器片と使用痕のあるフレークであり、フレーク類は羽状縄文土器片に伴うものと考えられる。

③ 検出遺構はそれぞれの覆土中に包含される遺物から同時期のものと思われる。特にJ-1・2号遺構は、その内外に明らかな炉址や柱穴等を認めていないが、土器片・磨石などの存在や大きさなどから消滅的ながらも住居址とみたい。また、J-6・7・8号については孔底に河砂の堆積を認め、遺物もこの中から角のとれて丸くなったものが検出されていることから遺構ではないのではないかと思われる（註1）。

④ これらのことから当該地は早期末・前期・後期と断続的に利用された小規模遺跡であると結論されるが、その性格はいま一つ明確でない。

⑤ なお、一般に早期に所属する押型文土器片は、ここでは遺物量の中心を占める黒浜期周辺と観察された羽状縄文土器片群を包含する土層と相対的には同一と判断された層序中から検出されているが、このことについて調査員佐藤は羽状縄文土器片群の胎土観察及び比較から当該土器片群は早期に所属するとの見解をもっている。しかし、この意見に対して担当者は

A 確かに、押型文土器に羽状縄文土器が伴出する例はすでにいくつか報告（註2）されているが、当遺跡出土の羽状縄文土器片はそれらの土器片と異って観察される。

- B 散発的・断続的に利用された遺跡であるために混同が生ずるのではないか。
- C 冬季にあり条件が悪かったために詳細な観察はできなかつたが、相対的に同一であるとみられた各層序は分類が可能なのではないか。
- D 或は一般にいわれるよりも、ここでは押型文と前期羽状繩文との間隔は狭いのではないか。
- E 更に押型文はある程度巾広い使用時期をもち、その結果前期に重い込む場合もあるのではないか。

として、佐藤とは異り羽状繩文土器片を前期に所属するとみている。両者の意見に相違のあることを明らかにしておく。

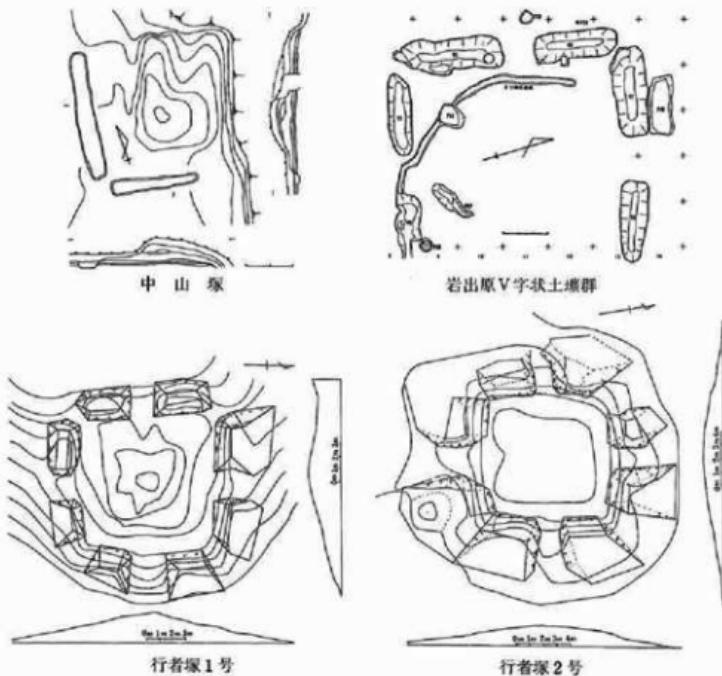
## 2. 近世

- ① 方形周溝状遺構 2 基が並んで検出された。マウンドが削平された塚であろうと思われたが、県文化行政課の内部に方形周溝墓（或は台状墓）ではないかとの意見があり、呼称を方形周溝状遺構とした。
- ② 中央部・周辺部の調査では関連すると思われる遺構は確認されなかった。
- ③ 1号周溝の発掘によって近世に所属する陶磁器片 3 片が検出された。
- ④ 2号北西部の周溝埋土中及び 1号の一部周溝埋土中に白色粘土の自然と思われる堆積が認められたが、周辺では白色粘土は検出されておらず、その存在理由は不明である。
- ⑤ 聞き込みによれば、過去に塚があったという。また、周辺の地名には坊塚・藤塚があり、通称十三塚とも呼ばれたという。
- ⑥ 類例調査では津南町大字下船渡所在の「行者塚一号・二号」（石沢寅二 1959）及び六日町大字山口所在の「ねぶつ塚」（註3）・下田村大字牛ヶ首所在の「中山塚」（註4）また川口町大字岩出原所在の「岩出原遺跡 V 字状土壙群」（福岡嘉彰 1980）などが存在することが知られた（第14図）。
- ⑦ これらのことから、2基の方形周溝状遺構は用途不明であるが近世に所属する上部マウンドを削平された塚であったろうと結論される。

## 3. その他

周辺調査の折に二つの方形塚群（小千谷市大字桜町所在・女夫塚群・竜ヶ池觀音堂塚群）を新発見した。小千谷市は塚・塚群の多い地域であるが、これまで類例の多くない有溝方形塚の存在例を増加したこととして意義があると思われる。殊に、竜ヶ池觀音堂塚群の中核をなす大形の有溝方形塚は觀音堂基壇の可能性があり、「岩出原遺跡 V 字状土壙群」との対比の上にも興味深い。

（藤巻正信）



第14図 方形周溝状遺構類例

### 参考文献

- 石沢寅二 1959 「津南町文化財調査報告書」No.1 津南町教育委員会  
 稲岡嘉彰 1980 「岩出原遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査報告書」第21 新潟県教育委員会  
 小千谷段丘調査グループ 1977 「新潟の自然」第3集 新潟の自然刊行委員会  
 中村孝三郎 1957 「三仮生」 長岡市立科学博物館  
 中村孝三郎 1978 「越後の石器」 学生社

### 註

- (註1) J-6・7・8号は耕作によると思われる大型の擾乱の追求により検出されたが、3基の直上には溝状に若干の黒褐色土が存在していた。或は小川の痕跡であったかも知れない。しかし、この黒褐色土中には他の遺物及び砂は認められなかった。
- (註2) 宮城県座敷亂木遺跡などで報告されている。
- (註3) 新潟県教育委員会埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、「径7m・高さ1.3mの円形で、周囲にブリッヂ状の波しが8ヶ所ある」という。
- (註4) 下田村教育委員会が昭和50年に発掘調査を実施した。報告書は未刊であるが、「中山塚は崖縁に存在する塚であり、これを取り開むてあろう四辺のうちの二辺と推測される溝が発見されている」という。

下倉山城跡

図版第1回



下倉山城跡航空写真

図版第2図



(上) 下倉山城跡遠景 (下) 第1地点



(上) 第2地点 (下) 第4地点遠景

図版第4図



(上) 第4地点発掘風景 (下) 1号土壠状遺構



(上) 2号土壘状遺構 (下) 1号塚状遺構

図版第6図



(上) 2号塚状遺構 (下) 3号塚状遺構



(上) 4号塚状遺構 (下) 5号塚状遺構

図版第8図



(上) 6号塚状遺構

(中) 同石組上

(下) 同石組下

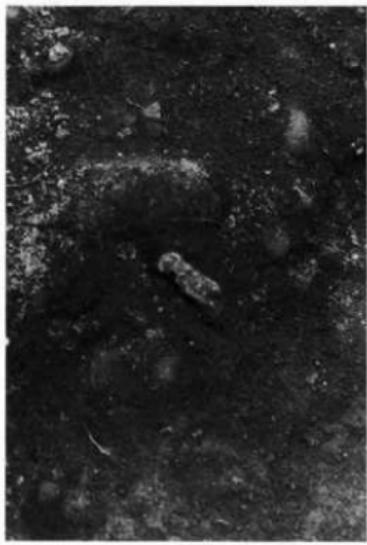


(上) 7号塚状遺構 (下) 8号塚状遺構

図版第10図



（上）9号塚状遺構 （下）10号塚状遺構

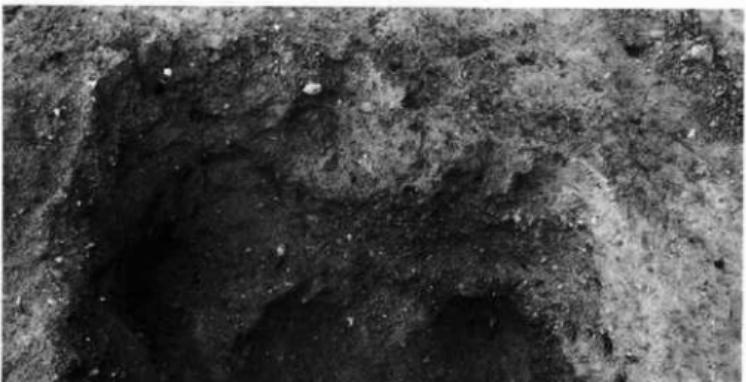


(上) 2号墓壙 (下左) 同墻釘出土状況 (下右) 同墻鉗出土状況

図版第12図



(上) 3号墓壙 (下) 4号墓壙

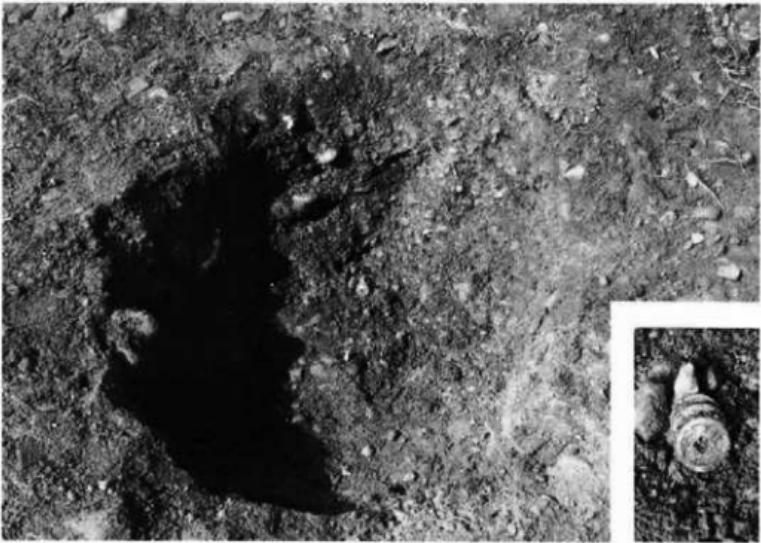
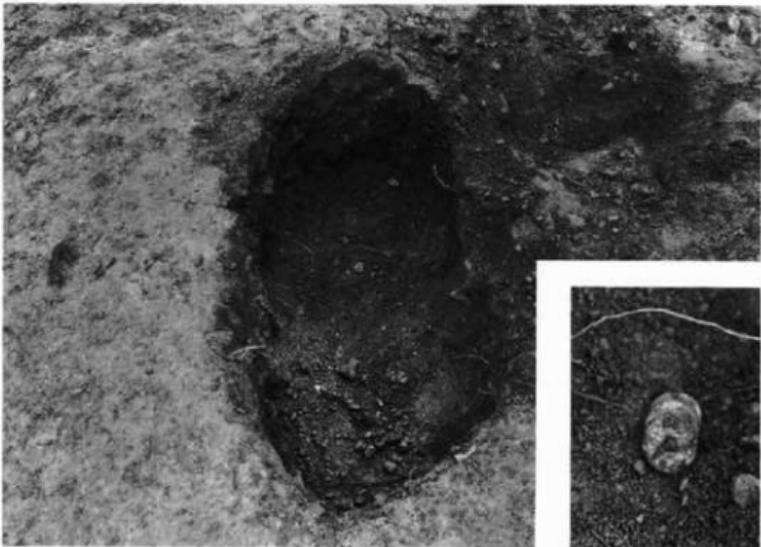


(上) 5号墓壙

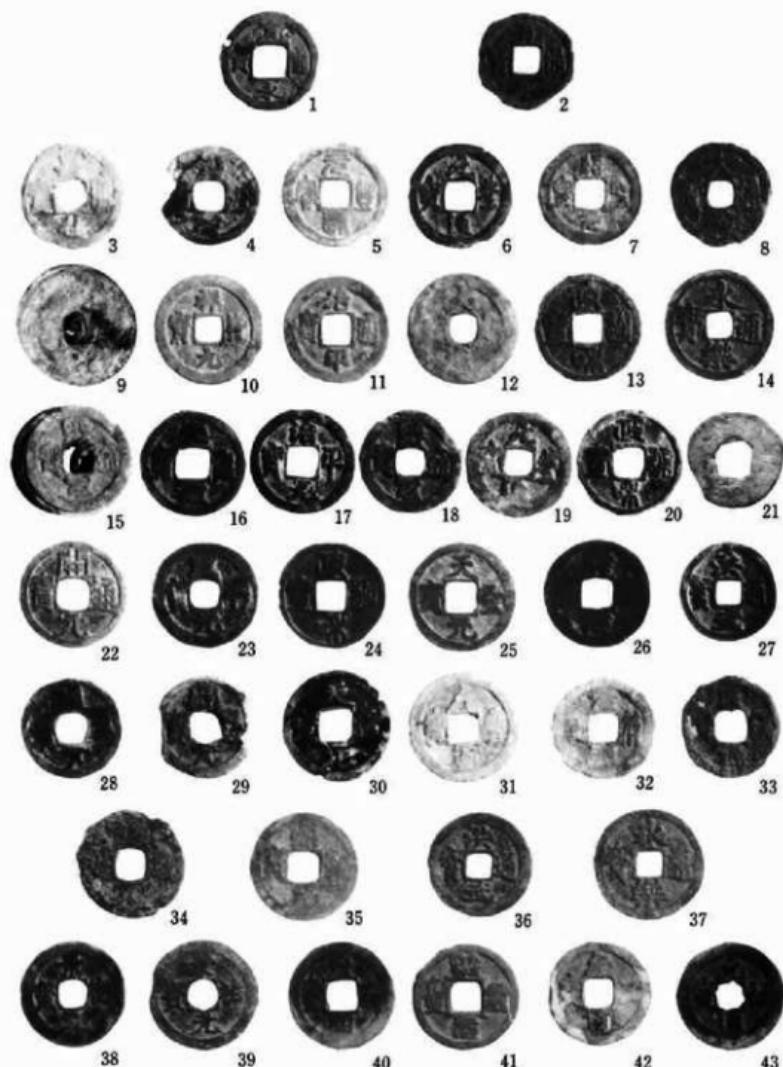
(下) 6・7号墓壙

(下右) 7号墓壙頭骨出状況

図版第14回



(上) 8号墓壙 同壙銭貨出土状況  
(下) 9号墓壙 同壙銭貨出土状況



第4地点出土遺物(1) 1. 1号土壺状遺構出土 2. 9号甕状遺構出土 3~5. 1号墓壙出土 9~14. 2号墓壙出土(9出土状況) 15~21. 3号墓壙出土(15出土状況) 22~27. 5号墓壙出土 28~33. 6号墓壙出土 34~37. 8号墓壙出土 38~43. 9号墓壙出土

图版第16图



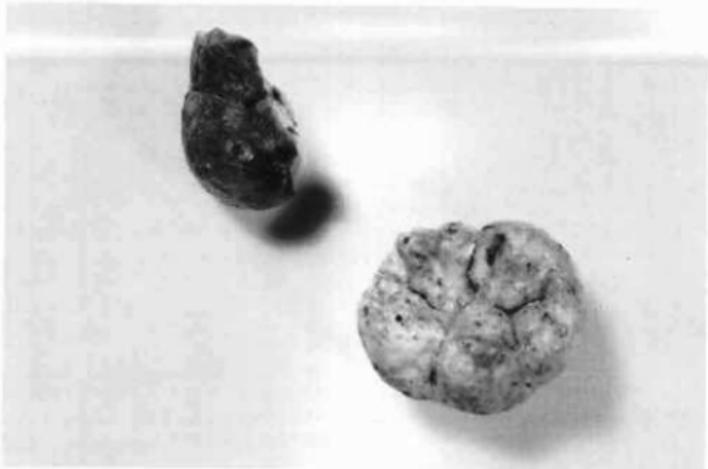
第4地点出土遗物(2) 1. 4号塚状遗物出土 2. 5号塚状遗物出土  
3·4. 1号墓填出土 5·12. 2号墓填出土



1. 下倉山城跡古絵図（個人蔵）



2. 下倉村古絵図（個人蔵）

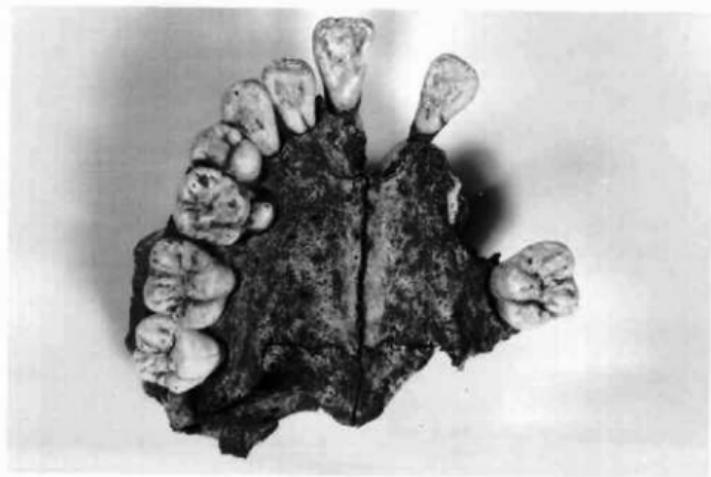


1

下倉山城跡 18号標本

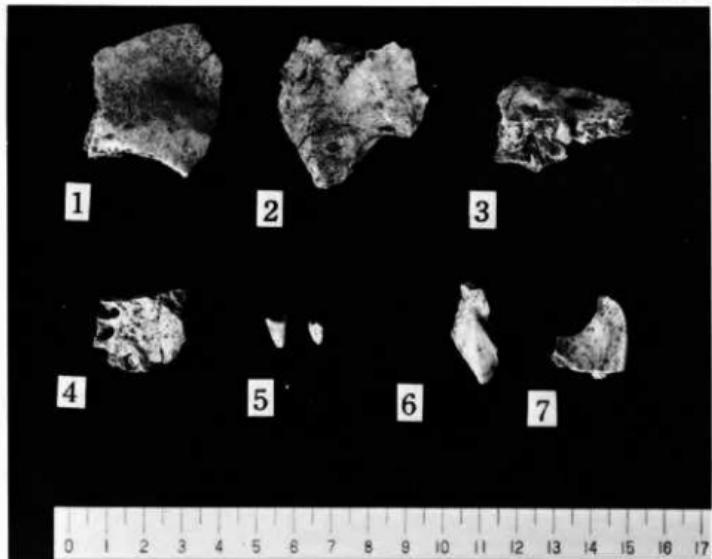
左：上顎右側第1大臼齒（咬合面觀、上が頬側）

右：下顎左側第2乳臼齒（咬合面觀、下が頬側）



2

下倉山城跡 21号標本 上顎歯列の咬合面觀



下倉山城跡 19号標本

1. 後頭骨外後頸隆起部 (後面)
2. 右側頭骨乳様突起部 (外側面)
3. 左側頭骨錐体の一部 (後内ちより見る)
4. 右上顎骨歯槽突起の一部 (下面)
5. 歯根片・根端部 (左-舌側面・右-隔壁面)
6. 下顎骨右下顎小舌部 (内側面)
7. 下顎骨左筋突起 (内側面)

(スケールの数字の単位はcm)

権現平遺跡

図版第20図



権現平遺跡遠景（南から）



発掘作業風景（西から）



第1号墳群（西から）



Aユニット出土状況（西から）

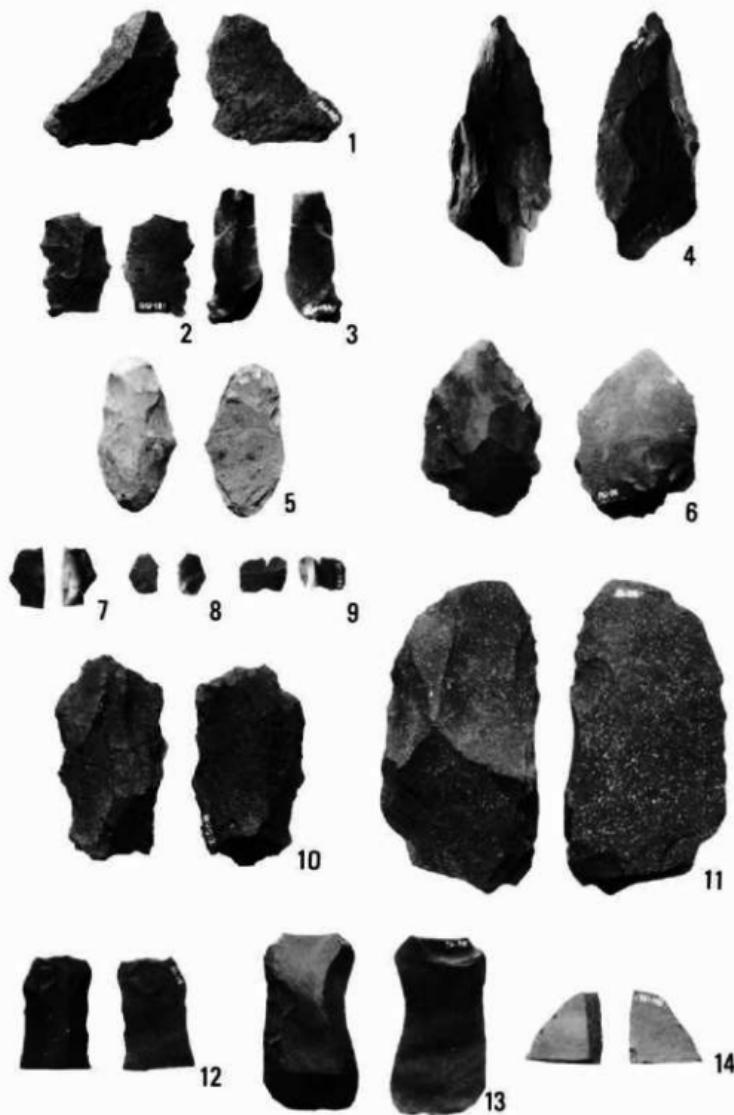
図版第22図



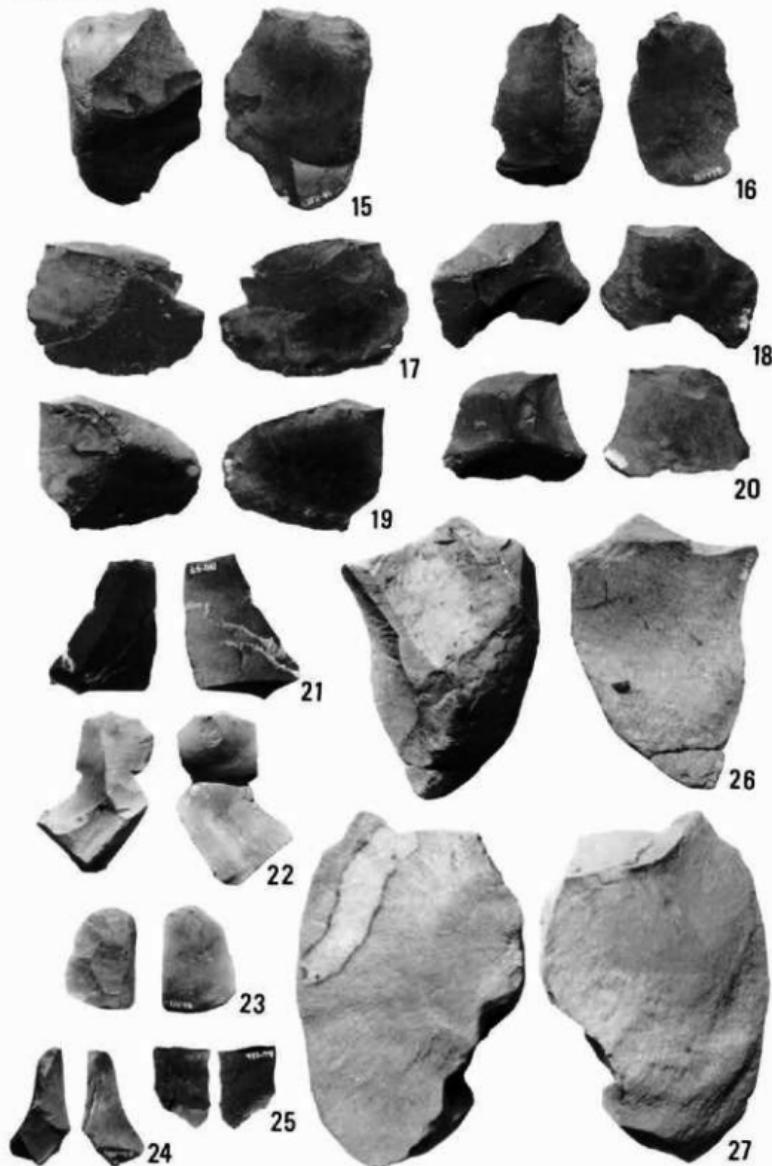
Bユニット出土状況（南西から）



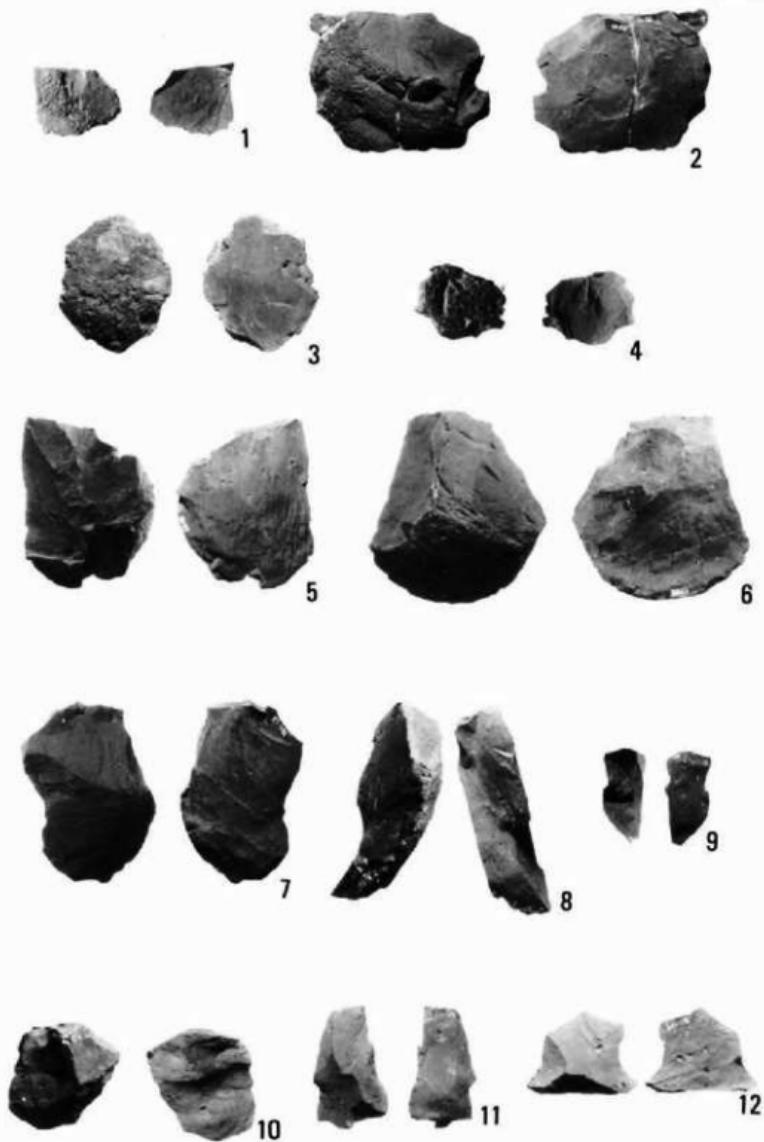
第2号礫群・片面調整尖頭器出土状況



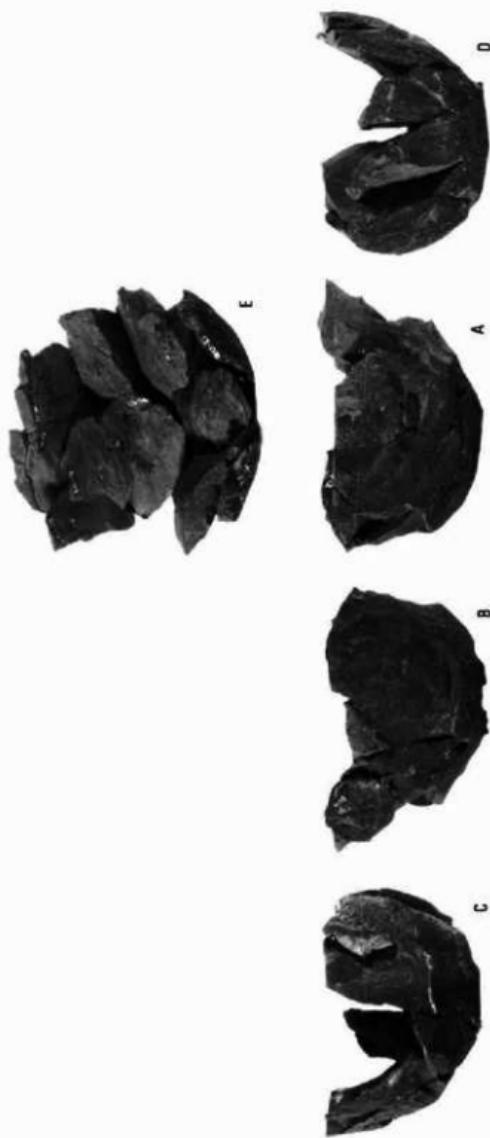
図版第24図



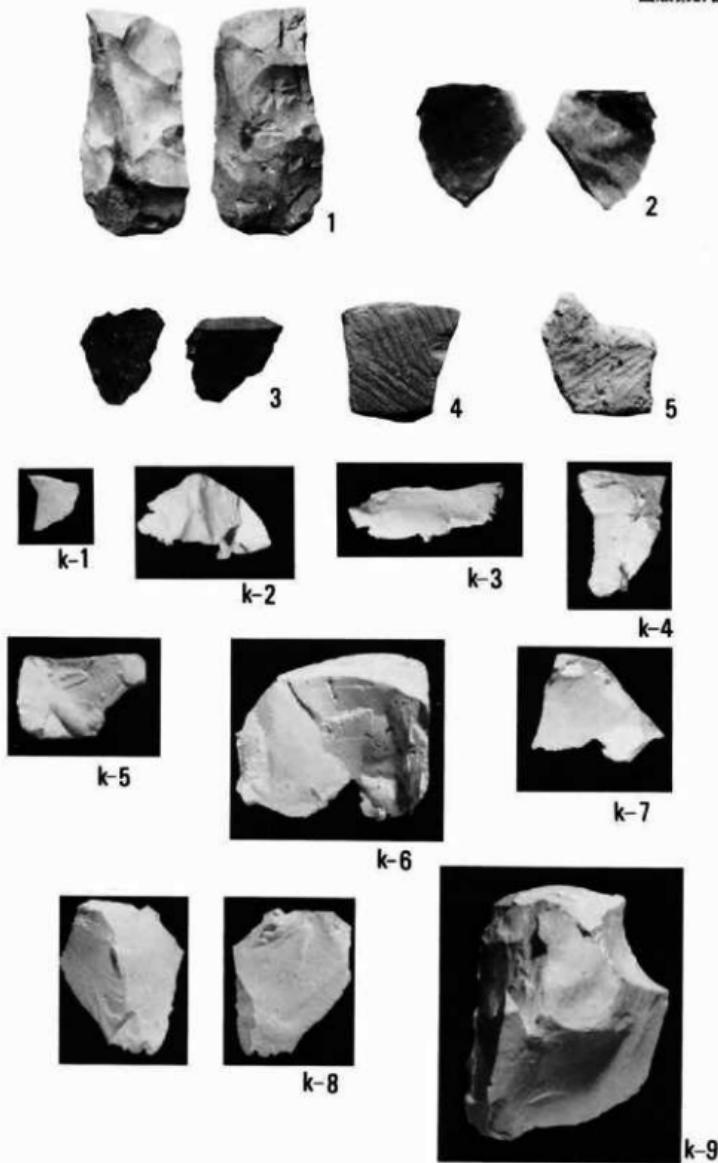
先土器資料 II



母岩別資料 A



母岩別資料 A 接合状態



縄文時代・中世の遺物、欠失剥片

西新田遺跡



確認調査風景



確認調査風景



塙



塙断面

图版第30图



1号方形周溝状遺構



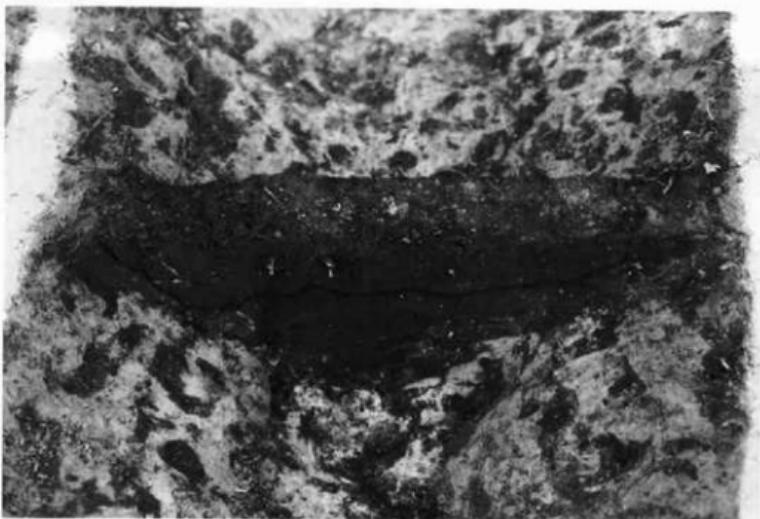
1号方形周溝状遺構



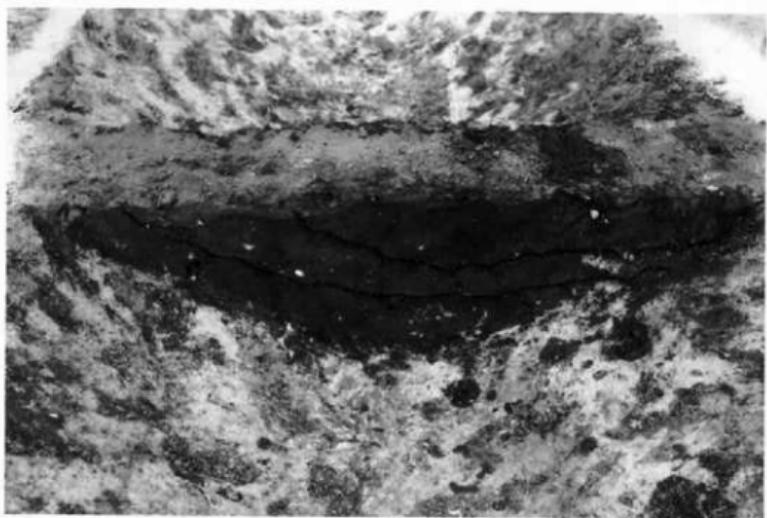
1号方形周溝状遺構短溝



1号方形周溝状遺構短溝



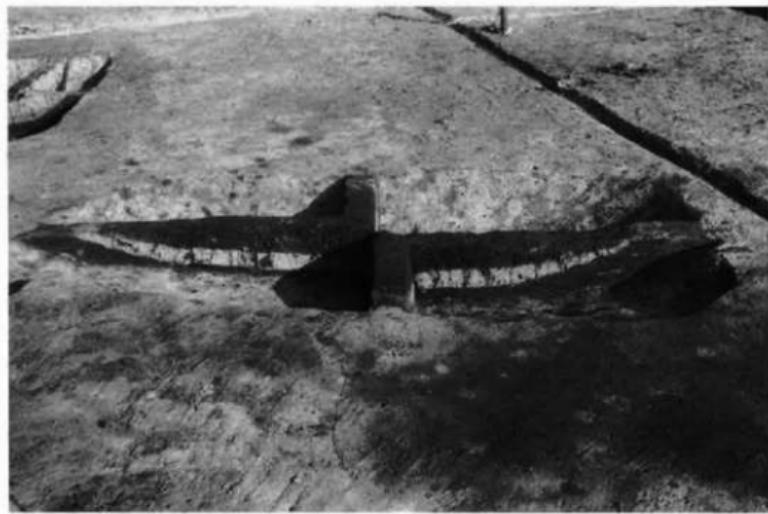
1号方形周溝状遺構長溝



1号方形周溝状遺構長溝



2号方形周溝状遺構



2号方形周溝状遺構短溝

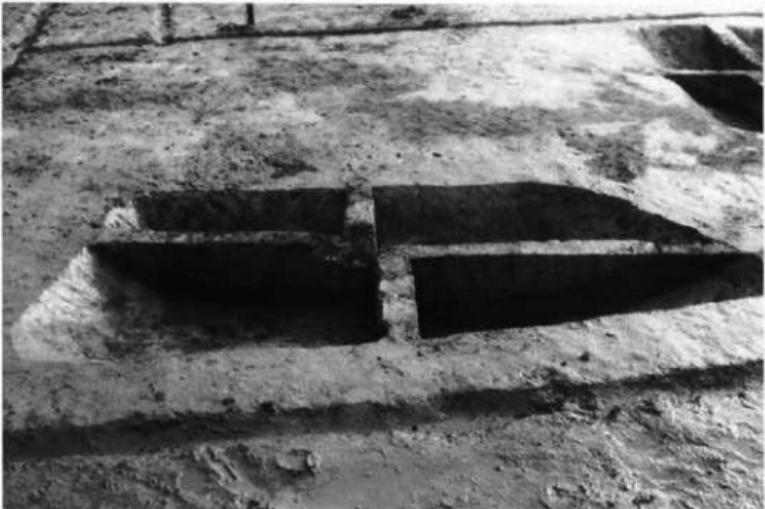
図版第34図



2号方形周溝状造構短溝



2号方形溝状造構短溝



2號方形周溝狀遺構短溝



2號方形周溝狀遺構短溝

図版第36図



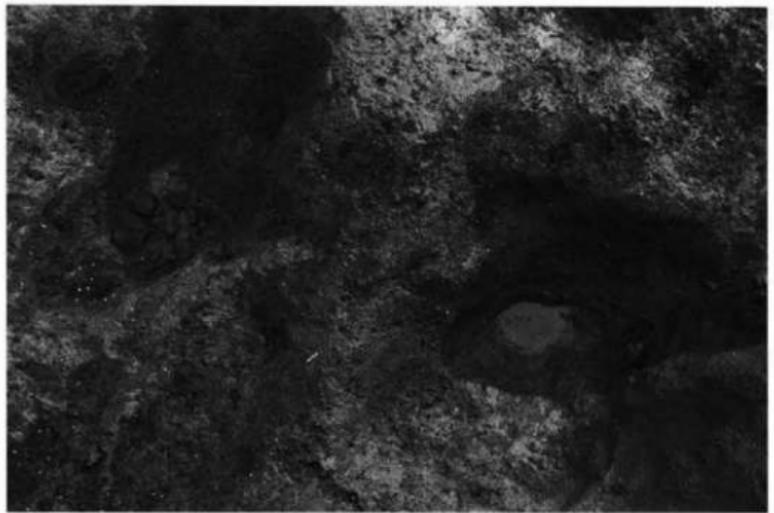
J - 2



J - 2 土層断面

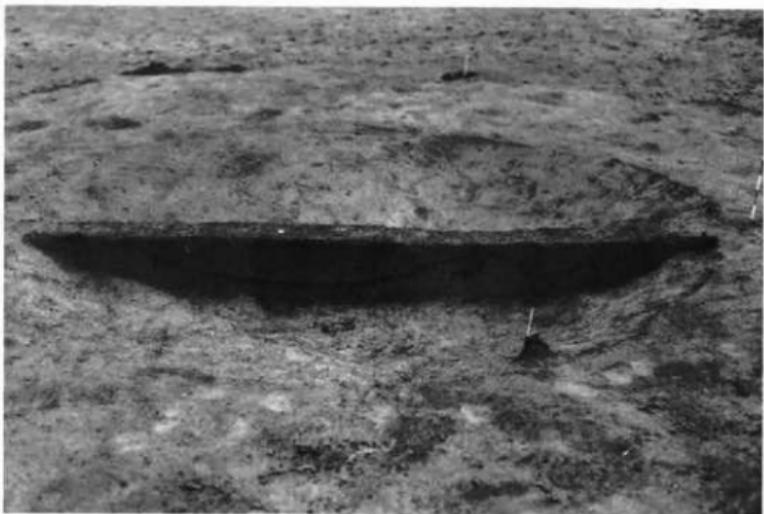


J-5・J-4



J-7・J-6

圖版第38圖



J - 1

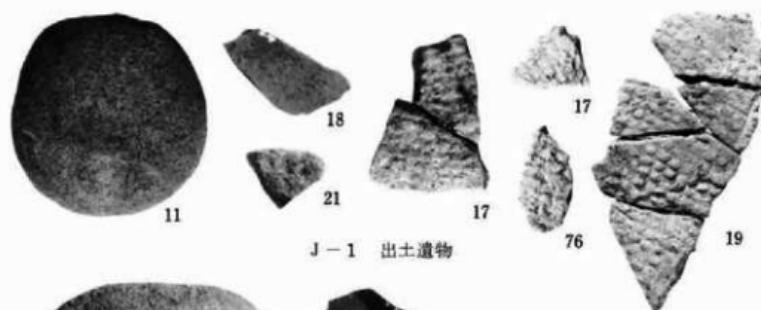


J - 9

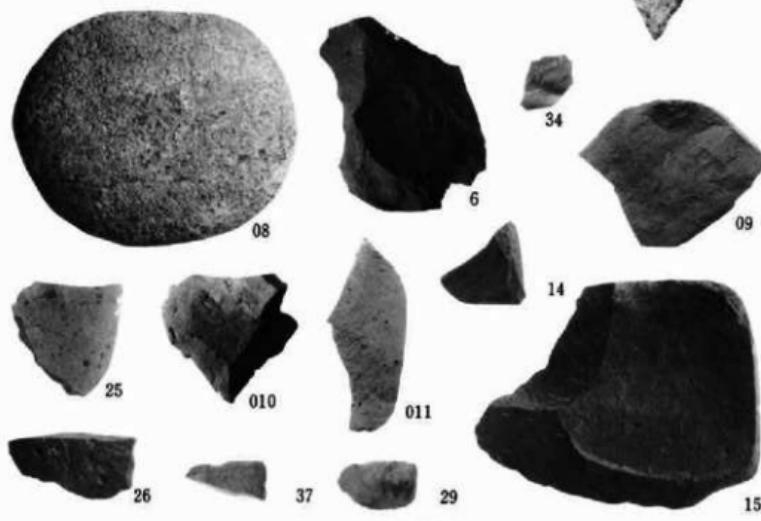
図版第39図



確認調査出土遺物

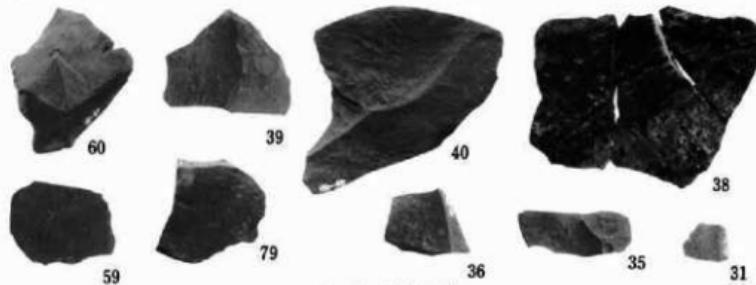


J-1 出土遺物

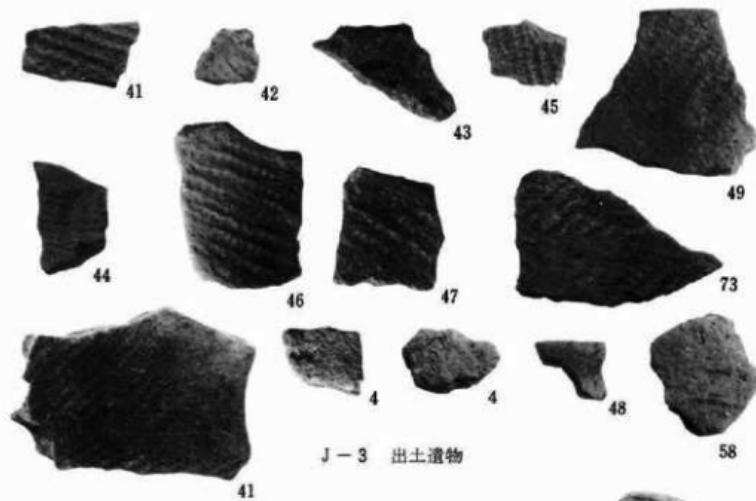


J-2 出土遺物

図版第40図

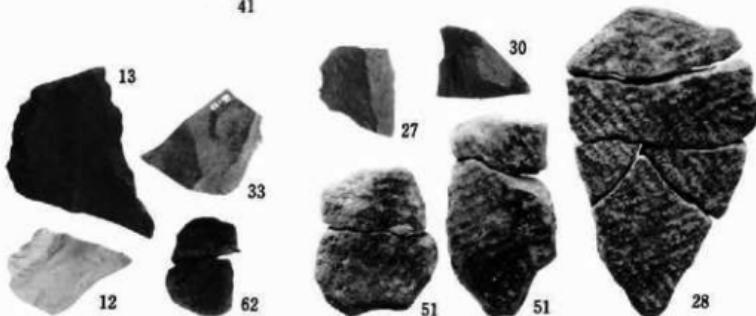


J - 2 出土遺物



J - 3 出土遺物

41

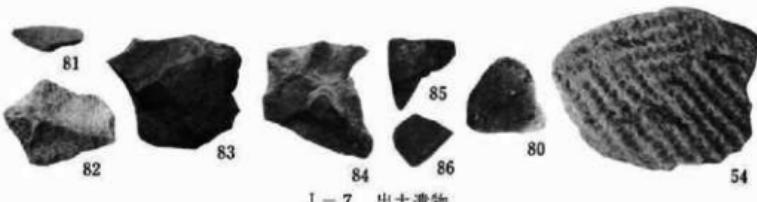


J - 4 出土遺物

J - 5 出土遺物



J - 6 出土遺物

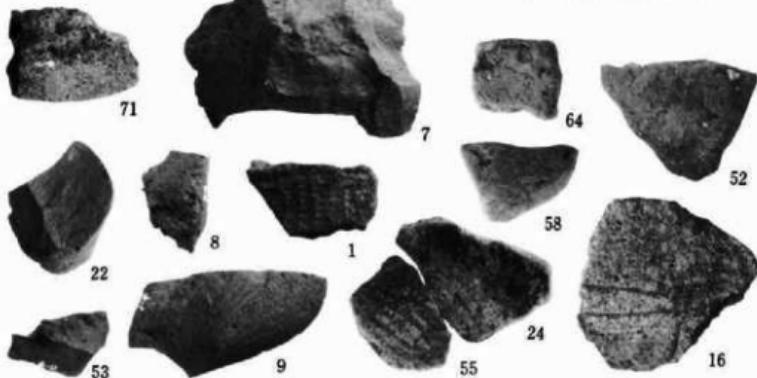


J - 7 出土遺物



J - 8 出土遺物

1号方形周溝状造構出土遺物



造構外出土遺物



発掘風景



発掘風景

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第24  
関越自動車道

## 埋蔵文化財発掘調査報告書

下倉山城跡  
權現平遺跡  
両新田遺跡

昭和60年3月20日印刷  
昭和60年3月30日発行

発行 新潟県教育委員会  
印刷 長谷川印刷